603-113-(1)
1200501530894
603
113

3
コ-2456

新興藝術派叢書

道彈の質物

岡田三郎著

新潮社出版

物質の彈道

岡田三郎著

新興藝術派叢書
新潮社出版

目次

物質の彈道……三
三日間……二六
惡戲……四四
賭……五四
茂次郎の話……六七
銀杏の實……七八
墓口の話……八四
鸚鵡の話……八九
戀と逆上……一〇三

603-113

物質の彈道

岡田三郎

鶏の巣……一〇八
血……一三一
三月變……一七一
母……二二五

物質の彈道

名前をきくと、彼女はミチルと答へた。

顴骨が張つて、顎が尖つて、額はなめらかで、鼻筋がとほつて、さうして顔全體の皮膚はぬめぬめしく蒼白で、――グレコの繪にある女のやうだ。違ふところは眼だ。彼女の黑瞳には猫の眼のやうな野性的の輝きがあつた。白眼は蛋白石のやうな半透明の玻璃光を持つてゐた。

「ミチルつて、どんな字をあてるんだい？」

客が重ねて訊ねる場合、若しも彼女が、十數日來郊外の家に置きざりにしてある男に、――愛着執心は全然無ではあるが、――可哀さうな奴だと、いささかの憐れみ心でも起しかけてゐる時とか、或はまた、海を越えた北の北の生れ故郷の平野の吹雪の風景に淡いノスタルジーでも感じさせられてゐる時ならば、ミチルとは片假名でミチルと書くのだと、心素直に答へもした。が、心荒くれて不平つのれば、キャッシュ・レヂスターの蔭にマダムの顔のないのを見すまし、スタンドに立ちはだかつて年下のバア・テンダーを脅迫してウィスキーを呷る習慣を持つ彼女であつた。さう云ふ酒精注入後の狀態にあつては客に接

する場合は、自然隠待も異らざるを得なかつた。

左の食指と中指を立てて形よく反りしなはせ、その尖端にスプレンディッドを輕く挾んで吸ふのが彼女の裝飾的ポーズであつた。ボックスに客と對坐し、右脚を左脚の上に載せ、その膝頭に左腕の臂をついて猫背になり、顎をつきだし、下唇を受口のやうに白堊の天井へ煙を細く長く吐くのだ。

顏が蒼白なために、唇の紅はきはだつて、妖婦型女性を思はせた。酒精によつて、蛋白石的白眼に多少の充血を來し、客に對する凝視は燃えると形容してもよかつた。かう云ふ場合の彼女の役割を一層濃厚に助長するのは、カルメンならば額にはりつける新月形の髪輪と同じ形の髪輪が、彼女の左の耳朶と顴骨との間にへばりついてあることだ。練油で漆黑に光る髪毛のクエッチョン・マークが蒼白の頰に逆倒してゐるのだ。

ミチルと云ふ名にはどんな文字をあてはめようと、大きにお世話だとでも云はんばかりの露骨な嘲笑が、客の顏に直射されることもあつた。時には鼻先でふふんと笑つて小馬鹿にするやうに彼女は云ひ放つた。「三千留さ！」

とんちんかんな客は、その意味を了解し得なかつた。が、機敏な揚足どりを喜ぶ客は進んで彼女に挑戰した。

「慾ばつてゐやがるなあ！……いつそのこと、十萬留としたらどうだい？」

「へへん」と小鼻をふくらましながら、口を歪めて冷嘲するのがミチルの癖であつた。「おれの事を慾ばつてゐるなんて、ぢや、君はなんだい？　助平ぢやねえか、トマルだなんて、……女ととまる事ばかり考へてらあ、ははは。」

「おめえこそ、年中待合どまりばかりしてるから、それでトマルつてつけた方が、看板になつていいだらうと、……」

「御親切様、それには及ばないよ。そんな看板あげないたつて、憚りながら、あつしが誰とでも、——どこでもだよ、——一緒にとまる事は皆さんが先刻御承知なんだよ。それを知らない奴は阿呆さ。十時過ぎ銀座の裏通へお面をさらせる人間ぢやないやい！」

かうしたミチルの傳法に辟易するものは、そこであつさりと笑つて敗亡し、負け嫌ひのものは論爭を繼續した。さうして多くの場合、論爭は露骨なエロティックの主題にまで波及して漸次議論熱は緩和され、妥協苟合の空氣に談笑して最後は疲勞に終るのが常であつた。

あながちミチル一人にとどまらなかつた。九人の女のうち約半數は初等科だが、殘餘は相當語るに足るものであつた。

彫刻家のモデルに雇はれたことのある擊子は、婦人帽の前庇がぴんと上へまくれたやうな形の紅唇を

性癖で絶えず舌なめずりしながら、熱心に彼女の肉體美を初會の客に必ず吹聽した。殊に脚が自慢のはなはだしいものであつた。レヴィユー全盛で、脚線美が巷間姦しい時代だ。馨子は言葉の説明にあきたりなくつて、××××××××、××××××××××××××××××××××××××××にひたつた。

京子といふのがゐた。睫毛はながく、黒瞳がちで、頰肉がたぷたぷと、口元にしまりのない彼女は、客の要求には殆ど全部的に××を與へ、膝にものれば、××の××××××に進出して來る、硬く、然も脂ぎつてねばねばしい××の熱した神經的の巧緻な運動に××××××××××。

姉妹の女がゐた。銀子は姉で、眞弓は妹だ。銀子は口數少く、上品ぶつても、狐のやうな隱險な狡猾さは、ちらと人を見る細光りの眼にも知れた、眞弓は快活な陽性の斷髪娘だ。銀子ならば耳元で小聲に囁くやうな隱しごとを、眞弓は持前のメッゾソプラノで華やかに語つた。時には膝の出る短小のスカートで、バンッなしの洋裝のこともあつた。さうして彼女は、スタンドの前に立つて、衆人環視のなかに××××××××××××××××××××××××。拒むやうに見せかけて上體を後へ後へとしなはせ、斷髪をゆるがせ、顔をのけぞらしながら。

客のなかにも變種はあつた。

硝子を食ふ男があつた。彼はいつも濃厚な紺地のレンコートにバンドを締め、鍔の垂れた黒の中折帽で、酒氣を帶び、ふらふら足を危ふげに踏みしめながら、蝙蝠の如く夕暮時、まだ客のたてこまない時分を見はからつてやつて來た。

ドアを排してよろめきこむ彼の屈み加減な姿を認めると、初等科の女達は勿論のこと、他の優等生ですら、ミチル以外の女はみんな、互に眼ひき袖ひき、嫌惡と不安の表情で顔をしかめあつては警戒した。番にあたつた女こそ災難だ。人身御供のやうに身を縮め、怖る怖る彼のボックスに進んで行くのだ。

強度の酒精分を含有するカクテルのグラスが、五つぐらゐ空虛になつて彼の前に並ぶ頃から、彼は一つづつグラスを嚙りはじめた。兩臂を張り、蟇のやうにテーブルに押しかぶさつて、漏斗狀のカクテル・グラスの緣を、かりッ、かりッと、腦神經が揉錐で刺されるやうにうづく異樣の音響で嚙り碎くのだが、漸次に、唇、舌端に傷をうけて、血はにじみだす。――三つ目にもなれば、血は顎までも垂れる、――五つを完全に貪りつくせば、唾液はことごとく鮮血、鼻の先、頰、手指みな血まみれ、顎まで垂れた血線は、わざと顔を仰向けるためにいよいよ咽喉佛までくだつて、ソフトカラーを眞紅に染める。

女達は勿論遠ざかつて、そばにはゐない。元來彼は、憂鬱なる沈默家で、ただ一人飲み、ただ一人グラスを嚙るのだ。が、所期の目的を達し終つた頃に、今までどんよりと曇つてゐた眼からは、たちまちに生き生きとした爛光を發し、暗かつた顔は秋の朝のやうに徐徐に晴朗となり、催情的の微笑がその唇

邊に浮びあがるのだ。

人肉を貪食したあとのやうな血みどろの口を歪めて笑ふ怪奇な人間に、彼は變化してゐた。彼は××××××××あつた。その彼が、偶然の機會に、硝子を貪り嚙り、それによる口傷出血の刺戟と味覺とで、はからずも、別種の、强烈にして陶醉的な×××××の××××れることを發見したのだ。

常例として彼は女を呼び、握手を强要した。女達も不快を感じながら、その握手には必ず高價の報酬が伴ふので、應ずることになつてゐた。それは單純の握手ではなかつた。女の手を×××××××××××、その癲癇狂的に顫動する指先で、×××××× 掌の中央を快速に××しては×××しむのだ。その間彼は、自分で演奏する纖細低調の音樂に耳を寄せるかの如く頭を傾け、眼をかたく閉ぢてゐるのだが、陶醉のあまり、時には彼の指先は盲目的に女の前腕から×××××××することもあつた。この場合、彼の欲望を最も快適に滿足させるのは京子であつた。從つて彼女は、誰よりも多くの報酬を得ることが出來た。

或時のこと、彼はつひに眞弓に接吻を要求した。彼は顫へる指先で、五枚の紙幣を眞弓の眼前に數へて見せた。

眞弓は惱ましい眼で、彼の手中にある紙幣と、彼の血まみれの顏とを見くらべてから、ハンケチを彼につきつけた。

「いいわ。口のまはりを綺麗に拭いたら、××××××。」

彼は希望と期待の興奮でふるぶる痙攣する手にハンケチを取るなり早く、既に乾きかけてゐる血痕を力强く拭ひはじめた。が、拭ひ淸められた唇から、新たに血はまた止めどなく流れだした。眞弓は顫髮を横にゆるがした。

「おお、いや！　××××××！」

横つ飛びに彼女は女達の腰かけてゐる窓下へ行つて、先輩のミチルに訴へた。

「へん、案外潔癖なんだね。血ぐらゐなんだい！」ミチルは立ちあがつて、まともに眞弓をたしなめた。

「だが、云つとくがね、五十圓なんて半端なめくされ金で、うんて云つちや沽券にかかはるよ。なんに限らずね。」

左足を出すと腰部と臀部とが左にすうつと搖れ、右足を出すとそいつが右にすうつと搖れる、——さう云ふ特徵のある歩きぶりで、ミチルは緩緩とボックスに進んで行つた。さうしてテーブルの兩端に手をついて、彼の上に×××××。

「どう？……あたしぢや？……だけど、倍額でなくつちや、いやよ。」

男は薄氣味わるくにやりと笑つて、例の痙攣する手で紙幣を掴みだすと、あわただしく數へて要求額をミチルの手に握らせた。

「そ、そのかは、かはり、……」と、彼は片頰をひきつらして、烈しく吃りながら云ひだした。彼にも要求があつた。嚙りのこりのグラスをもう一度嚙つて、もつと出血を促したところで、それを拭かずにやつてくれと云ふのだ。

眉間に皺をよせ、凄い上眼づかひでぢつと考へてゐたミチルは、握つてゐた紙幣を帶の間へぐつと深く入れると決然うなづいた。

さう云ふ不時の多額な收入が有つた場合、ミチルはきまつて一日二日の休養をマダムに申出た、またどこからともなく電報が來て、そのために勤めを休むこともあつた。時には一週間も續いて缺勤した。

多少の教養があつて、積極的で、俠氣があつて、さうしてエロティックな分子を濃厚に持つてゐるミチルは、音樂家、小說家、映畫俳優等の常連の興味を、ことごとく自分一身に蒐めることに成功した。だから、ドアを排してはひるそれらの客が、一見して、グリーンの照明に鮮かに浮く大植木鉢のヒマラヤ杉の蔭かどこかに、蒼白い顏貌に黑瞳をぢつと瞠つて微笑で巡へるミチルの姿を認め得なかつたなら、失望するのも當然であつた。彼等はミチルを三日見なければ、多くは足を絕つた。

マダムはまだ商賣にも經驗はあさく、年も若いし、それに美貌が自慢で、常連の客と見ればキャッシュ・レヂスターの蔭からちよんちよんと出て來ては女達をおしのけ、獨占的に振舞つた。女達は蔭で、マダ

ムは嫉妬ぶかいと非難した。事實に於てマダムは嫉妬ぶかかつた。殊にミチルに對して最もひどかつた。が、ミチルが一週間やすんで、そのために大事な常連がぱつたり姿を見せなくなつた時には、さすがのマダムも折れて、自身で郊外のミチルの家まで出かけて行つた。

戸をあけてはひると、玄關横の襖があいたままで、もう晝すぎだと云ふのに夜具の裾が見えてゐた。

マダムは或場面を想像して躊躇したが、思ひきつて案內を乞うた。

力のない空咳をして、床から人の起きあがる氣配がした。やがて出て來たのは、首をまげて鴨居をくぐるほど背の高い青年であつた。顏は土け色で、頰は痩せこけ、眼窩は深く落ち窪んでゐた。

マダムは來意を告げた。上體を眞直にしてゐては倒れでもするやうに、青年は兩手を疊について前屈みになつてゐたが、聞いてゐるうちにだんだん顏をもたげ、マダムを無言裡に叱責するかの如く、その大きな眼で物凄く彼女を睨みあげた。

「僕は電報なんかうつた覺えはありません。誰かそれは外の男からでせう。この通り、僕は病氣で寢たきりなんです。だから、時には歸つて來てくれてもいいだらうと思つて、手紙を何度もやるんですが、一度だつて返事さへよこさないんです。友人にも行つてもらふんですが、いつも忙しい忙しいで、ただお金をことづかつて來るだけで、……一體そんなに忙しいんですか、あなたのとろは？」

青年の激越な態度にマダムは辟易して、逃げてでも歸りたい氣持であつた。

「最初は通ひでいいと云ふ條件ぢやなかつたですか？　どうして住込みになつたんです？　それも、あれ一人が住込みなんださうですね。マダムが是非さうしてくれと頼むので、嫌だけれども仕方がないと云つてゐましたが、本當ですか？」

「是非にと頼んだ譯ぢやないんですのよ。住込みでもいいとミチルさんが云ふので、それでは、看板すぎ二時三時までお客がしよつちゆうあるんですからね、――殊にミチルさん目當の常連が多いんです、――ですから、……でも、あなたも御承諾なさつたんぢやありませんの？」

「承諾なんか與へるものですか。そんな所はよしてしまへと云つたくらゐなんです。息の絶えかけてゐる病人ぢやありませんか、僕は。此頃は小春日和で、どうやら命は保つてゐますが、多枯れの季節にはひつて御覽なさい。僕はおそろしいんです。」

彼はがつくりと項垂れた。その煽りで一遍に額に亂れかぶさる長髪の異形にマダムは顏をひそめながら、歸りの口上を思案した。

「ミチルさんによく云つておきますわ。なんなら、今度一緒に連れて來て上げませうか？」

青年は然し顏もあげずに、絶望的に頭を搖りうごかした。

「駄目なんです、もう。本當を云へば、僕はあれに、何も要求する權利はないんです。僕はむしろ、あの女によつて生命と生活を支へられてゐることを恥ぢなければならないんです。あの女からの物質的援

助を斷然拒絶すべきなんです。あの女は僕を、最初から少しも愛してなんかゐなかつたんですからね。それを知つたのは、極く最近です。あの女自身の口から宣言されたんです。さう云ふ宣言を與へながら、物質的援助だけは繼續してるんです。つまり、僕を物質的に支配して、奴隸にしようとしてゐるんです。……」

つぎつぎに語りつづける青年の長物語に、マダムは無下に歸ることも出來なかつた。

店にはすでに灯ははひつてゐた。マダムは疲れた身體をキャッシュ・レヂスター前の高い腰掛におろし、片側の壁にもたれて額をおさへながら、すぐ横手でカクテルシェーカーを勢よく上下に振り動かしてゐるバア・テンダーの動作を、物憂げに眺めてゐた。

あの青年との二時間に近い對談によつて、マダムは物の見方が變つたやうな氣がした。彼女の眼前にあつて客を相手に、或は陽氣な談笑で、或はコケティッシュな姿態で働き動いてゐる女達のそれぞれの生活に對する、今までの單純な判斷はくつがへされた。勿論その單純な判斷に置き換へらるべき新たな確然たる判斷を、マダムは僅か三四時間の間に獲得したのではなかつた。ただ、少くとも、彼女は懷疑的にならざるを得なかつたのだ。

「ミチルはどうしたい？」

のつそりとスタンドへ來ておしかぶさりながら、マダムに問ひかける客も五人や六人ではなかつた。

「ええ、今日行つて見ましたのよ。さうしたら風をひいたと云つて、寢てゐましたわ。もういいやうですけれど、あと一日二日休んで大事をとつた方がいいと思ひまして……」

そんなふうにマダムはとりなしておいた。

翌日の晝すぎ、ちやうどマダムが、コック場につづく茶の間の上り框に腰をかけて、コック達と雜談をかはしてゐるところへ、裏口から、つひぞ見たこともない臙脂色の錦紗の羽織でミチルが歸つて來た。

それだけでも、マダムの反感を煽るに十分であつた。まして、いつも蒼白く、顎先の鋭いミチルの痩顏が、一段と憔悴して、連日連夜の戀愛享樂が、咄嗟の間にマダムに想像されて、汚物をでも見せつけられたやうに澁面をつくつた。

「隨分顏色が惡いぢやないの。どうしたのさ、一體？」

「すみません。胃痙攣を起しちやつたんです。」

「ウィスキーだね？」

「ええ、一本からにしちやつたの。さうしたら、とても吐いちやつて、おしまひには血までよ。」

「一人で？」

「いいえ、近所にゐる青年達と。でも、みんな男の癖にからつきし意氣地がないつて、ありやしないのよ。だもんだから、ミチルさんのお手並拜見さしてあげようとばかりに……」

「ちよいと、こちらへおいで。」

話なかばにマダムは上へあがつて、奥の化粧部屋へ行つた。ついて來たミチルに後の襖をしめさせ、鏡臺の前に膝をつきつけんばかりに對坐した。

いくらかつれて險のあるマダムの眼は、一層きつく光つた。

「どうしてお前さんは、そんな見えすいた嘘を云ふの？　昨日お前さんのうちへ行つて來たんですよ。」

ミチルは口先を尖らして、眼をくるくるさせた。

「困るわ、マダムにあんな所へ行かれちや。」

「さうでせうよ。あんな病人をおきざりにして、好きな人と遊びまはつてゐるお前さんの不人情さ加減が解るからね。」

「不人情さ加減て、ぢやマダムは、あの人とあたしとの關係知つてるんですか？」

「横濱時代からの關係だつて云ふぢやないの。何もかも殘らず聞いたんだよ。お前さんがちやぶやにゐたことも。」

「ちやぶやにゐたつていいぢやないの！」

「誰もいけないとは云ひやしませんよ。ただね、さう云ふ深い關係のある人を、――然も大病人ぢやな

いの。まるで骨と皮ばかりだよ。もつと親切に面倒見てやるのが人情だらうと思ふのさ。看病のためと云ふなら、一週間やすまふと十日やすまふと、誰も文句は云ひやしないんだからね。それを、看病どころか、遊びまはつてお酒を飲んで、胃痙攣を起すなんて……罰よ。」

「マダムは隨分單純ねえ。一方の話だけを聞いて、それで以てすぐ全體を批評するのは片手落だと思ふわ。もともと戀愛關係ではじまつた關係ぢやないんですよ。あの人は横濱で、つまらない職人みたいなことをやつてゐたのよ。洋畫をやりたいと云ふの。それぢや、あたしが勉強さしてあげようと云ふ事になつて、東京へ來て、うちを持つて、ああやつて洋畫の勉強してるうちに、だんだんからだが惡くなつたのよ。醫者にはかけてゐるし、女中もちやんとつけてやつてあるし、それでも文句があるかしら？」

「だつてお前さん、夫婦ぢやないの？　そんな情愛のない話つてないよ。」

「だから戀愛關係ぢやないつて、はじめからことわつたぢやありませんか。」

「戀愛でないにしても、夫婦關係があるんだもの。」

「夫婦關係と云へば夫婦關係のやうなものですけれど、何でもないと思ふわ。さう云ふ關係があるから」と云つて、何もお互に生活上束縛しあふ必要はない筈よ。あの人が要求するから、これも恩惠と思つて、あたしちつとも興味なんかないんだけど、應じてゐるのよ。そいつがまた、あの病人と來ては×いんでね。一つはそれで、あたしあの家を出たの。」

「以前一緒に暮らしてゐた人があつたんだつてね？」

「ええ、あつてよ。」

「その人とまた會つてるんぢやないかつて、昨日云つてゐてよ。」

「ふん、お馬鹿さんだね！　あたしを捨てて行つた奴のあとなんか、執念ぶかく追ひまはるやうな女だか女でないか、さう云ふ判斷もつかないやうな間抜なのよ、あの人は。それをまた眞にうけるマダムもマダムだと思ふわ。マダムなんか、まるで世間知らずのお孃さんよ。よくまあ思ひきつて、こんな商賣はじめたものねえ。今にだんだんと、世間の凄いところがマダムの前に現れて來るわ。あたしの胸のなかだつて、かうすつぱり切り裂いて見せたら、マダムの思ひがけない事ばかりで、きつと肝をつぶすと思ふわ。」

五つも年下のミチルにすつかり毒氣をぬかれた形で、マダムは沈默した。

全市的連日の祝典で、街々は提灯と國旗と造花の裝飾を施され、夜の酒場はジャズ音樂の跳梁をほしいままにした。

高價な接吻を買つて以來、あの、硝子を食ふ男は、夕暮時に限らず、深夜にもたびたび瞻跟としてやつて來た。多くの場合、彼はボックスの壁寄りの隅に背をまるめてぢつと項垂れ、思案と沈默に時をすご

した。ミチルが來て言葉をかけると、にはかに眼を輝かし、生き生きとした表情で應ずるのだが、彼女が去ると再び頭をさげて死人の如き沈默に陷つた。

或夜、祝典宴會の流れらしい七八人の青年紳士が、手に手に小旗を打振り、口笛のジャズを合奏しながら威勢よくはひつて來た。さうしてスタンド前の空場で、彼等は喧噪なダンスをはじめた。石疊に靴の擦れる雜音は人々の神經をみだした。乾ききつた微粒の塵埃は空氣を濁して人人の味覺をそこなつた。そちこちの席から舌打やら嘲罵やらが起つたが、彼等の一團の耳にははひるべくもなかつた。

硝子を食ふ男は物憂さうに眼を開いて、彼等の狂態を眺めやつてゐると、指揮者格のつもりで、椅子の上に乘つて小旗を振つてゐた男が、はずみでその小旗を振り飛ばしたところが、そいつが彼のテーブルに飛んど來て、カクテルのグラスをひつくり返した。彼はびくりと眉を動かしたが、小旗をとつて二つに折るなり、窓から拋り出しておいて、そのまま眼を閉じた。

間もなく彼のテーブルは、ぐらと搖れた。薄眼をひらいて見ると、彼等の一組が、踊りながら故意に腰をテーブルにぶつつけてゐるのだ。その一人は、さつき椅子にあがつて小旗を振りまはしてゐた奴だ。

硝子を食ふ男は、席からにゆッと立ちあがると、ボックスを一跨ぎに出て、相手とまともに顏をあはした。彼は唇をひきつらし、齒ぎしりしてゐた。

罵倒してやらうと焦れば焦るほど吃つて、唇がただわなわな震へるだけであつた。咄嗟に彼は相手

の顎を拳でつきあげた。同時に彼も横合から腰を蹴られた。亂鬪がはじまつた。テーブルは倒れ、椅子は振りあげられ、硝子は割れた。

その亂鬪のなかへ、ミチルは下唇を嚙みながら馬のやうな鼻息で、頭がこはれ袖がちぎれるのも構はず、ぐいぐいと割つてはひつた。さうして、摑みあつてゐる二人の間へ自分のからだを捩ぢこんだ。

「およしよ、見つともないぢやないか！　なんだ君達は、たつた一人の人間を相手に七人も八人もで總がかりになるなんて。やるなら一人と一人でやれやいいんだ。それに、こんな場所でやられちゃ、はたが迷惑だよ。表へ出ておやり！」

「向うが先に手出しをしたんだ！」

「きまつてらあね。誰だつて手出しがしたくならあ。こんな所でダンスなんかされたんぢや、誰だつてむかつ腹が立つよ。君達がいけねえんだ。喧嘩の種は君達が蒔いたんだから、擲られた奴は擲られ損だと思つたがいいさ。……ふふん、なんにしても可哀さうな連中さね、ダンスホールに行くお金を持たないなんて！」

「何を！」

「何をぢやないや。さう云はれてくやしかつたら、酒場へ來てダンスなんかしないがいいんだ！」

コック場の男達やマダムが出て來て、いきり立つた者もなだめられ、やうやく騷ぎもをさまつた時には、

硝子を食ふ男とミチルの姿は酒場に見えなかつた。

ミチルは彼を扶けて建築中のビルディングの足場が組んである暗い横町をよろめきながら行つた。彼は全身の重さをミチルにゆだねて、ともすれば躓きさうであつたが、たうとう盛土のところでぐつたり膝をついてしまつた。ミチルも仕方なしにそこへしやがんだ。

「どうしたのよ？　そんなにひどくやられたの？　醫者へ行きませうか？」

「いや、大丈夫だ。興奮したあとは、いつも、かうなんだ。肉體的の、疲勞ぢやない。精神的に、駄目になつちやうんだ。」

「ぢや、暫くぢつとしてゐれやいいの？」

「ううん、アルコール！」

「ぢや、どこかへ行つて飲みませうよ。」

「いや、今夜は歸る。通りまで、連れてつてくれ。タキシーを拾ふから。……だが、君は、ぶたれやしなかつた？」

「いいえ。……でも、あんた隨分無鐵砲ね。たつた一人でもつて、いきなり、……あたし、胸がすうつとしたわ。あんたをあんな人ぢやないと思つてゐた。」

「行かう？　立たしてくれ！」

が、ミチルはいきなり彼を強く抱きしめた。彼は息もつけない苦しさで、ミチルの狂氣じみた接吻の間ぢゆう、咽喉の奥でうなりつづけてゐた。

病氣療養の名で、ミチルは酒場をしりぞいた。二人のバア・テンダーのうち、若い方の、父親を養つてゐると云ふ實直なのが、暇を貰つて出ていつた。女達にも變化はあつた。銀子と眞弓の姉妹は同日に去つた。つづいて脚線美自慢の馨子もゐなくなつた。

ミチルが、反對側の銀座裏に酒場を開いたと云ふ噂は、間もなくマダムの耳にはひつた。金主は硝子を食ふ男らしいとのことであつた。若いバア・テンダーと女三人、みんなミチルにひつこぬかれたと知つた時には、マダムは眼をつりあげてくやしがつた。常連はばつたり足を絶つた。

そこへ或日のこと、長髪の病人が、胸を曲げ、ステッキに縋つてやつて來た。キャッシュ・レヂスターの蔭からそれを見たマダムは、ちりけもとがぞくぞく寒くなつた。

瞬きもしない、氣味わるく据つた眼で、彼は一人一人女達の顏をぢろぢろ見まはしてから、最後にマダムを見つけて、老人のやうに下駄をひきずりながらスタンドへ行つた。

「ミチルはゐませんか？」

「もうゐません、暇をもらつて出て行きましたよ。」

そつけないマダムの挨拶に、彼は齒をくひしばつた。

「どこへ行つたか知りませんか？」

「ミチルはとても不人情者よ。うちの女達やボーイをひつこぬいて行つて、しやあしやあと酒場をはじめてるんですもの。あんたのやうな病人を捨てるくらゐのことは、朝飯前だわ。教へてあげますから、そこへ行つて、うんと恨みを云つてやんなさい。」

「僕はもうぢき死ぬんだから、あいつを殺してから、自殺しようかとも思つてるんだが。」

ぶつぶつ云ひながら、ミチルの酒場の所在をきいて出て行つたかと思ふと、またスタンドへ戻つて來た。

「やつぱり以前の男と一緒にゐるらしいですよ。僕の友人が、こなひだ池袋の方へ寫生に行つた時、あいつの姿を見かけたんださうです。解らないやうに、そつと跡をつけて、その家を見屆けて來てくれたんです。」

「ぢや、そこへ押しかけて行つたらいいぢやありませんか。男ですもの、それくらゐの勇氣がなくちや。」

「行くには行くつもりですがね、先づあの女に會つてから、……でないと、女のゐないところへ行つてもはじまりませんからね。ついでに、その男も殺してやらうかと思つてるんです。」

にやりと痴呆的な笑ひを殘して、彼は猫背で咳をしながら出て行つた。

ミチルはまだ酒場に出てゐなかつた。大概夕方でなければ來ないと云ふので、彼はそとへ出て太陽の高さを測定してから、大丈夫間にあふと見當をつけて電車に乘つた。

目指す家の潛門をあけてはひると、庭に面した緣先に腰をかけてゐるミチルとすぐに顏をあはした。同時に、彼女の背にもたれかかつて、遊戯的にからだを搖つてゐる男の子をも。

まぎれもなく男がゐるに違ひないと、彼は勢こんで庭に闖入した。が、そこの茶の間に、火鉢をさしはさんでゐるのは、老人と老女であつた。老人はのびやかに煙管から煙を吐いてゐた。

男の姿の見えないのに彼はぢりぢりして、何か云ひかけようとしたが、激しく咳こんで、緣側に腰をかけるなり、ステッキに額をのせて苦しみつづけた。

彼はミチルの冷酷な罵詈を耳にした。誰か男と同棲してゐると思つて、やつて來たのだらうと、ミチルは圖星をさして嘲笑つた。

「その子は誰の子だ？」彼は咳がをさまると、嗄れ聲でつつかかつた。

「誰の子でもない、あたしの子さ。

「父親はどうした！」

「馬鹿だね。あたしはそいつに捨てられたんだよ。何度も云つたぢやないか。女の腐つたやうな事を、ねちねち何時までも云ふもんぢやないわ。あそこにゐるのが、あたしの伯父さん伯母さんさ。この子を育ててもらつてるんだよ。」

「酒場は誰に出してもらつたんだ？」

「うるさいね。誰に出してもらはうと、あたしの勝手さ。あたしは女の腕一つで、ここの家のかかりも出すんだし、お前さんにだつてお金をかけてるんぢやないか。」

「僕はもうぢきに死ぬんだから、今日は君を殺すつもりで來たんだよ。あそこのマダムにも、きつぱりさう云つて來た。マダムも、それがいいつて云つたぜ。」

「ふん、あんな世間知らずの女に、何が解るもんですか。こなひだだつて、この子が猩紅熱にかかつて、駒込の病院に入院したのよ。一週間、あたし殆ど寢ずに看護したのよ。さうして、お店へ出て行つて、お酒飲んで胃痙攣を起したんだつて云ふと、眞にうけちやつて、病人をうつちやらかしにして好きな人と遊びまはつた罰だつてさ。隨分あまちやんさね。お前さんだつてさうだわ。」

二十分後には、ミチルと彼は停車場へ行く道を歩いてゐた。太陽は傾きかけて、冷い風が埃をまいて吹きつける度に、彼はこほんこほん咳をした。

「僕はもう死ぬよ。」

顏を、さも眞理を讀むやうに凝視し、……私は彼の熱心な凝視に辟易して、やがては彼に致命傷を與へるにちがひないところの、私がその時語りつつあつた一つの例を、幾度中止しようと思つたか知れないが、語りをはつた、すると彼は、うなづき、と云ふよりは、空虛な、首の小運動を反射的に連續させた後、藍紙をはりまはしたやうな空をさんらんと切り拔く太陽に、熟考の視點を凝らした。

「ほんたうにあつたことかい？」一二分の後、彼は、やはり太陽を見つけたまま私に問ひかけた。

「ほんたうにあつたことだ。その本を、僕は持つてゐるんだ。なんなら來て見るがいい。"Causses Salées" と云ふ本だ。今話したやうな公開禁止の訴訟事件を蒐集したものだ。その一つに "L'Endormie Violée" と云ふのがある。それが、今僕の話したものだ。ちやうど、君の細君の事件にあてはまるんだ。……彼女は熟睡しきつてゐたので、何も知らなかつた。が、あとで眼をさまして見るとなんとなく夢心地のやうなものが殘つてゐる。それは第一、痕跡はあきらかに殘つてゐる、それだのに、その行爲の主體たるべき夫が、彼女の傍に寢てゐない。はじめて、侵入者のあつたことに氣づく、……と、君は解釋しないんだらうが、そんなことは、全然あり得ないことだと、僕は云ふんだ。……」

私がしやべつてゐる間に、彼は輕い呻き聲をたてながら、うしろへあふのけに寢ころんだ。私は、これと云ふこともなしに、一本の枯草をちぎり、それに話しかけるやうにしてしやべりつゞけた。彼を苦めることに、一種の愉快を感じるやうになつてゐた。

「……かりに、君の細君に、いついつかの晩こんなことがあつたらうと詰問したとする。細君はとぼけるにちがひない。泣くにちがひない。熟睡してゐたので、何も知らなかつたと云ふにちがひない。いや、そんなことされた覺えはないと、否定するにちがひない。痕跡なんか、ちつとも認めないと云ふにちがひない。怒るにちがひない。……その "Causes Salés" の中にある "L'Endormie Violée" では、君の細君の場合とはちよつとちがふ。女は眠つてゐたので、はじめのうちはちつとも知らなかつた。が、しまひに眼がさめた。夫だと思つた。

「さう云ふことは、あり得ないと云ふんだね？」變な聲だと思つて、見ると、彼は帽子を顔に載せてゐた。

「うん、判決は、　ではなく　だと云ふんだ。どんなに暗いなかでも、夫のからだ、様子、しぐさを、他人のからだ、様子、しぐさとまちがへることはないと云ふのだ。……」

「それぢや……」と、彼は顔の帽子をとるなり、起きあがり意氣ごんで、私にせまつた。「それぢや、いぢやないか。僕の女房は、つまり、僕だつてことを、あの暗やみのなかでもちやんと知つてゐたと云ふことになるぢやないか。」

私は、嘲弄の微笑で、首を横に振つた。……「ちがふ。僕が "L'Endormie Violée" を例にあげたのは、さう云ふ場合眠つてゐて知らなかつたなどと云ふことは決してあり得ないと云ふことを證明するためだつたのさ。だから、『どんなに暗いなかでも、夫のからだ、様子、しぐさを、他人のからだ、様子、しぐさとちがへることはない』と云ふ、第二段の方は、僕はあづかり知らないよ。」

「それは卑怯だ。君は強ひて、僕を苦めようとしてゐる。さうさ、考へて見ろ！　おなじ一つの事件を例にとつておきながら、第一段の方だけを僕の事件にあてはめ、第二段の方を除外するなんて、……」彼は激した。

私は笑ひながら、「それぢや、君は、君は君自身の家へ、あだかも闖入者のやうにおしいり、君自身の細君に對して、　それだのに、細君の方では、はじめはよく眠つてゐたので知らなかつた、やがて知つた、が、暗かつたとは云へ、細君は君を闖入者とは思はず、

と云ふんだね？　たしかに、さう信じると云ふんだね？……さう、一時は、細君もまつたく君だと思ひこんだかも知れない。だが、その思ひこみかたは、極めて薄弱なものだつたんだ。なぜなら、最後に、君が君自身の家から、ちやうど闖入者が逃げだすやうに逃げだした、その時、君の細君は、どう思つたと思ふ？　君は、細君は徹頭徹尾眠つてゐたものと信じたがつてゐる。しかしそれは信じ得べからざることだ。彼女は眼ざめてゐた。かりに一歩を譲つて、その時は眼ざめてゐなかつたが、後刻眼ざめたとする。

ところが、傍に君がゐ

ない、君は數時間後、ほとんど明けがたになつてから家へ歸つた。戸締りがしてあつた。あのことがあつたあとで、細君が起きて戸締りしたにきまつてゐる。君の歸りが遲くなると思つた。その時細君は、さつきの男を、君だと信じてゐたらうか？　君が一度家へ戻つて來て、すぐにまた外出したのだと細君は思つてゐたらうか？」

「……」

「思つてはゐなかつたんだ。君が戸を叩くと、細君が起きて來て、戸をあけた。たゞ、お歸りなさいと云つただけで、君を廊へ入れた。或はその時、まだ、細君は、さつきの男を君だと信じてゐたとする、少くとも、君であつてくれればいいと願つてゐたとする、が、細君から云ひだすわけにはいかない。それで、君が何か云ふかと心待ちに待つてゐる。君は何も云はない。一度家へ歸つて、しかも默つて、すぐにまた外出したと云ふやうな氣振りは更にない。また、常識としても、そんなことはありさうに思へない。そこで細君は、さつきのは確かに闖入者のしわざだつたと信じなければならなくなつた。そこで細君は、それを絶對に、夫たる君に祕密にしようと思つた。現在祕密にしつつあるんだ。つまり、君自身、彼女に怖るべき祕密を與へたのさ。そして、君は自縄自縛におちいり、自分でつくつてやつた細君の祕密のために、慘めな惱みかたをしてゐると云ふわけだ。」

「僕は、慘めな惱みかたなんかしてゐやしないよ。何はなんであらうと、事實その闖入者は、僕自身な

んだから。」

「……」

「僕は、事實だけしか考へない。」

「事實だけ？　それぢや、君は、君の細君を純潔だと云ふんだね？　堅い貞操を持つてゐると云ふんだね？」

「……」

「さうだよ、君はちつとも惱む必要なんかないのさ。なぜつて、君は、もともと平氣で、細君に大きな惱みを與へたんだから。それで十一だ。第一、君の興味は、アブノルマルだ。それに、トルストイ流に云へば、君達夫婦間の愛情、少くとも、細君に對する君の愛情はゼロに近いんだから、すでに家庭として成立たなくなつてゐるんだ。いさぎよく破壞するさ。……蚊帳のなかに轉寢してゐる自分の細君の姿を、おもてから見て、幻想を描き、興味を豫感する、闖入者として忍びこむ、電燈を消す、私にとつて、まつたく思ひがけなく、彼は急にいつもの親しみ深さで私の肩に手をかけ、無邪氣な笑

顏で云つた。……

「實はね、そんな變態的なものではないんだ。僕の惡戯だつたんだよ。惡戯と云ふよりは、試驗さ。細君を試みたんだ。『汝試みる勿れ』の戒を破つた、その罰を僕はうけたんだ。僕はね、」……彼は瞬間、嚴肅な顏になつた。……「あれが自殺でもしないかと思つたんだよ。あんな眞似をして、逃げだした、逃げだしたには逃げだしたが、あれから夜の街を、僕はまるで憑物でもしたやうに、うろうろさまよひ歩いたのさ。酒場へはひつては酒を飲む。飲んでも醉はない。また外へ出る。人通りのなくなつた寂しい街で、電柱によつかかつては考へる。どんなにあれが煩悶してゐることだらう？　今頃はもう、冷たい屍體になつてゐるのではなからうか？……とても僕は、その夜家へ歸つて見る勇氣はなかつた。締めきつた家の表戸をたたいても、きつと誰も起きて來て、戸をあけてくれなからう、なぜつて、あれが自殺してるにちがひないんだから。あれが自殺したら、僕も自殺しよう。それには、朝になつてから歸つた方がいい。朝だと、とほりすがりにでも解る。表の戸も緣側の戸も、若しあいてなかつたら、あれは死んでゐるのだ。若しあいてゐたら、死んではゐない……」

「それぢや、なぜ、まだ暗いうちに歸つたんだ？」

「やつぱり朝まで待てなかつたんだ。今家へ戻つたら、まだ間にあふかも知れない、と思ふと矢も楯もたまらなくたつて家の方向へ駈けだす。だが、怖ろしくなつて、ふつと立ちどまる。若し、今家へ戻つて、あれが戸をあけてくれなかつたら、……と云ふのは、あれがすでに自殺してゐたらと云ふことだ……」

そしたら、……いや、或はだ、今思ひついたが、その時もたしかに僕は考へたんだ、女房が僕の惡戯を知つてゐて、つまり、僕が女房の貞操を試みたのだと云ふことを、あれが見拔いてゐて、怒つて、僕が戸をたたいても、起きてあけてくれない、聲もださない、自殺したかのやうにさへ見せかける……とでもしたら、僕はどうなる？　戸を破つてはひるか、それとも彼女の自殺を信じて、そのまま僕は家にもはひらず、どこかよそへ行つて自殺してしまふか？……それよりも、と僕は考へた、朝になつてから、いや、むしろ晝頃でも、家の前へ行つて見よう、そすれば遠くからだつて彼女の安否は解る、ところがつまり、今歸れば、まだ間にあふ、今一足でも遲れれば、とりかへしのつかぬことになるぞ！　と最後に僕は、彼女こそ恥を知る純眞直情の女だと信じ、さう信じるや、急に戰慄を感じ、まつしぐらに家に戻つて、彼女を死から救はうとしたんだ。……歸つて見ると、緣側の戸もみんなしまつてゐる。そつと庭へ忍びこんで、雨戸の隙間からのぞくと中はまつくらだ。物音も聞えない。僕の心臟は、胸からそとへはじけあがるやうになり、額に生汗がにじむ。思ひきつて、表の戸をたたいた。返辭がない。また叩いた。……」

話をしりきれとんぼにして、彼は立ちあがり、枯草地から小徑へ出て、ひとりで歩いて行つた。

しばらくして、私も立ちあがつた。そして、森へ行く小徑を、彼のはるかあとからついて行つた。

森の入口で、彼は冬日を浴びながら、私を待つてゐた。彼は笑顔でゐた。反對に、私は憂鬱な氣分に支配されてゐた。多分神經質な、面白くない表情をしてゐたことだらう。が、彼の笑顔に對した時、私も強ひて笑顔をつくつた。

私達は森にはひつた。森の中は、寒かつた。だが、すぐ前方に、森の出口は見えてゐた。森のそとには、暖かさうな日光に輝く枯野に、一筋の赭土道がはしつてゐた。

「僕は惱んでなんかゐないよ、」と、森の中途で、彼は快活に云つた。

「少し鈍感ぢやないか！」と、私は反問した。「その男が君だつたからいいやうなものの、若し外の男だつたとしたら、どうする？……女つて、どんな惡いことをしてゐるか解らないものだ。何くはん顏をしてゐながら、……」

彼は賑やかしい笑顏で、私の言葉を遮つた。……「僕だつて、それほど鈍感ぢやないさ。却つて君こそ、少し鈍感だよ……僕はね、ほんたうのことを云へば、最初、女房が死力をつくして抵抗してくれればいいと願つたんだ。が、抵抗どころではなかつた。……その次に、街をさまよつてゐる間、どうかしてあれが自殺してゐてくれればいいと願つてゐた。それこそ、立派な貞操觀念を持つてゐたことになる。……だが自殺もあまり可哀想だ、せめて、僕が歸つたらすぐに、これこれだつたと、泣いて告白してさへくれればいい、まだしも良心があることになる。ところが、それすらもなかつたんだ。何事もなかつ

たかのやうに、いつもの微笑で、いやいつもより却つて媚びるやうなもてなしを、僕にしたんだ。女は魔物だと云ふ諺を、如實に僕の眼の前に見せてくれたんだ。魔物なら魔物でいいぢやないか。僕はいさぎよく、僕の企てた試みの結果に對して、自然科學者の冷靜な態度で立たうとするだけのことさ。のみならず、あれ以來、彼女は實に忠實な妻になつたんだ。」

私達は森を出はづれた。

日光は、弱弱しくはあるが、野を暖めてゐた。

私はまだ、憂鬱から解放されなかつた。

彼は、時時、輕快な口笛を吹いた。

「それにね、」と、彼は小聲で云つた。「あれからと云ふものは、まつたく可愛い小猫がぢやれつくやうに、……」

云ひ終らずに、彼はまた口笛を吹いた。

私は土を見ながら、默つてゐた。

賭

正吉と藤太郎にかぎらず、その農村では誰しも總體に勝負事を好んではゐた。が、とりわけこの二人の若者は、何かにかこづけては始終二人の間で賭をやる習慣になつてゐた。

一日の畑仕事を終り、裏の小川へ正吉は農具を洗ひに行く。淺瀨の石の上にしやがみ、明日の用意に、と、鍬の刃尖に砥石をかけながら、せせらぎにちらちら映る自分の黑い影を見て、ふと思ひつき、空を眺めまはす。西の地平線上、林をすかして落暉のあとが、雲の垂幕の下に黃金色の横縞を殘し、空は暮れかかつてゐるのにまだ宵の明星も見えない。心なしか、森一つ先から聞えて來る大川の音も、なんとなく冴え冴えとしない。

正吉は小川の下を透かし眺める。畑を隣合はす藤太郎も、その頃になれば畑仕事を終つて、農具を洗ひに小川に來てゐる筈である。正吉は藤太郎を呼ぶ。藤太郎のそれに應ずる聲が、河原をわたつて來る。

そこで正吉は、この賭にはきつと勝つと云ふ愉快な豫感で、鍬も砥石も水中に放棄し、石に立ちあがつて藤太郎に叫びかける。

「藤太郎、あした天氣か雨か？」

「あしたか、……」藤太郎も立ちあがつて、空を眺めまはしてゐるやうだ。

「おれは、あした降ると思ふ。」正吉は矢繼早に云つて、雨降りを主張する。藤太郎は是が非でも、明日は雨は降らないと云ふより外はない。

「あした雨降つたら、おれを町さ連れてつて奢れ。雨降らなかつたら、おれがあしたの晩げ一升買はあ。」

「よおし、合點だ！」藤太郎も承諾する。

正吉も藤太郎も、勿論他の若者達と一緒に方方渡り歩いて、賽ころ遊びに耽けることはある。が、賽ころの丁半も面白いには面白いが、賽ころでしない丁半にも亦格別な興味のあることを發見するやうになつた。

たとへば、壹の休みに藤太郎が正吉の畑へ遊びに來る。林檎の木の下に莚を敷き、日光を避けて寢轉びながら、そちこちの娘の噂話などをしてゐるうちに、それにも飽きると誰から先ともなしに、何か賭の種をさがすことになる。

「あの、下から三本目の枝になつてゐる林檎の實は、丁か半か？」

「丁だ、」と正吉が云ふ。

「半だ、」と藤太郎が云ふ。

「林檎の實一つ十錢だぞ。」

「よおし、一つ十錢だ。」

或時には、豆畑の一畝に植わつてゐる豆の木の數に丁半を賭ける。或時には、藤太郎が自分所有の馬を川で洗つてゐるところへ正吉がやつて來て、尻尾を一握り握つて丁半を爭ふ。

かうして正吉と藤太郎は、寄りさへすれば何か種を見つけては賭をやつてゐた。が、明日の天氣や、林檎の數や、豆の數や、尻尾の數や、そんなものにも少し飽きて來た。何處の誰は臨月な筈だが、今月中に產まれるか產まれないか？　いや、それよりも、產まれる日は丁の日か半の日か？　產まれる子は男か女か？　しまひには、生きて產まれるか、死んで產まれるか、人の生死にまでも賭をやるやうになつた。まだ產まれない子供に對してばかりではなく、何處の老婆は危篤なさうだが、丁の日に死ぬか、半の日に死ぬか、などと、今まさに死なうとする人間の生死を賭けて、正吉と藤太郎とはひそかに賭博心を喜ばせるやうになつた。

だが、丁半を爭ふべき對象物は變化して來ても、それに賭けるものは僅かばかりの奢りあひか、酒か或はたまに生の金錢に限られてゐた。正吉も藤太郎も、僅かばかりの奢りあひや、酒や、或は數へるにも足らぬ金錢には、次第に飽き足りなくなつた。

或日、藤太郎の畑では、日傭取をいれて燕麥刈をやつてゐた。その日正吉は林檎の採取をしてゐたが、

八つ休みに林檎をふところにして、隣の燕麥畑へ遊びに行つた。日傭取の中にたま子もゐることを知つてゐたので、周圍の事情がゆるせば林檎の三つもたま子に與へて、歡心を買はうと云ふ肚だつた。

藤太郎の兩親や弟妹、藤太郎、それに男女の日傭取が、燕麥を刈りとつたあとに車座となつて、南瓜の湯煮を食べ、澁茶を飲んでゐた。見ると、藤太郎はたま子と隣あつて坐り、南瓜を鍋からとつてたま子にも分けたりしてゐた。

正吉は內心面白くなかつた。藤太郎がたま子に氣のあることは、豫てから正吉も知つてゐたが、二人の間に深い關係などあらうとは思ひもしなかつた。それが、まのあたりに藤太郎とたま子の馴れ馴れしさうなのを見て、こいつは先手をうたれたかと、殘念にも思ひ、腹立たしくもあつた。藤太郎のうしろに立つて、暫く考へた末、ふところから林檎をとりだして一つを藤太郎に握らせ、一つをたま子の肩越しに腕をのばして膝へ落してやると、たま子は振りかへつて正吉に頬笑みかけたので、やうやく正吉は失望から救はれたやうな氣がした。

その翌る日、正吉が林檎の樹にのぼつてゐる時、藤太郎が樹の下へやつて來た。正吉は樹から降りた。葉を洩れて來る日光を、二人は日燒の顏にうけながら向ひあつて、林檎を嚙つたが、藤太郎の肚に何かあるらしい樣子を、正吉は見てとつた。たま子のことに違ひないと、正吉は思つた。勝利者のやうな優越を感じた。

「たま子、今日も來とるか？」藤太郎の傷をえぐる氣で、正吉は云つた。

わざとらしく日光をまぶしがるやうな瞬きをしながら、藤太郎は返辭の出來ないほど强ひて夢中に林檎を嚙りつづけた。

やうやく嚙り終つた林檎の殼を、藤太郎は勢よく遠方へ投げやり、その餘勢で振りむきざま、正吉の眼に見入つては元氣よく云つた。

「どうだ、たま子を賭けねえか？」

正吉も緊張した。

「よし、たま子を賭けべえ！」

「もしお前が勝つたら、俺はたま子に指一本つけねえ。そのかはり、もし俺が勝つたら、……」

「よおし、大丈夫だ、さうなつたら、俺はたま子に物一つ云はねえ。」

「どうして賭ける？」

「さうだな、どうして賭けたらええか？」

二人は考へた。

「たま子の顏に、ほくろが何ぼある？　丁か半か？」と、藤太郎がだしぬけに云つた。

「お前、勘定して知つてるんだな、卑怯だ。」と正吉はなじつた。

「いいや、知らねえ。知つてゐたにしろ、お前の方から丁か半か先に云つたらええ。。お前が半なら、俺は丁、お前が丁なら、俺は半だ。」

正吉はすぐには丁とも半とも云へず、腕を拱いて呻つた。右の小鼻の横に一つ、ほくろのあることは知つてゐる。ほかに、何處かになかつたかしら？　顏をあはせさへすれば、いつまでたつたつて飽きることも知らずに眺めてゐるのに、一體何を眺めてゐるのだらう？　滿足にほくろの數も知らないなんて……正吉は頭の熱くなるほど考へたが、もう二つぐらゐは屹度あるに違ひない。さうだ、半だ！

「俺は半だ！」と、正吉は左手の掌を右手の拳でうちつけた。

「お前は半か、そんぢや俺は丁だ、」と、藤太郎も左手の掌を右手の拳でうちつけた。

二人は妙にあせり氣味な心持で、はじめははしやぎながら何か喋り喋り、藤太郎の燕麥畑の方へ連れだつて急いだが、途中から二人ともむつつりになり、仇敵同士が並び歩いてゐるやうな窮窟を感じた。今までどんなに賭をやつても、ただの一度、そんな敵意を抱きあつたことはなかつた。

正吉と藤太郎の間に、その時釀しだされた敵意の芽は、正吉にせよ藤太郎にせよ、賭の結果たま子を失つた方の心に深く根を張らなければならない。さうして、結果は藤太郎の負になつた。藤太郎はそれ以來、已むを得ない場合のほかは、出來るだけ正吉と顏をあはせることを避け、正吉の噂を聞くことさへ、なるべく避けるやうにした。それにも拘らず、正吉は雪の降りださないうちに兩親の家から別れて、

別に畑の一隅に一戸を構へ、そこでたま子と一緒になるさうだと云ふ噂は、どこからともなく藤太郎の耳にも傳つた。藤太郎は不愉快でならなかつた。

秋の長雨がつづいた揚句の或る曇日の夕暮前、騎兵の一隊がその農村を通過して、渡渉場偵察のために大川の岸に沿うて進んだ。黄色の肋骨に赤い絨袴の騎兵が、枯林の間に隱見するのを物珍らしさうに閑散な農夫達は眺めやつてゐたが、誰誘ひあふともなく大川の岸に老若男女群れ集り、みな馬から降りて或は地圖を按じたり、或は枯枝を集めて焚火したりしてゐる騎兵の一隊を遠卷に見物した。

やがて、一人の將校を前にして、めいめい地圖を手に研究してゐた數名の下士の中から、一名が選ばれて乘馬すると、すぐに河原に降つて最初の渡渉を試みた。

村の人達も、そのへんは水深も淺く、夏の頃には馬車でも渉れることを知つてはゐたが、長雨のあとで水勢もかなり急だし、それに土着の人ではなく、土地が不案内のことでもあるし、はたして無事に渉りをはせるかどうか、不安と好奇でその下士を見送つた。

騎兵隊をとりまく群衆の中に、正吉と藤太郎も雜つてゐた。藤太郎はずつと正吉を避けるやうにはして來たものの、いざさう云ふ群れのなかで顔をあはせた以上は、たとひ心中はどうあらうと、表面だけでも友誼をかはさないわけには行かなかつた。正吉の方では、もとより含むところは毫もなかつた。二人は並び立つて、中流へとだんだん馬を乘り進める下士を眺めてゐた。

「どうだろ、うまく渉りきれるかな？」と正吉は不安の聲音で獨語した。

眼をほそめて熟心に見やつてゐる正吉の横顔を、藤太郎はそつと横眼で盜み見た。遽かに正吉の眼は驚いたやうに瞠られた。微かな叫びさへ口から洩れた。群衆の中からも叫聲がそちこちから起り、續いて聲聲にざわめきたつた。

藤太郎が川の中流の方へ眼を移すと、急に深いところへはひつたと見えて、騎兵は馬の腹までも水に浸してゐた。一時ざわめきたつた群衆も忽ち鳴りを鎭め、將校下士はてんでに望遠鏡を眼にあてて、ぢつと息を凝らしてゐるやうであつた。

「お前はどう思ふ。うまく渉りきるか、それとも渉りきらねえか？」と、藤太郎は正吉の耳に囁いた。

正吉は、川を渉つて行く騎兵に視線を凝らしたまま、鼻からふとい息を吐きだしたきりで藤太郎には答へなかつた。

そのうちに、陸上の人達の緊張した心持は安心にゆるんだ。馬が對岸に近づくに從ひ、腹を現はし、脚を現はし、水沫をきるために尻尾を拂ふやうにさへなつた。さうして、まだ向うの河原にあがりきらないうちに、馬上の下士は軍刀を拔いて高くさしあげ、前方に二三度ふりたふして前進の記號を示した。

「乘馬準備、――乘馬！」將校の號令には、いくらか悲壯味が籠つてゐた。兵隊は一語も發せず、期せずして皆正しい擧動と姿勢で乘馬した。軍刀と拍車の音響までが、緊切味を帶びてゐた。

「どうだ、お前は全部殘らず、滿足に渉りきると思ふか？」と、藤太郎は正吉の耳にまた囁いた。

正吉は、はじめて藤太郎に振りかへつた。

「大丈夫、全部殘らず滿足に渉りきるとも。日本の騎兵でねえか、こつたら川くれえ、……」

「よおし、お前がさう云ふんなら、……」

藤太郎は正吉の袖をひいて、離れた立木の傍へ連れ行き、叢に二人うづくまつた。

「お前が全部渉りきるつてんなら、俺はその反對だ。どれか一つは屹度、途中で流される。」と、藤太郎は主張した。

「お前そんなこと云つたつて、見ろ、さつきの兵隊の有樣、うめえもんだ。あの兵隊ばかりでねえ、こさ來てる兵隊はどれだつてみんな、馬は無論のこと、えりすぐつた偉物ばつかりでえ。なんだつて、こつたら川さ流されべえ。」

「そんぢや、賭けるか？」

「賭けるとも。」

「よおし、一人殘らず滿足に渉つたら、俺の馬をお前にやるべえ。」

「お前のあの青か？　よし、貰つた。」

「もし一人でも流されたら、お前何よこす？」

「そんだなあ、……」

「たま子俺さよこすか？　外のものは嫌だ。お前がたま子を賭ければ、俺は馬を賭ける。どうだ？」藤太郎は詰めよつた。

咄嗟に正吉は返辭に窮したが、いつものとほり取ることしか考へない習慣になつてゐる賭博心から、馬欲しさにたま子を賭けることを承諾した。

「ええとも、負ければ俺はもう一切たま子と緣きつて見せる。そのかはり勝つたら、馬だぞ！」

「ええとも、指切りだ。」

二人は小指をひつかけあつて、指切りをした。

その間に、騎兵の一隊は既に、一列の縱隊で渡渉をはじめてゐた。先頭にたつた將校の馬は、殊に前脚を高くあげ、そろそろ暮れかかる川面に白い飛沫を散らして、次第に中流に近づいて行つた。續く二十騎餘の騎兵も、みな韁をひきしめて馬首をあげさせ、川音を一層馬の蹄で騷がせながら、おなじやうに飛沫をあげて前進した。

先に下士が馬腹までも沒した箇所に、いよいよ先頭の將校がさしかかつたが、巧みにそこを乘りきつた。つづいて一騎、また一騎、また一騎と。……無意識に枯草をむしりながら緊張して眺めてゐた正吉は、ほつと安心したやうに藤太郎に笑ひかけた。藤太郎は佛頂面して顧みもしなかつた。正吉は內心必

勝を期して、また川の方へ眼を移した。

先頭の將校は、もう擧動は分明しないほど先に進んで、中流を乘りきつたものも既に半ばは越えてゐた。突如、群衆は聲をあげた。どよめいた。正吉も藤太郎も思はず喚いて立ちあがつた。

中流の深いところを、今一息で乘りきらうとする刹那、一騎が、川底の石に躓きでもしたか、横に倒れざま兵隊は落馬し、馬諸共に押し流されたのだ。行進中の一隊は隊列をみだし、中流を越えたものもまだ越えぬものも、共に進退しかねてただ馬の足搔き騷ぐにまかせるばかりであつた。勿論、下流へ下流へと浮きつ沈みつ流され行く人馬を、救ふべき手段も見出されなかつた。

その夜、村人の應援になる屍體捜索隊の提灯の灯は、明けがた近くまで川の西岸にさまよひ動いたが屍體はつひに發見されなかつた。翌る日も、遙か下流まで捜索し、無駄であつた。

村の人は誰も誰も、貴重な犧牲を悲んだ。が、ただ一人、藤太郎は表面悲しみに和しながら、内實幸福感にひたつてゐたことは勿論である。そして、もう一人、悲しみは悲しみでも、切實な後悔の念をまじへた悲しみを味つたのは、正吉であることは云ふまでもない。

しかし、藤太郎の幸福感も、その農村に次の長雨がはじまる頃までしか續かなかつた。

或日、正吉が蓑笠を着て、前日の嵐に落された林檎を拾ひ歩いてゐる時、蓑もなく笠もなく濡れしほたれた藤太郎が、ふところ手でぼんやりと正吉に近づいて來た。今度敵意を持つのは、正吉の順番だつ

た。正吉は知らぬ顔で、地にうつむきながら林檎を拾ひつづけた。

「正吉、たま子は駄目になつた。」藤太郎の聲は哀れだつた。

正吉はやうやく腰を起して、藤太郎に相對した。

「ひとの娘を賭事のおもちやにするやうな奴等にや、金輪際娘はやれねえちゆうだ。」

「誰が？」

「たま子の親爺よ。」

正吉は急に心が浮立つて、聲高く愉快に笑つた。

「正吉、笑ひごとでねえ。俺、がつかりした。おまけになあ、たま子を嫁にくれつちゆう、ええ口が、すんでにあるつて云ひやがるんだ。お前達にいたづらされねえうちに、今月のうちにもさつさと嫁にやつてしまふつてんだ。」

「何處さ嫁に行くつて？　今月のうちにだつて？」たま子を藤太郎にとられると云ふ重荷をおろした正吉は、ますます陽氣になつた。

「今月のうちにも嫁にやるんだとよ、何處だか知らねえが。」

「どうだ、藤太郎、たま子が今月嫁に行くとして、丁の日に行くか半の日に行くか？」

藤太郎は瞬間眼を瞠つた。が、すぐににやにやと笑ひだしながら、ふところから兩手を出して、握り

あはせたり揉みあはせたりした。

「俺は半だ。お前は、藤太郎？」

「お前は半なら、俺は丁だ。」

茂次郎の話

○

「茂次郎のおやぢよりは、茂次郎の方が馬鹿ぢやなあ、」と云ふと、

茂次郎は、

「うんにや、おやぢの方がよつぽど馬鹿ぢや、」と答へる。

「どうしておやぢの方が馬鹿ぢや、」と問ひかへすと、

「おれのやうな馬鹿な子をつくつたからぢや、」と答へる。

相手は馬鹿、茂をからかふつもりで、いつも最初から笑ひ半分に問ひかける。しかし馬鹿、茂の茂次郎は最後まで阿呆笑ひ一つ見せるではなく、徹頭徹尾嚴肅に答へる。

○

今度は、

「茂次郎のおやぢの方が、茂次郎よりはよつぽど馬鹿ぢやなあ、」と云ふと、

茂次郎は、

「うんにや、おれの方がよつぽと馬鹿ぢや、」と答へる、

「どうして茂次郎の方が馬鹿ぢや、」と問ひかへすと、

「おれのやうな馬鹿にせよ、とにかくおやぢは、人間一人つくりだせた。おれにや馬鹿な子せえつくれねえからぢや、」と嚴肅に答へる。

相手は面白がつて笑ふ。

○

茂次郎のこの逆説を、村人はほとんど誰しも、子供にいたるまでも、熟知してゐる。熟知してゐるに拘らず、いや、熟知してゐるからこそ、村人は、子供にいたるまでも、機會あるごとに茂次郎に同一質問を發し、同一逆説を茂次郎に説かせては喜び樂しむ。

村人はほとんど誰しも、子供にいたるまでも、茂次郎に對して優越感を抱いてゐるのは勿論のことだ。

○

茂次郎は河原の蒲鋒小屋に住んでゐる。しかし茂次郎は乞食ではない。惠まれるものは、一錢たりとも一椀たりとも、茂次郎は斷じて受けない。そのかはり正當に受くべきものと信じた場合は、堂堂と請求する。

或時、村第一の荒物屋の店頭に、一臺の荷車が横に、狹い村街道に邪魔な尻をつきだしてゐるのを見て、茂次郎はその荷車を街道なりに片側へ寄せた。そして、その勞力に對する報酬を、荒物屋の主人に要求した。

「馬鹿茂にはかなはない。」

さう云つて、荒物屋の主人は苦笑しながら、茂次郎に一錢銅貨を一箇與へた。

○

茂次郎にとつては、一箇の一錢銅貨は半日の命の糧となるに十分である。

たとへば、玉蜀黍畑にはひる。三本或ひは五本の玉蜀黍を好むままに採り、後、畑主にそれを示し、代價として一錢を支拂ふ。

「馬鹿茂にはかなはねえ。」

畑主はさう云つて、苦笑するだけだ。

○

茂次郎の生業は、農業勞働である。ただし規則的な日課的な農業勞働ではない。必要に迫られてはじめて、茂次郎は勞働に從事する（必要と云ふのは、勿論、缺乏せる食糧についてである。）

誰所有の田であらうと、誰所有の畑であらうと、茂次郎は一向に頓着なく、闖入して、たちまち勞働

をはじめる。そして、およそ必要なだけの錢に相當する時間の勞働を終ると、また忽ちやめて、田畑の所有主に賃銀を請求する。

茂次郎は力もあり、且つ、勞働に從ふ間決して怠けると云ふことがないので、誰にも重寶がられる。が、日出から日沒までの完全な一日出面（註、出面とは日傭の北海道語）を茂次郎に强制しようとしても、出來ることではない。半日出面がせいぜいで、時によると一時間、ひどい時にはたつた二十分か三十分しか働かないこともある。

十二時間一日の出面賃七十錢として、一時間なら五錢何厘、三十分なら二錢五厘餘、茂次郎一日の糧を得るには十分である。

茂次郎はもとより基督教信者ではないが、（明日の事を憂ひ慮ふなかれ、明日は明日の事を思ひわづらへ、一日の苦勞は一日にて足れり）と云ふ聖書の言葉どほりの生活をしてゐる。

が、村人はかう云つては茂次郎を嘲笑ふ。

「茂次郎は馬鹿ぢやから、明日明後日さきざきのことを考へる頭を持たんのぢや。」

○

茂次郎は四十歳を越えてゐる。云ふまでもなく妻子眷族を持たない。のみならず、茂次郎はいまだに童貞を保つてゐる。

四十歳にして猶童貞を保つ者は、村人の輕蔑の對象となるより外はない。ただ茂次郎の場合は、輕蔑より嘲弄の度がはるかに强いだけである。

或日、茂次郎は、村はづれのあかしやの木蔭に午睡をむさぼつてゐた。

不意に、あわただしい足音と、けたたましい叫聲とに、茂次郎は眼をさまさせられた。

肱枕のまま薄眼をあけて見ると、すぐ鼻先に、草履尻から土埃をたて、泳ぐやうな危い及腰で、金切聲をたてながら逃げて行く娘の後姿があつた。

その時、大きな笑聲がきこえた。茂次郎はやはり肱枕をしたまま、自分の足のむいてゐる方を見た。

水車場の若衆が二人、茂次郎を見ながら、手を拍つて笑つてゐた。

茂次郎の着物の裾はまくられ、割禮前の猶太人のものと同じ形のものが、横樣にうなだれてゐた。茂次郎はそれに氣づいても氣づかないもののやうに、それなりにして再び眼をとぢた。

折角のいたづらも張合抜けがし、却つて極り惡さをさへ感じた若衆は、それでもまだ氣持をまぎらす高笑ひを發しながら、茂次郎の側近く寄つてたたら足を踏んだ。

「茂次郎、みつたくねえもんが出とるぜ。」

「隱しとかねえと、犬に食はれてしまふぞ、茂次郎。」

茂次郎は薄眼を開き、下から二人の若衆を見あげてにやりと笑つた。

「お前達が好きで、着物はぐつたんだべえや。」
「俺達が好きでやつたんでねえ。あのそら、水車場の娘お富ッ子が見てえ云ふからよ。四十越えて女子知らねえ男つて、一體どんなものだか、……」
「お富ッ子あ、茂次郎に惚れてるんだぜ。是非茂次郎と夫婦になりてえんだとよ。だからの、はづかしがるのを無理矢理連れて來てよ、茂次郎へおつつけてやるべえとしたら、きやつきやつ笑つて逃げやがつたや。」
若衆二人は、聲をあはせて笑つた。
眞晝時の眩い光を照りかへす街道に、お富は裾をまくつて逃支度しながら、若衆の方へあかんべえをし、舌をぺろぺろ出して見せた。
茂次郎はお富の方へちらと眼をくれて、すぐにまた物憂さうに眠りかけた。
「こら、茂次郎、お富ッ子はなあ、茂次郎が夫婦になつてくれねえと、死んでしまふつてえが、それでもええのか、茂次郎。」
「お富ッ子が死んでしまふとよ、茂次郎。」
若衆に云はれて、茂次郎は仕方なささうに薄眼を開いた。
「若し俺がこの世の中にゐねえかつたら、お富ッ子あ、誰に惚れたや。」

さう云つて茂次郎は、下から若衆二人を見あげながら、にやりにやりと笑つたが、やがてあかしやの幹の方へ寢がへりをうつた。
若衆二人は顏を見あはせた。
「馬鹿の云ふことあ解らねえや、」と一人の若衆が云つた。
「茂次郎はほんたうは女好きだぜ。ほかの事でや笑はねえが、女子の話せえしれや、にやりにやり笑つてやがる、」と他の若衆が云つた。
二人は笑ひあつてから、街道に煙のやうな埃をあげ、お富ッ子を追ひかけて行つた。

○

或年の秋、稀有の大洪水があつた。河原の蒲鉾小屋を流された茂次郎は、住吉神社の社殿の緣下を住居にしてゐた。
住吉神社は川の岸近く、堤防より一段ひくい地にあつた。雨のはれまに、茂次郎はよく社殿の廻廊に安坐し、川岸に連るやちだもの樹樹の隙間隙間から見える大川の濁流を眺めてゐた。
蓑笠に身ごしらへした村人等は、時時川岸を見まはりに來た。
長雨もやみ、雲のきれめから青空も見え、弱弱しいながらも黃いろい陽射さへ折折には射して來るやうになつた。みなは漸く愁眉をひらいた。

が、雨がやんでから、却つて猛烈な勢で大川は氾濫しはじめた。ただ一つの橋も流されてしまつた。一時安堵した村人達は、更に一層の恐怖に襲はれ、なすところを知らなかつたが、そのうち長老の指揮に從ひ、住吉神社あたりの川岸に、必死となつて土俵を築いた。

敬神の念強い村人達は、何よりも先に住吉神社を守護することに警虞でなければならなかつた。そればかりではない。住吉神社を守護することは、ただちに祖先の靈場を洪水の蹂躙から救ふ結果になるのだつた。村の共同墓地は、住吉神社に隣してゐたから。村人達は、敬神と祖先崇拜の他に餘念なく、土を掘り、土俵をつくり、運搬し、堤防を築いた。

しかし洪水に經驗のない村人は、事の未然に結果を豫知することは出來なかつた。

對岸の廣い水田地は、大半は村第一の豪農大塚家の所有ではあるが、村人の八分は、その水田耕作によつて生活を支持してゐるのだから、若しその水田が洪水の難に遭ふ場合には、村人の八分は當然生計困難に陷らねばならない。それだのに、敬神と祖先崇拜の他に餘念なく、專心堤防を築いてゐる間に、對岸の水田が除除洪水に蠶食されつつあらうなどとは、誰も考へてさへ見なかつた。

對岸の土堤を、人人が喚きながらあちこちと駈け走るのを見て、誰も誰もはじめて恐怖に囚はれた。はじめて皆は、現實の生活に眼覺め、極度の不安に陷つた。が、行つて見ようにも橋は落ちた。舟で行くには、あまりに恐ろしく渦卷きはしる濁流だ。なすところを知らなかつた。

その時社殿の縁下から、茂次郎がのこのこ這ひ出した。誰も茂次郎には氣づかなかつた。茂次郎は堤防へあがつて、村人の群にまじつた。茂次郎を見ても、誰ももの云はなかつた。茂次郎ものを云はなかつた。

對岸の人達は、最後の絶望を訴へるやうに一齊に兩手を空へあげた。激流の音にはばまれながらも、悲痛な喚聲が川の上を渡つて來た。こつちの人人も、また一齊に兩手をあげて、叫びかへした。

そしてまた、以前の沈默にかへつた。不意に何處からともなく動搖が起り、罵聲がひろがつた。

茂次郎が、今にも堤防を破らうとするやうに、鍬をふりかぶり、あたりの人人をにやりにやり笑ひながら見まはしてゐたのだ。

敬神と祖先崇拜の念に凝り固まつた村人達は、現實の生活をたちまちに忘れ、罵り喚きながら不敬漢の茂次郎に殺到した。

が、茂次郎の鍬は堤防にくだされた。積みあげられたばかりの土俵は、一つのぞかれ、その下がまた一つのぞかれ、つひに吐口は開かれた。既に水はひたひたと溢れかけてゐる。

全堤防の決潰は眼前に迫つてゐた。村人は溺死を怖れ、我先に凹地の神社境内を越え、墓地を越え、高みへ高みへと逃れた。

逃げて行く人人の後姿を、にやにや笑ひながら見送つてゐた茂次郎は、もう一鍬堤防に入れて、奔流

の溢れでるのを見きはめ、駈けおりてやちだもの大木へ攀ぢのぼつた。

○

住吉神社は流され、墓地は遺憾なく洗はれたが、對岸の水田は洪水の難を免れることが出來た。

茂次郎はやちだもの大木と共に押し流され、三日間奔流に漂つたが、洪水がひけかかるとすぐ、村人の舟に救はれた。

「神社の堤防を破るなんて、馬鹿でねえと出來る仕業ぢやねえ、」と、村人の一人が云つた。

「馬鹿茂のやつたことだ、神樣も佛樣もおとがめなさる氣づけえあんめえ、」と、他の一人が云つた。

茂次郎はにやりにやり笑つてゐた。

○

水田幾十町歩を洪水の難から救はれた豪農大塚家の主人は、お禮心から、茂次郎に、何か望みごとがあるなら、大慨のことは叶へてやらう、金でも田地でも、欲しかつたら分けてやると云つた。

茂次郎は、

「別に何も欲しくねえだが、折角云つてくらつしやるで、それでや、お屋敷うちの地面、どこでもええだ、五寸四方だけ俺に分けてつかはせえ、」と云つた。

妙なことを云ふと思つたが、馬鹿茂のことだからと、大塚家の主人は何の氣もなく、茂次郎の請ひを

許した。

村の人達は、茂次郎の無慾を嗤つた。

「金持にでも田地持にでもなれるのに、冥利を知らねえにも程がある。たつた五寸四方の地所、なんになるべえ、馬鹿につける藥はねえちゆふが、ほんとだなあ。」と嘲るものもあつた。

○

或朝、村人達は、村第一の豪農大塚家の門前に、驚駭の眼をみはりながらひしめきあつた。云ひ傳へ聞き傳へ、ほとんど全村の人人が、大塚家の門前に集つた。

そこには、眞新しい白木の五寸角柱が立つて、「小野茂次郎所有地」と筆太に書かれてあつた。

銀杏の實

某日、わたしは銀杏の實のをかしくも哀れな物語をきいた。

その時わたしは、故郷の町の北よりの、眞言宗の寺の境内の、見あげるばかりの大銀杏の樹を思ひだしたのだが、これはまた！　……これはまた！　と間投符をつけて云ふのは、その大銀杏の樹と、わたしのきいたをかしくも哀れな銀杏の實の物語とをひきくらべて見てのこと。たとひその實を植ゑたところで、わたしがその時思ひだした、故郷の町の北よりの、眞言宗の寺の境内の、見あげるばかりの大銀杏の樹の半分ぐらゐの木になるはおろか、はこべほどの芽も出なければ、躑躅ほどの木にもならず、ましてや、わたしらが幼い頃、その眞言宗の寺の境内の、見あげるばかりの大銀杏の樹に石を投げあげては落し落し、それを下駄で踏みにじつては青皮を破り、中の實を割つては眼瞼にさげたりして遊んだところの、そんな實などのならう筈もない、……芽も出ず、木にもならず、實も結ばない銀杏の實を、まぎれもない土に穴を掘り、植ゑ、そして、芽が出、木になり、やがては實のなることを念じたと云ふ物語、きいて見れば、隨分とをかしな、また隨分と哀れな物語である。

ここに一人の人が死んだとする。今まで何年かこの人生に呼吸をしつづけ、暖い血をかよはせてゐた一人の人が、忽焉としてその呼吸をとどめ、血のめぐりをとどめ、一箇の屍體となりをはつたとする。そして、その人は病に斃れたのだとする。

一人の生きた人間が、一箇の屍となるには、病氣、自殺、他殺、……などと、いろいろの徑路がある。もしそれが病のためであつたとすれば、その人間が病のために斃れるに至るまでには、また恐らくそこに數へきれないほどの原因があることだらう。そしてまた、その原因を、その人自らつくる場合もあらうし、他人によつて與へられる場合もあらう。兩者兼ねそなへる場合もあらう。

今、かりに、或る一人の人が病に斃れた、その直接の原因は問はずとして、遠い遠い間接の原因に、その本人以外の或る他の人がかかづらつてゐたとしたら、その遠い遠い間接の原因にかかづらつた或る他の人、その人は、一人の人に死を與へた間接の原因に對して、どんな觀念と、どんな感情を誘致されることだらうか。多分、或る人は責任觀念をいだかされ、悔恨痛苦を感じさせられることだらう。或る人は、責任觀念をいだかされず、悔恨痛苦を感じさせられないことだらう。が、この銀杏の實の物語を產みいだした或る夫婦、……この物語をわたしに話してきかせたのは夢野幸介と云ふ男であるが、だからこの物語を產みいだした或る夫婦と云ふのは、夢野幸介の友人であるか、或はその友人のまた友人であるか、いづれはそんなことだらう。ともかくその或る夫婦は、前者に屬する人達であつた。彼等は、

或る小娘を病死させたことの間接の原因にかかづらつたと云ふ自責觀念から、かなりの悔恨痛苦を感じさせられた。

人によつては、針の先でちよつと刺されたほどにも感じない事柄を、その或る夫婦は匕首で胸を貫かれたほどにも感じる素質を持つてゐたのか、……殊に細君の方は、女であれば人一倍感激も強いわけだし、それにまた、もとはと云へば、その、子守象女中として國元から呼びよせた小娘の手癖のよくないことを發見し、それを夫に告げ、子供の教育にも悪からうと、夫にすすめて國元へ送りかへすやうにとりはからつたのは、そもそも細君だつたのだから、なほさら、その小娘が、歸郷後いくばくもなく傳染病に犯されて死んだとの報知をうけて、もしもあのまま東京において、なんとか躾をなほすやうにしたなら、こんなことにはならなかつたらうにと、かなり強い自責、憐憫、悔恨の感にうたれたのも尤ものことと思はれる。

せめてもの慰めは、その小娘を國元へ送りかへす理由に手癖のよくないことなど少しも擧げなかつたことだが、だが細君は思ひかへして、やはり心は慰められなかつた。あの時小娘の兩親へあてて送りやつた娘送還の理由書に、とかくひよわで、子守女中の業には耐へないらしい、だから一時歸國して、更に丈夫になつての上で再び上京させられたいと云ふ意味のことを書いたことを思ひかへして見れば、こまかく心のはたらく細君としては、ひよわどころか、風邪ひとつひきさうにないその小娘を、ひよわで、

子守女中の業に耐へないなどと國元の兩親に告げたために、それが暗示となつて、傳染病にも犯されるやうなことになつたのではないかと、またしても自責、憐憫、悔恨の情を深められなければならなかつたのも、ありさうなことと思はれる。

それもしかし、平凡な言草ながら日の經るがままに、次第に薄らいで行く。が、その翌年の春のこと、夫が所用かたがた鄕國の方へ旅立つに際して、細君はほしなくもまた小娘のことを、勿論なまなましい情感を伴つてではなく、死の悼ましさなどからは遥かに離れた、淡い美しさの情景の中に思ひだし、……鄕里をおなじくする彼女として忘れはしない町はづれの小高い丘に、杉の木立にかこまれてゐる共同墓地の、小娘の家の墓所はどこかは知らないながら、どこにでも、ともかく一つの墓所を想像し、その背後に昔のまま、まだ眼にのこる夕燒の空を描きなどして、小娘の眠る墓所を懷しくもあり悲しくもある、淡い美しさの情景の中に思ひ浮べ、……だから、その時細君が、まだ小娘がこの世に生きてゐて、うちに子守女中をつとめてゐた頃、實際は銀杏の實に限らず、鰯にせよ菓子にせよ、よく盜み食したのではあるが、それを鰯や菓子のことは問はずに、ただただ、あの娘は銀杏の實を非常に好いてゐたが、その好きな銀杏の實をあの娘の墓のまはりに植ゑてやつたら、さぞ喜んでくれることだらうと思ひつめたのも自然なことである。何年か何十年かの後には、墓のまはりに銀杏の樹が何本も茂り、やがては銀杏の實が墓の上にこぼれ落ちる。秋には黄ろい葉が悲しく散りしいて墓地を埋めよう、春には緑の若葉が美

しく枝を飾つて墓地を蔽ひもしよう、あの娘は、まるで、好きな銀杏の中に眠つてゐるやうなものだ…

…さうなれば、病身でないのに病身だと云つて國元へ送りかへし、そのために、東京にゐさへすればからなかつた傳染病に犯されて死んでしまつた、わざわざ殺しにやつたやうなものだと云ふ自責の念、悔恨の情も、實はもうそれほどのものが細君の心に殘つてゐるのではなかつたが、まださう云ふ情念がかなりあるやうに誇張して考へて、それもいくらかは、銀杏の實を植ゑてやると云ふ回向のために紛らすことも出來ようかと細君は思つた。

愛すべき細君よ！　と云ひたいが、それは他から眺めた時のこと、かう云ふ性情の女を細君に持つ當の夫にして見れば、またかなり扱ひかねる場合もあらう。が、彼女の夫は、女と云ふものの性情をよく理解し、さう云ふ女を愛することを知つてゐた。彼は細君の提言を快く容れ、託された銀杏入りの小罐を携へて歸郷した。

彼は、あの小娘の眠る墓所をめぐつて、まぎれもない土に穴を掘り、幾粒かの銀杏の實を植ゑた。が、何年たたうと、はこべほどの芽も出なければ、躑躅ほどの木にもならず、ましてや、わたしらが幼い頃故郷の町の北よりの、眞言宗の寺の境内の、見あげるばかりの大銀杏の樹に石を投げては落し落しそれを下駄で踏みにじつては青皮を破り、中の實を割つて眼瞼にさげたりして遊んだところの、そんな實などのならう筈はない。

それだのに、あの小娘の父親は、はるばると娘の好きだつた銀杏の實を持つて來てくれて、しかもそれを娘の墓所のまはりに手づから植ゑてくれると云ふもとの娘の主人にどれほどの感謝を捧げたか、そして春の夕暮前、その舊主人を町はづれの小高い丘の墓地に案内し、先祖代代の墓前に額づき、念佛稱名し、遠く都から齎された貴い回向の趣を告げて、娘の瞑福をどれほどまで祈つたことか。

墓所のまはりに掘られた幾つかの小穴に、銀杏の實を植ゑながら、……だが、それは銀杏の實ではなかつた。いざ植ゑようとして、細君に託された小罐の蓋をあけた時、夫は如何に驚いたか。銀杏の實ではなく、ビスケットであつた。彼は驚いた。次に彼は、中味も調べずに、とりちがへてビスケットの罐を彼に渡した細君の粗忽を思ふと、をかしくてたまらなかつた。が、次に彼は當惑した。見れば、娘の父親は、死んだ娘をかほどまでに思つてくれる人達の情のほどの有難さに涙にくれ、墓前に額づき、合掌祈念してゐるではないか。その父親に、彼はどうして、銀杏の實がビスケットに代つてゐたことを告げることが出來たらう？　出來はしなかつた。娘の父親が墓前に額づいてゐるのを幸ひ、彼はなるべく罐をかくすやうにして、一つ一つビスケットを、掘つた小穴に埋めては手早く土をかぶせ、靴で踏みしめ、次から次へと、ありたけのビスケットを殘らず植ゑをはつた。

墓口の話

わたしは墓口であります。

信州の或村の或農家の一青年が、東京に出て苦學したいものだと、永年おもひつづけてゐました。わたしは、その青年の持物であつたのであります。

父の反對にうちかちがたく、青年は永年野心をおさへてゐましたが、たうとう、或夜、父には無斷で東京に出ることを決心しました。青年は、慈愛ふかい母にだけは、背度の物蔭でうちあけました。母は星月夜のうすあかりに子をしげしげとうちみまもり、……うちみまもつたにちがひなからうと思ひます……あすにもならば、早速父は子の出奔をさとり、さだめし怒り罵ることだらうが、その時には母がよくとりなしてやらう、あとに氣をとられず一心に勉強せよといましめました。そして、そくばくの錢を子に與へたのであります。

青年の墓口は、かなりふくらみました。わたしの記憶では、それほど澤山の金を入れられたことはあとにもさきにもなかつたやうであります。その時を絶頂として。それからは、停車場に行けば切符代と

して少からず減り、汽車の中でもいくらか減り、上野に着けば着いたで、また減り、……そして、東京へ着いたその日、青年は、すぐに淺草をたづね、活動館にはひつたのであります。

活動館にはひるまで、わたしの持主は、かなり躊躇したやうであります。瓢簞池の橋、あの欄干にもたれて、池の緋鯉を見てゐるやうなふりをしながら、青年は、兵兒帶のあひだからわたしをとりだし、人に見えないやうに、そつと金高を調べて見ました。あす職にありつけるか、それともあさつてか、しあさつてか、あるひは半月一月、ただ遊ぶことになるかも知れない不安な境遇にある青年にとつては、わづかな入場料の支出も、一生の大事を考へるほどの苦心を要したにちがひありません。

不意に、わたしは、口金をしめられると同時に、青年の掌の中にぐつと握りこめられました。青年のうしろに誰か近づいたらしいのです。わたしは、その誰かの眼に、ちらとのぞきこまれたやうに感じました。

それをしほに、青年は、わたしをふたたび兵兒帶のなかへまきこみ、橋をわたつて、活動館の前へ出ましたが、それでもまだ決心がつかないらしく、一二度そこらを行きつ戻りつしたあげく、やうやう或館にはひつたのであります。

おしろいの匂ひをさせた案内女の、あだめいたものごしや、媚びるやうな優しい聲が、わたしの主人にどう感ぜられたか、たしかにはわたしに解りませんでした、けれども、それまで、片方の手で兵兒帶

の上からわたしをおさへてゐたのを、さて、あの垂幕の中へと案内される瞬間、たちまちその手がわたしの上からはなされたのであります。察するに、多分わたしの主人は案内女にくらやみへと導きいれられたその時かぎり、暫く、わたしの存在を忘れたのでありませう。

やがて、主人公は、土間のうしろの横木にもたれました。喜劇の説明が、咽喉をひらべつたくしたやうな聲で、かなり遠くの方からきこえて來てゐました。その間間には、映寫機械の音がはつきりとききとれました。時には、ごく短い間、一齊に笑聲がおこりました。

ふと、わたしをまきこんでゐた兵兒帶が、そつとそつと、實にそつと、ちやうど、破れやすい薄紙をピンセットででも摘みあげるやうな努力で、そつとそつとほどされかけたのであります。さうしてゐるうちに、わたしの口金のところに、二本の指がかかつたと思つた時、どこから寄せて來たともない人波にでも押されたやうに、わたしの主人たる青年は、前の横木に胸をこすつて、そんなにひどくではありませんでしたが、横ざまに押されました。その時です、わたしは、或敏捷な指によつて、兵兒帶から拔きとられたのであります。それをしたのは、他人の手であつた事は云ふまでもありません。

わたしは一旦、袂の中へおとされました。それから、すぐに握りあげられ、うちぶところで器用な指先の運動によつて、中味を調べられたのであります。まづ紙幣が拔きとられました。次に、大きな銀貨をかぞへるのでしたが、不思議なことには、音がすこしもしないのです。……やがて、紙幣は別にした

まま、わたしの口金はとざされ、さつきとは反對の袂へ入れられました。

喜劇はをはつたやうであります。そちこちに吐息がおこり、つづいて、館内はざわつきはじめました。

そして、わたしの豫感してゐたことが起りました。やうやく蟇口の存在を思ひ出した信州青年は、それが紛失してゐたことに氣づき、あわてふためいて搜しはじめたのであります。

わたしの新しい持主は、づうづうしくも、青年に、何を搜してゐるのかと問ひかけました。まつたく他人ばかりのたよりない世界に、青年はこの同情者を見いだして、すでに救ひを得たもののやうに喜び苦學の志しを抱いて、今日東京に着いたばかりであると云ふことを告げ、苦學に先だつて、せめて一度の樂しみを味はうとここへ來たところ、村を去る時母に惠まれたかなりの金、青年にとつてはこの數日の命の綱であるところの金、それを蟇口ぐるみ紛失したことを訴へたのであります。

それでは、どこかそこらの誰かの足もとにでも落ちてゐるかも知れない、よく搜して見たまへ、おれも搜してやらうと、この惡人は、そこらの人達にもふしあはせな青年のことを吹聽しながら、土間をさがしたのであります。どこにも落ちてゐようの筈はありません。

不幸を嘆く青年の聲も、もうきこえはしませんでした。あきらめたのか、あるひは、あきらめるだけの力もなかつたのか、……多分、横木にでももたれ、誰に見られるのも厭はしく、兩手で顏の兩側をかくし、館内の澤山な電燈の灯が、涙の眼にきらきらきらめくのをでも見てゐたことでありませう。

さうしてゐるうちに、悪人の袂の中で、わたしを摑みあげられました。また、うちぶところのところで口金を開かれたのであります。そこへ、思ひがけなくも、さいぜん拔きとられた紙幣がまたおしこめられました。この悪人にも、惻隱の情はあつたのであります。ふところでわたしを握りしめながら、下駄で地をさぐるやうなふうでゐましたが、何かを怪しむ聲音を發すると同時に、地にかがんだのであります。そして、たくみにわたしを摑み出し、それが、さも自分の足もとに落ちてあつたかのやうによそほひ、顏をあげて青年に呼びかけながら、拾ひあげたのであります。

わたしをふたたび手にすることが出來て、青年はずゐぶんよろこびました。よろこびのあまり、田舍者の律儀心に驅られ、墓口から紙幣を一枚とつて、拾ひ主にさしだしました。けれども、かの悪人は、そんな貧しい青年の申出を甘んじて受けることを恥辱と感じたほど、善良であつたのであります。

さて一人の掏摸が惻隱の情を示したこの一小事件の背後に、いつのまにか一人の刑事が忍びよつてゐたのであります。刑事は掏摸の袂をとらへ、馴れた眼顏で合圖し、微笑しながら、群衆をかきわけ、彼を館外へとひいてゆきました。

鸚鵡の話

わたしはアマゾン種の鸚鵡です。

リオ・デ・ジヤネエロの鳥屋町で、ある日本汽船の事務長に買はれました。

事務長は非常にふとつて、笑ふと眼のなくなるやうな、また、よく笑ふ無邪氣な人でした。

日本に歸る航海中、夜になると、わたしの新しい主人は、事務長室の長椅子にもたれ、ウヰスキーをのみながらいい機嫌で、わたしに言葉を敎へるのでした。

「おさだ。」

「はあい。」

「おさだ、はあい。」

「かあいいおさだ。」

かうくりかへしてゐるうちに、だんだん醉ひがまはつて來ると、主人はわたしのことも忘れてしまひ、さも自分が鸚鵡になりきつたやうに、ひとりでしやべりつづけ、はては愉快に笑ふのがきまりでした。

「おさだ、……おさだ、おさだ、おさだ、さだ、さだ、……だだだだ、ははははは、……」

最初、わたしには、それがよくのみこめませんでした。籠のなかから、小首をかしげて、主人の笑ひ興ずる顔を不思議さうに眺めてゐましたが、その、わたしのとぼけたやうな恰好がをかしいのか、主人はますます顔をあふむかせ、眼をほそくし、咽喉の奥まで見せて笑ふのです。

わたしはつい不機嫌になり、籠の鐵骨を嘴で噛む、すると主人は、わたしも何か飲みものを欲しがつてゐると思ひこみ、手にしたちひさな杯を、わたしの鼻先へさしつけるのですが、ウヰスキーのにほひをかぐと、わたしは忽ち眼をまるくし、冠毛をさかだててしりごみする。

「ほほう、ウヰスキーは駄目か！　葡萄酒でなくつちや、……ははは！」

と、主人はまた面白さうに高笑ひしては、しきりにウヰスキーを飲みつづけるのです。

馴染のうすい間は、所在がないので、わたしはよく、丸窓から暗い海を、これと云ふこともなしに眺めてゐたものでした。

暗いとは云つても、何も見えないわけではありません。あるかないかの星あかりは、かへつて、舷側にうねる夜の海を透明な蒼さに深めてゐるやうに見えました。

その深い蒼さが、わたしの眼にしみじみと故郷のすがたを思ひ出させたのです。

わたしの先祖は、多分アマゾン河の流域に、森林生活をしてゐたのにちがひありません。大鬼蓮の花

が開くのを見ては、朗かな朝のよろこびをうたひ、森林をすかして、遠くに落暉のくだけるのを眺めては、幸福な一日の終りをうたひあひ、そして、安樂な眠りにつく準備をしたことだらうと思ひます。

わたしの乏しい知識は、これよりこまかな故郷の想像畫をつくらせないのです。なぜと云ふに、わたしは一體どこで生れたかも知らず、親も知らず、兄弟も知らず、物心ついた頃には、すでに、リオ・デ・ジヤネエロの郊外、小高い丘に築かれた、ささやかではあるが古城に似た趣ある邸の、階上の露臺につるされてゐたのですから。

そこには、水に浮ぶ大鬼蓮のかはりに、おほきな仙人掌の花が、上からすうつとわたしの籠のそばにさがつてゐました。それを眺めるのが、せめてもわたしの心やりでした。

事務長室の丸窓をとほして、暗い海へぢつと眼をそそぎながら、常春藤にとりまかれた古風の邸、わけても、青苔あざやかな石欄のならぶ露臺のあたりを、わたしは思ひ浮かべてゐたのです。籠がつるされて、なかには、綠と瑠璃の毛並つややかなアマゾン種の鸚鵡がゐます。籠のそばには、仙人掌の赤い花がさがつてゐます。その花からは、高い香氣がかよひ、熱をふくむ、血のやうな色がにじみでる。……

露臺から部屋に通ずる戸口には、中世紀の浮彫像がきざまれてゐます。部屋は暗いので、たがひにむかひあつたその一對の像は、あざやかに浮びあがつてゐるのですが、すると、その戸口に、黑い寬服を身にまとうた、白髯の老人があらはれる。……

その老人が、邸のあるじだつたのです。不思議にも老人は、籠の鸚鵡に一言葉も教へませんでした。ただそばに來ては、いつもの嚴肅な顏色をすこしもくづさずに、ふかいまなざしで鸚鵡を見つめてゐるばかりでした。鸚鵡も一言葉も發しませんでした。また、その丘は、柳子や檳榔子の木立にとりまかれた靜寂な地で、町の鐘の音一つきこゑないのですから、鸚鵡は何もききおぼえることはできず、啞者のやうに暮してゐたのです。

不幸にも、その邸は沒落し、沒落の途上で老人は死に、鸚鵡は町の鳥屋に賣りわたされ、そこからまた、ある日本汽船の事務長に賣られたのですが、……

わたしは懷郷のおもひにひたつてゐました。丸窓をふちどつた眞鍮の金具も見えず、海も見えずただ暗黑のなかに、あの白髯の老人をゑがいて、つぎつぎに記憶のあとをたどつてゐると、不意に、新しい主人の陽氣な笑ひ聲に驚かされました。

「ははははは！」

その時以來、わたしは、主人の笑ひ聲をきく度毎に、ふるい棲家のあの露臺に立つ黑衣白髯の老人をきつと眼にうかべるやうになつたのです。

さうしていつのまにか、わたしも主人の笑ひを覺えこんでしまひました。

やがて、船は日本の港に着きました。

主人の家は東京の郊外で、主人の母と、主人の奧樣と、主人の弟と、その四人家內に、女中が一人ゐました。みないい人達ばかりで、わたしも懷郷病を忘れ、樂しく日を送つてゐるうち、日本へ歸つてからは陸上勤務にかはつてゐた主人が、一年ほどして死んでしまつたのです。

けれども、わたしは、主人に教へられた言葉を決して忘れませんでした。

「おさだ、はあい。」

「かあいいおさだ。」

緣側の籠のなかで、わたしはたいがい一日に二三度は云ふのです。それはあながち、葡萄酒にひたしたパンが欲しいからではありませんでした。それもほしいにはほしい。なにせ、リオ・デ・ジヤネエロの郊外に飼はれてゐた時以來の大好物ですから。それにも僞りはありませんが、わたしが日に二三度、時には五度も、……殊に朝早く、まだ奧樣が寢床にやすんでゐるうちにか、さうでなければ、夜遲く、ちやうど奧樣がひとり寢の床にはひつたと思はれるやうな時刻に、死んだ主人がかたみにとわたしに殘してくれた言葉で、奧樣を呼ぶのは、葡萄酒にひたしたパンを食べたいと云ふやうな、そんなさもしい了見からとばかり思はれては、わたしは自分ながらはづかしくならずにはゐられません。

それはさうとして、わたしが呼ぶと、奧樣はたいがい緣側へ姿をあらはすのです。朝まだきですと、ねまきの裾をすこしひきずりぎみに、時にはあかいものをさへちらちら見せるやうな、あだめいたしど

けなさで、……それに、蒼白い頬に寢亂れ髪を散らし、そしてはうるみがちな眼でわたしを見あげる。……

主人が死んだ當座は殊に、奥様はわたしを見ると泣いたものです。わたしにも惡魔的な慘忍性があるのでせうか、わたしを見あげてゐる奥様の二つの眼に、涙がにじみあがるのを見ると、わたしはなほさら奥様に悲しいおもひをさせ、いつまでもいつまでも泣かせておきたくなるのです。それでわたしは、籠のとまり木から、しげしげと奥様の顏を見おろし、死んだ主人の聲で奥様の名をつづけさまに呼ぶのです。

見る見る奥様の眼には涙がにじみ、こまかい水晶のやうな光がいつぱいあふれたかと思ふと、それが一つにまとまつて、眞珠のやうな珠がころがり落ちる。

しまひには、ねまきの袂を顏にあて、肩ををののかせては、泣きじやくるのでした。

一度、奥様がやはりさうやつて泣きじやくつてゐた時のこと、わたしはつひまた「おさだ。」と呼んだのでしたが、その時奥様は、顏に袂をあてたままで、「はい、」と返辭したかと思ふと、今更に悲しみがこみあげて來たのでせう、泣聲をそとに洩らすまいと袂を齒でぎりぎりかみしめては、前よりもはげしくむせび泣くのでした。やがてやうやう悲しみがをさまると、奥様は顏をあげてわたしに呼びかけるのです。

「マノンや！」

マノンと云ふのは、死んだ主人がわたしにつけてくれた名前です。わたしの先祖が、アマゾン河の流域に棲んでゐた、それをなつかしんで、アマゾンの別名マラニヨン、それを呼びいいやうにつめて、マノンと云ふことにしたのでせう。

「マノンや！」と、奥様はあらためてわたしに呼びかけました。「ね、マノン、どんなことがあらうと、わたしは決してお前を見すてやしないからね。」

奥様は、また袖で涙をぬぐひ、不覺にも小娘のやうにしやくりあげながら、「お前にわたしの名を呼ばれると、どうしても旦那様が死んだと云ふ氣がわたしにはしないんだよ。今でもどこかに旦那様がゐてぢつとわたしを見てらつしやるやうに思はれてならない。ほんとに眼に見えて來る。……いつだつたかたしか、朝だつたね、なんでも、いつもよりは氣分がいいとおつしやつて、病室の障子をあけさせたりしてゐると、お前がいきなり、「かあいいおさだ！」つて呼んだぢやないこと。あの時旦那様はわたしをぢつと見て、晴れ晴れしい笑顏をなさつたわ。きつと、旦那様は、死んでもあとにはマノンがのこつて旦那様のかはりにわたしの名を呼んでくれると思つたのにちがひない。それであんな晴れ晴れしい笑顏をなさつたのよ。眼に見えるやうだ、ほんたうに。……あれから間もなくだつたわねえ、死んだのは。」

かう云つて、奥様はまた袂を顏にあてがふのでした。

奥様は、よく、くどくどとわたしにかきくどきました。ある時、それも大分夜更けてからのこと。わたしは滅多に夜は呼ばないのでしたが、その時はどうしたのか、……一つは、寂しかつたものと思ひます。夏のことで、姑と、死んだ主人の弟、大學生でしたが、その二人は海岸の方へ避暑に行き、家には奥様と女中と二人のこつてゐるきりでした。ずゐぶん寂しかつたと思ひます。それと、もう一つ、その夜はひどくむし暑かつたのですが、そんなことからひとりでに故郷がなつかしくもなつたのでせう椰子のにほひや、さうかと思へば、芳烈な華尼爾拉蘭のにほひが鼻におそひかかるやうな氣がして來る。懐郷病とでも云ふのでせうか。孤獨感とでも云ふのでせうか。わたしはつひ眼をつぶつて、ふだん呼びなれてゐる奥様の名を呼んだのですが、するとまた、あのながい航海中、夜な夜な事務長室でききなれたウヰスキーのにほひまでがして來るのです。

だが、ふと、縁側づたひに人の足音をききつけ、眼をひらくと、奥様の白いねまき姿が、わたしの前にたたずんでゐるのです。ああ、思はず奥様の名を呼んだのだつたなあと、その時はじめて自分でも氣づいたくらゐ、夢中だつたのです。折角やすんでゐるところを起して、わるかつたと思ひました。けれども奥様は、すこしも不平らしい様子もなく、……どうするつもりなのか、籠をぶらさげて部屋へわたしを連れこみ、机の上にのせました。そして、いつもの涙ぐんだやうな眼ではありましたが、さほど悲しさうな顔でなく、死んだ主人に頬を指先でつつかれるときつとそれにむくいた、あの愛らしい微笑をさ

へうかべて、わたしに云つてきかせるのです。

「今夜は、あたしのお部屋で一緒に寝ようねえ。いろいろお話しませうよ。」

さう云つて、奥様は人差指を籠の間からさしいれました。わたしはすぐに、桃色にすきとほつた貝殻のやうな爪を嘴でかるくくはへました。これは、いつからともなく、奥様とわたしとの親密さをたがひに表現しあふ一つの手段となつてゐたのであります。

やがて奥様は、蚊帳のなかへはひりました。あをあをと水のたたへた硝子のうつはをすかし眺めるやうな美しさを感じながら、わたしは奥様の寝姿を、蚊帳のそとから見てゐましたが、ふと奥様は、枕の上に顎をのばしてわたしの方へ笑顔をむけると、それまで枕元に伏さつてゐた團扇をとりあげ、そのとりあげられた團扇の下を、さもわたしに見てごらんと云ふやうなしぐさをするのです。

はじめわたしには、なんだかよく見えませんでした。前へ乗りだし、こくびをかしげてとみかうみしてゐるうち、奥様はぢれつたさうにそれを手にとりあげ、蚊帳のすぐそばへさしのべたのですが、それは事務長の制服を着た、主人の寫眞だつたのです。

船の甲板に、夏の白服で、やはりいつもの、眼をほそめた機嫌のいい笑顔のまま、休めの姿勢でとつたものでした。それを見ると、わたしは變に氣むづかしくなり、籠の骨を横くはへにくはへ、翼をひろげ冠毛をさかだててぢれはじめたのです。

あの、南米から東洋へわたるながい航海を思ひだしたのです。毎夜毎夜、事務長室で、長椅子にもたれ、ウイスキーの杯を手にしながら、わたしに奥様の名を教へこんでは興がり、はてはわたしのことも忘れ、自分ひとりで奥様の名を呼びつづけ、眼をほそめては哄笑する主人の顏が、わたしの眼の前にうかびあがつたのです。……

「マノンや！　マノンや！」

と、わたしをなだめにかかる奥様の聲をききはしたのですが、それでもわたしは、まだ籠の骨をくはへてはぢれぢれしてゐました。

「解つたよ、マノンや、もうしないの！」

云はれて、わたしはやつと翼をたたみ、冠毛もおろし、とまり木におとなしくとまりました。

奥様は床に腹ばひになり、顏をあげてわたしに話しかけるのです。

「子供もないんだし、若くもあるんだし、かうしてゐてはかあいさうだからつて、お姑さんが云ふんだよ。ねえ、マノン、そんなにあたしはかあいさうに見えて？　見えないわねえ？　それだのに、お姑さんはかあいさうでならないんですつて。實家へひきとつて、いいところがあつたら再緣するやうにしなさい、よく考へてごらんて、二三日前にも、避暑先からお手紙で云つてよこしたのよ。あたし、すぐに返事やつたわ。たとへ女中がはりにでもようございますから、一生おそばへおいてください、再緣する

なんて夢にも思つてはゐませんからつて、……そしてね、それがもし御無理なら、それではせめて、弟さんが來年大學を御卒業なさることでもあるし、さうしたらいづれお嫁さんをおもらひになることでせうが、それまでなりとここにおいて、何かのお手傳ひさせてくださるやう、おねがひしますつて、……ねえ、もつとものことでせう？　マノン！」

わたしは眼をつぶつてゐたのでした。マノンと呼びかけられ、眼をひらくと、奥様の黑い瞳が蚊帳をとほして、ぢつとわたしにそそがれてゐる。

「眠るんぢやないのよ。お話してゐるんぢやありませんか。……さあ、そこからあたしの名を呼んで頂戴、上手にね、おさだつて。」

奥様の方へ首をさしのべて、わたしは呼びました。

「おさだ！」

「はあい！」

と、咽喉の奥で優しく答へると、奥様はあどけない笑顏をかしげました。

「おさだ、はあい！」

わたしは調子にのつて、今度は呼聲と返辭を一緒に云つたのですが、すると奥様は、聲をたてて笑ふのです。わたしはすぐに、死んだ主人の笑ひ聲を思ひだしました。

「おさだ、おさだ、おさだ、……さだ、さだ、さだ、だだだだ、ははははは、ははははは！」

「ははははは！」

と、奥様も、心の底からのやうに笑ひましたが、やがてのこと、枕について、しばらくは團扇で風をいれてゐるうちに、寢ついたのか、それともわたしの方がさきに眠つたのか、……

どれくらゐの時間がすぎたのか知りません。ふと、かすかにではあるが、耳の底を刺すやうな叫び聲で、わたしは眠りからさまされました。けれども、まだ眼をひらかず、うつらうつらしてゐると、その叫び聲が、頭のすぐ上あたりに、まださまよつてゐるやうな氣がし、なかば夢心地で、その正體をきはめようきはめようとあせりつづけてゐるうちに、ひとりでに眼があきました。

蚊帳のなかは、怖ろしい光景を見せてゐました。寢床に寢たなりで、奥様は、黑い着物の男に上からおさへつけられ、もがき爭つてゐるのでした。男は片手で奥様の胸をとらへ、片手で光るものを奥様の眼先にふりまはし、今にも命を奪ふやうにおびやかしてゐる。たうとう觀念して、ぐつたりと兩手を下におろし、奥様は眼をつぶつてしまひました。

その光景を見てゐる間ぢゆう、わたしは、例のとほり冠毛をさかだて、籠の骨をかじつてゐたのですが、奥様が、その男のなすままにまかせようとするのを見た時、自分でも不思議におもつたほどのはげしさで、奥様の名を呼んだのであります。

夜の寂寞に、その、嗄れた呼び聲がまだ消えはてずに、かすかに響きのこつてゐるうちでした。怪しげな聲をたてながら、奥様はいきなり男をはねのけようと、必死にもがき爭つたのです。瞬間、男の手から光がほとばしつたと見ましたが、やがて奥様は、胸をくれなゐに染めてたふれました。

男は電燈を消して、ひそかに窓からのがれ去りました。

あけはなつた窓から射す、夏の夜の光は、青い紗の蚊帳をとほして、かすかに奥様の屍を照らしてゐました。

「おさだ！」

と、誰かくらがりで呼んでゐるやうな聲が、わたしにきこえました。わたしは小首をかしげ、耳を澄ましたのですが、それきり何もきこえないのです。

するとまた、どこからともなく、多分屋にかがやく空からでもつたはつて來たのかとも思はれ、またわたしの空耳かとも思はれるのですが、風呂敷にでもつつまれたやうな、けれども朗かな陽氣な笑ひ聲がするのです。

わたしはしばらく眼をまばたいて考へてゐましたが、あまりの靜けさに、ふと奥様の名を呼びました。

「おさだ！」

誰も答へはしませんでした。

「おさだ！」

と、もう一度呼んで、そのつぎに、

「はあい！」

と、咽喉の奥をほそめ、優しく答へました。

「おさだ！　はあい！」

「おさだ！」

わたしの聲は、だんだん嗄れ、だんだん鋭くなりました。

「おさだ、おさだ、さだ、さだ、さだ、……だだだ、ははは！」

「ははははは！」

叫びつづけると、わたしは闇のなかにぢつと眼をつぶりました。その時、ひとりでに、あの、あかい仙人掌の花がしなだれかかる露臺に、ふとたたずむ黒衣白髯の老人、わたしに一言葉も敎へなかつた老人、その、籠の鸚鵡をふかいまなざしで見てゐる無言の姿が、わたしの眼にうかびあがつたのです。

戀と逆立

或夜、踊場で、一人の男と二人の女の對話。

アメリイ（美しい女）「ねえ、フイリツプ、あなたは逆立の名人ですつてね？　なら、エツフエル塔の一階目、あのてすりの上に逆立して見せないこと？　そしたら、わたし、あなたの云ふことをきいてあげるわ。どう？」

フイリツプ「そんなことぐらゐ！……ぢや、それさへして見せたら、必ず云ふことをきくんですね？　よし！　明日の午後一時、約束しましたよ、きつと！」

アメリイ（につこりうなづく）

マリイ（アメリイより美しくない女）「そんな馬鹿なことを、フイリツプ、するもんぢやなくつてよ。そんなことするんなら、わたし、もうあなたとつきあはない！」

アメリイ（優越を感じ、得意氣に）「だつてね、フイリツプ、マリイがつきあはないつても、あなたはわたしとさへ一緒になれれば、ねえ、それに越したことはないんでせう？」

フイリップ（上機嫌で立ちあがり、音樂にあはせて口笛を吹きながら、卓子の間で踊る）

マリイ（うち沈み、言葉なく去る）

アメリイ（マリイの後姿をさげしみの眼で見送り）「かあいさうなマリイ！（笑ふ）ぢやフイリップ、明日の午後一時、わたしは塔の下で見てゐるわ、……シヤン・ドウ・マルスで。」

フイリップ（女を抱いて、ダンスをする時のやうな手つきで、上體を調律的にうねらして踊りながらアメリイの背後にせまり、徐徐にアメリイに傾きかかり、顏をよせて接吻しようとする）

アメリイ（のけぞると同時に、フイリップの顏を平手で押しやり）「いけない、いけない！　今はいけないことよ！　明日！　ね、明日の午後一時、あなたが約束のことをしをほせたら、わたし、すぐさまエッフエル塔へ昇つてつて、そこで、思ふ存分接吻させてあげるわ！」

翌日の午後一時過ぎ、エッフエル塔の一階目。

フイリップは約束の逆立を終り、今に昇降機でアメリイが昇つて來るのを待ちながら、にこにこと、上機嫌で、汗をふいてゐる。周圍には男女群り、フイリップの勇敢な行爲をほめそやしてゐる。

その群衆の中から、一人の若い美しい（アメリイよりもずつとあでやかな）妖艶な女が、つと前に進み出で、媚びるやうな眼でフイリップをなぶりながら、……「なんて、あなたは素晴らしいかたなんで

せう！　わたし、感心しちやつたわ！……でもね、わたし、いつか誰かが、やはりこの一階目で、あなたとおなじやうなことをしたのを見たことがありますのよ。ですからね、（ますます媚態をつくし、ふいと盜むやうな眼づかひをフイリップにすると、その眼をだんだん上眼づかひにして、ずつと上の二階目までやると、そこでぴたつと止め、急にあでやかに笑ひ出し）……ね、解つたでせう？　あそこでならまだ誰もしたことはなくつてよ。ですから、若しもあなたが、あの二階目で、今やつたやうなことをして見せてくだすつたら、……（あとは眼で、相手を惱殺するごとく）……」

ちやうどその時、下から昇つて來た昇降機が一階目にとまると、アメリイが狂人のやうにそこから飛び出し、夢中で群衆をおしわけ、フイリップの前へ出ると、いきなりフイリップの胸に身を投げかけた。

が、フイリップは左手でアメリイをおしのけ、右手の食指を立てておのれの口にあてがひ、アメリイをぐつと脅しつけ、そしてから、おもむろに、その、アメリイよりも美しい女に向つて、慇懃に、……

「それでは、どうぞ御覽ください。これからすぐに、あの二階目にのぼつて行つて、そこで見事にやつてのけますから、……」

アメリイより美しい女「え、どうぞ。成功なさつたら、五分の後に、わたしはあなたの、……」と、彼女は意味ありげに唇を動かして微笑む。

アメリイ（フイリップにとりすがり）「ね、フイリップ、後生ですから、もうしないで！　わたし、さ

つき、下で見てゐて、どんなに心臓をしめつけられたか知れなかつたのに！　なぜ、わたしの大事なフイリップに、あんなことをさせようとしたのかと、わたし、ほんたうに後悔したのよ！　ね、もうしないで頂戴！　さあ、一緒に歸りませう！」

フイリップは耳にもとめず、哄笑しながら二階目行きの昇降機に乘つた。アメリイより美しい女は、勝ち誇つたやうにアメリイを尻目にかけ、ゆうべアメリイがマリイにしたとおなじやうな嘲笑を投げかけた。

さて、讀者諸君よ、アメリイよりも美しい女に懇請されて、フイリップが二階目のてすりの上に第二回の逆立を成就した時、その、アメリイより美しい女にもまさつて、更に更に美しい女がそこに現はれ、フイリップに向つて、更に三階目で第三回目の逆立をなすことを懇請するの場面を、ここに描きいだす必要がありませうか？　しかもそのうへ、三階目で第三回の逆立をフイリップが成就したところ、そこへまた、アメリイよりも美しい女にまさつて、更に更に美しい女、と、作者が記述したところの、その女よりも、はるかに優れて美しい女性が現はれ、何事にせよフイリップの云ふがままになるかはりに、今度はあのエッフエル塔の頂上で逆立をして見せてくれと願つた、その場面を、ここに描きいだす必要がありますまい。ただ、ここに記さなければならないのは、この最後の申出を、わが

勇敢なるフイリップは斷然、しかも色をなして拒絶したことであります。

昔語によれば、往昔アレル塔とか云ふ塔で、或る逆立の名人が、わがフイリップの如く、次次に美人に請はれ、次第次第に階を高めて逆立を行つたが、つひにアレル塔の頂上で最後の望を達せんとした際しそんじて、眞逆様に地上に墜落慘死したとか。これを以て、或は男性の飽くなき享樂慾にたとへ、後人に對する警めとなし、或はまた、命にかけても愛する女性を得んとし、戀愛を成就することに一生を捧げたロマンチストとして讃美し、斯くの如き勇者が今や全く跡を絶てるを嘆ずるの士もあるとか。

飛つて見るに、わがフイリップ先生は、……二十世紀の現代に生を享けた、わがフイリップ先生は如何？　これについては、作者は何事をも述べますまい。ただ最後に、その夜、踊場の一隅に起つた一小事件を記してこの稿を終りませう。

前夜とおなじ踊場の一隅。フイリップとマリイ、相擁して戀に醉ふ。

鵜の巣

學校街の町はづれにある小規模の菱形の辻公園モンジュ、匂のたかい白薔薇の棚蔭に、蔦にからみつかれた古風な青苔石の腰掛で、三吉と齒つかけの娼婦ジャンヌは、麪麭に羊乳乾酪に大傷詰で貧しい晝餐を無言裡にしたためた。

三吉は悲しかつた。ジャンヌに病氣を貰つたのだから。前齒の上下ともにない齒つかけのジャンヌは、紙袋から白葡萄の一房をとりだして三吉に渡しながら、お婆さんのやうな口の洞で、さも慰め顏に媚び笑ひをしたものの、そのジャンヌさへも、心では悲しがつてゐるに違ひなかつた。巴里のおしやべり女が、食事中も食後も、一綴りの言葉すら口に出さないなんて、……それが何よりの證據だつた。

サン・ミシエルの並木道から學校街をずつと歩いて、道道、麪麭や羊乳乾酪や大傷詰や白葡萄を買ひこみ、辻公園モンジュとはひつて白薔薇の匂をかぎながら、さて青苔石の腰掛の上で晝餐をはじめようとする時まで、ジャンヌは殆ど口を休めずに、色色な話を三吉にしてきかせたのだ。

「イヴォンヌはね、喧嘩しちやつたのよ、キャフェ・ダルクウルの主人と。給仕が悪いんだわ。あの禿頭の

ふとつちよのボオルさ、イヴォンヌに振られたもんだから、あること無いこと主人に讒訴したんだつて。いつだつたか一人の亞米利加人を何處へかくはへこんで、朝になると、そのお客がまだ眠つてゐるうちにお金を盜んで逃げちやつたとか、……酷い奴ぢやないの、あのボオルつて奴、あんな人情深いイヴォンヌに、どうしてそんな、お金を盜むなんて悪い事が出來るもんですか。おしまひにはね、鑑札の期限がきれてるのに、税金も納めないんで、無鑑札同樣でイヴォンヌは商賣してるんだつて、……あきれつちやうぢやないの、誰が無鑑札でなんか、あたしのやうな貧乏人でさへ、入齒を質においても税金だけはちやんちやん納めてるくらゐですもの、どうしてあの賣れつこのイヴォンヌが、……そしたらね、ダルクウルの主人も馬鹿ぢやないの、給仕の云ふことを本當にしちやつて、大勢の前でイヴォンヌに、鑑札を見せろつて云つたんだつて、隨分ひどい侮辱ですわねえ。あたしにしたつて、腹が立つちやうわ。……」

「あら、どうしたつての、サンキ？　なぜそんな風に、あたしの顏見るのさ？　齒ぬけの婆さんみたいな口がをかしいつての？　ちがふ？……ああ、今のあの人？　挨拶した？……あれはね、なんでも法科の學生よ、あたしの人ぢやないの、シュザンヌだかブランシュだか、どつちかの好い人よ、キャフェ・スウプレエで時時會ふだけの話。あたしの人だつたら、……サンキ、笑はないでね、だつて、先週の部屋代五十法とどこつて、あたしシャンポーリオンの下宿出されちやつたんですもの、持物全部、……全部たつて埃みたいなもんだけど、それも差押へられて、つまりあたしの部屋へ鍵かけられちやつたのよ、ただち

やはひれないの、五十法持つてかないと、だからね、今の法科の學生ね、あれがあたしの好い人だつたら、すぐに五十法ねだつてやるわ。……いえ、いえ、サンキは違ふのよ。サンキにはねだつたりなんかしやしない、たつた五十法ぽつち、今夜にだつて出來ないことはないんだもの、だけどね、それ、お金が手にはひつても、やつぱり毎日々々食べてかなけやいけないでせう、食べると殘らないのよ、をかしいわねえ。でも、もつとをかしいことがあるわ、食べることも樂には出來ないのよ。昨晩はイヴォンヌと二人、メドシーヌのレストラン・シャルチエで、たつたアスペールジュを二本づゝ食べたつきり、今日だつてまだ、朝から三日月麭麭の切れはしも口に入れないなんて、……イヴォンヌもね、或男に注ぎこんでるので今はそれや貧乏なの。顏が綺麗だし、それに、にこにこしてるもんだから樂さうには見えるけど、夜なんか、寢床の中で溜息ばかりついて、……あたし、イヴォンヌの部屋があいてる時には、夜行つてとめて貰つてるの、だからよく解るわ一緒の床へ寢るんですもの。やはりおなじシャンポーリオン、ちやうどキヤバレエ・ノクタンビュールの上隣。……」

「さう云へば、あのシュザンヌね、……知つてるでせう、あのそら、小柄な、可愛い、左の眼の下に黑子のある、……たしか一度キャフェ・スウフレエで一緒になつたぢやないの、眼がほんたうの空色で、さうさう、サンキが好きな眼だつて云つたんだわ。そしたらシュザンヌが、ぢいつとサンキを見てにつこりしたのよ、あたしよく覺えてる、あんまり何時までも二人で見あつてるもんだから、すこし癪にさわつて、

シュザンヌの顏を兩手で挾むなり、ぐいとあたしの方へ捩まはしてやつたのよ、さうして睨みつけてやつたの、したらね、シュザンヌも負けずにあたしを睨みかへしたかと思ふと、突然に大聲あげて笑ひだしちやつたの、……あの娘はあれで、年も若いし、見たところ無邪氣で可愛らしいけど、それや太いところがあるわ、人を食つたやうな、……だからあの時もね、大聲に笑はれちやつて、あたしすつかり敗北したのよ、口惜しくつて忘れられやしないわ。サンキは覺えてる？」

「うん、覺えてるよ。房のやうな柔かい金髮で、赤い帽子をかぶつて、耳に綠玉の飾りをさげて、……」

「まあ、よく覺えてるのね、あの時一度會つたきりで、そんなに細かく見ちやつたの？　どつかで何度も會つたんぢやない？」

「ううん、會ひやしないよ。」

辻公園モンジュの入口に近づいてゐるところだつた。他には人通りもない鐵柵外の彎曲した鋪道に、園內のアカシアの枝が乘りだし、ちやうど眞下に眞晝時の影が光とまざつて斑點をゆるがせてゐる。そこに三吉は立ちどまつて、アカシアの樹をふりあふいで見た。薔薇色の房毛の小鞠が白く緣どられたやうな花は、そちこちの葉蔭に見えかくれしてゐた。

ジャンヌの話を聞いてゐる間ぢゆう、三吉は、病氣のことを何時ジャンヌに打明けようかと思ひつづけてゐた。アカシアの花を見あげ、葉の隙間からさす日光に眼をしかめながら、今この儘の姿勢で、空に

向つてでも呟くやうに病氣のことを云つてやらうかとも考へて見た。

が、體臭が鋭く感ぜられるほど三吉の身近に立つて、おなじやうにアカシアの樹をふりあふいでゐたジャンヌは、急にもどかしさうに一層近く擦りよつて來て、顏をあからめながら小聲で耳元に囁いた。

「ねえ、サンキ、まだここに立つてるの？　ジャンヌはそれや饑じいのよ、饑じいのよ、……解るわねえ。」

三吉は打ちひしがれたやうに頭をさげ、靴の踵で半廻りすると、鐵柵の切れ目から無言で辻公園へ足を運んだ。ジャンヌは三吉を追ひ拔けて、芝地の間の小徑を兩手に食料品の新聞包を捧げ、一つ足を二度づつ踏んで踊子のやうに跳ねながら、青苔石の腰掛をめがけて飛んで行つた。垢じみてよれよれになつた黑繻子のローブの裾が裂けたりちぎれたりして、ところどころ海松のやうなちぎれ屑をさげてゐる見窄らしさが、食事に急ぐジャンヌの歡ばしさうな氣持を、猶更あざやかに浮びたゝせる役目をなした。帽子と云つても不細工な手製者で、廣鍔のそりも整はない型に、やたらに黑繻子の片をかぶせたのへ、安物の赤い造花をまきつけたものだが、この赤い造花の趣味だけでも、一見してすぐに娼婦と誰にも解るのが、今更三吉には悲慘に思はれた。

「サンキ、早くおいでよ。」

腰掛にかけると、ジャンヌはすぐに新聞包を膝にひろげ、何の苦もなささうな明るい笑顏で三吉に聲を

かけた。白薔薇の柵を洩れる斑な光線が、ジャンヌのむきだしの白い腕や、肩や、黑の帽子や黑のローブに印象派の畫のやうな美しい點描を與へ、見窄らしい感じも消えて、まつたく生れ變つたやうな清新さを見せたものの、そばへ寄つて、ジャンヌの横に腰をおろした時には、三吉はまた憂鬱になつてゐた。ジャンヌの明るい感じが、かへつて三吉の憂鬱をそそるに役立つたと云つてよかつた。

麪麭の包紙をとりあげると三吉は萬年筆で書きつけた。

——僕は今朝から鬱いでるんだよ。嫌な病氣にかかつたんだ。

麪麭に羊乳乾酪をつけてむしやむしややつてゐるジャンヌの眼先へ、書いた紙片れを三吉はつきつけて横からぢつと顏の表情をうかがつた。ジャンヌは麪麭を口に入れたまゝ、嚙みもしないであんぐり開いて書かれた文句と三吉を見くらべた。何か云ふにも、咽喉に食物がつかへて無獸に眼を瞬き、容易には聲が出なかつた。三吉はをかしくなつて笑つた。笑ひながらまた書いた。

——最後にお前が僕んとこへ來たのは、三日前の土曜日の晩だつた。さうだね？

「え、さうよ、土曜日の晩。」ジャンヌも今は食べるのをやめて、三吉の書く文字を熟心に眼で追ひかけた。

——お前はちつとも病氣の氣なんかないつて云つたが、嘘だつたんだ。嘘つき女！　僕はもう、嘘をつく女なんかに口もききたくない。

ジャンヌは恨めしさうな眼つきで三吉をぢつと見てゐたが、うなだれて、ながい睫毛をばちばちしばたたいてから三吉の紙片と萬年筆をとつて書きつけた。

――隨分ひどいわ、嘘なんかつきやしないのに、シュザンヌが引つぱられて、サン・ラザールへ留置されたこと知つてる？　でも、それは日曜日の晩のこと。その以前に、金曜日か木曜日あたり、シュザンヌと一緒になりやしなかつた？　なんでもシュザンヌは、病氣を持つてるつて噂なのよ。

かう書いてゐるうちに、ジャンヌの耳根あたりが赤くなるのを見て、三吉は女の嫉妬にをかしみを感じたが、そんな氣振を見せないやうに、誇張的に齒を嚙みならし、眼球をむいて睨みつけながら、拳固をジャンヌの面前に振りあげた。その瞬間、ジャンヌの顏に緊縮した恐怖感が走つたが、それがすぐに媚びるやうな微笑に變り、振りあげられた拳固の下から、深い青い眼で三吉を見あげた。

「御免なさいね、サンキ。」

怒つた表情と拳固の始末にこまり、仕方なしに三吉は空へ向つておどけ顏で口笛を吹き鳴らし、拳固を頭の上で二三度ぐるぐる廻してから、急にジャンヌの方へ向きなほつて云つた。

「今夜オペラへ行かうか？」

「え、連れて行つて呉れるなら、……でも、こんな裝で？」

ジャンヌは兩手をひろげ、快活な笑顏で三吉を顧みた。三吉は脣をとがらかし、頸をちぢめて道化顏

をつくつて見せた。

「さしあたり僕には、藥を買ふ金もないんだよ、オペラどころか、……」

「それぢや、醫者には猶更かかれないのね。」

「醫者へ行くくらゐなら、キャフェへ行くよ。」

それからは、二人は默つて麪麭を嚙りつづけた。

「羊乳乾酪はいけないのよ、食べない方がいいのに。當分葡萄酒を飲まないやうにね。」

思ひついたやうに途中で一度ジャンヌがさう云つたきり、あとは食事のすむまで無言だつた。麵麭屑をもらひにぴよいぴよい足許近くへ跳ねて來る雀にも眼をくれないで、悲しい沈默の中にも、二人は空腹を滿たすに熱心だつた。

食後の葡萄を食べながら、三吉は腰掛の前を右に行き左に行きした。

「ジャンヌ、お前はこれからキャフェ・スウフレエへ行くの？」

「え、行くわ。イヴォンヌの奔走で、多分今日シュザンヌが貰ひさげになると思ふのよ。今朝早く、イヴォンヌが金策に出かけたの。それでね、三時頃キャフェ・スウフレエで落ちあふことになつてゐるんです。あんたも行かない？」

「いや、僕は行かないよ。これからノートル・ダアムへ行くんだ。」

「ノートル・ダアムへ？　何しに？」

「鐘楼へのぼるのさ。鐘楼へのぼつて、巴里の見をさめをするんだ。」

「あら、巴里を去るの？」

「巴里を去るどころか、世の中を去らうと思つてるんだよ。あそこから飛びおりたら、それでいいんだ。お前も一緒に、さうしたらどうだい？」

ジャンヌは立ちあがると、眼を瞠つてぢりぢりと三吉の前へ進んで來た。鼻と鼻とがぴつたりくつつく程に近寄つた。

「サンキ、それや本氣なの？」

三吉は後退つた。ジャンヌは詰めよつた。不意に三吉は大聲に笑つて、くるつと向きかへるなり花壇の方へ足を進めた。そこには、鮮かな萠黄色した楕圓形の芝地を、黄色のチューリップが金の飾杯を連らねたやうにずつと緣どつて、眞晝の日光を反映して靜まりかへつてゐた。

ジャンヌはと見ると、さつきの所に立つたまま、顏色を動かさずに三吉を視つめてゐた。鼻から上が帽子の鍔の影にかくれ、その影の奥に眼がいきいきと輝いてゐた。

「別にノートル・ダアムの上から飛びおりることに決めたわけぢやないんだよ。」三吉は離れたままでジャンヌに云つた。

「かなり前の話だが、或る日本の小說家が巴里へ來たんだ、その人が日本へ歸つて間もなく雜誌に發表した短篇小說に、日本人が巴里の下宿の窓から街へ飛び降りて自殺したことが書いてあつたを、思ひだしたのさ。なんでも失戀のためだつたか、鄕愁のためだつたか、そんなところだつたと思ふ。だが、僕は今失戀してゐるわけでもなし、……もともと戀人なんかないんだからね。……それに鄕愁だつてありやしない、病氣だつて、こんなもの何でもない。ただね、僕の周圍にあるもの、僕の眼に見え、僕の耳にきこえ、最後に僕の第六官に感ぜられるもの、それが一つとして僕に樂しさを齎さないんだ。だから、ノートル・ダアムの鐘楼へのぼつて見ようつてだけの話。鐘楼へのぼつて見て、そこでどうなるか僕は知らない。」

「嘘、嘘です、……あたしから離れたいんで、そんなことを云ふのよ。……」

その時三吉達がはひつたのとは反對側の入口から、小さな娘の手をひいた老人が來かかるのを見て、ジャンヌは口を噤んだ。……

ノートル・ダアムの鐘楼へのぼる、狹い眞暗な塔の內部のやうな、石壁にかこまれた中を、螺旋狀の急な石階を足さぐりで一段一段あがりながら、三吉はジャンヌの云つた言葉を思ひだして見た。

「嘘、嘘です、……あたしから離れたいんで、そんなことを云ふのよ、……」

孫娘らしい五ツばかりの女の子の手をひいて、少し猫背の白髮の老人がはひつて來たので、ジャンヌは

それきり口を噤み、三吉もまた默つて辻公園を出たのだが、街角で別れる時にも、二人はたゞ形式的な握手を交しただけだつた。

セエヌ河の方へ一二間三吉が行きかけた時、ジャンヌはうしろから聲をかけた。

「あとでキャフェ・スウフレエへ來ないの？」

三吉はふりかへりもしないで答へた。

「解らない。」

石階をのぼる途中、厚い石壁を刳つて長方形の明りとりが、遠景の尖塔や屋根や綠の塊や靑空をくつきりと切りとつてゐるところへ、三吉は顏をのぞき出して新鮮な空氣を吸ひこみながら、街角で別れしなにジャンヌに答へた「解らない」と云ふ言葉を考へて見た。

ノートル・ダアムの上から街へ飛び降りて死ぬかも知れない、それだから午後の三時にキャフェ・スウフレエへ行けるものやら行けないものやら解らない、と云ふ隱れた意味が含まれてゐたと考へるのは、あまりに大袈裟な誇張で、むしろ滑稽だつた。事實三吉には死ぬ氣なんかなかつた。さうだとすれば、或はジャンヌの推量が當つてゐたのかも知れなかつた。ジャンヌから離れたいために、ノートル・ダアムから飛びおりるなどと、心にもない嘘を云つた自覺を三吉は持ちはしなかつたが、分析して見れば、成程そんな心理に歸着しさうにも思はれた。キャフェ・スウフレエへ行くか行かないか解らないと云つた言葉も、

さうなると、ジャンヌから離れるか離れないかと迷つてゐる結果の曖昧な表現に外ならなかつた。

また暗い石階をまはりまはりのぼつて、窖の口のやうな狹いところから、やうやう外に出た時、三吉はかなり疲れてゐた。噴火獸の屋頂彫刻がある欄干にもたれ、セエヌ河の方から河岸に茂る鈴懸木の林をそよがせて、ノートル・ダアム前の廣場を斜めに吹きあげて來る微風に、三吉は初めて生きかへつたやうな爽快を感じた。

冗談に、三吉は欄干から上體を乘り出して下の街を見おろした。別に眼のくらむやうなこともなく、寺院へはひる女や、或はその前に立つて建物を見あげてゐる觀光客の一團や、或はいそがしげに通りすぎる男など、小さいながらも手にとるやうに見ることが出來た。だから、左手の橋の方から急ぎ足にやつて來て、手をあげて三吉へ合圖をしたジャンヌを見つけるにも、さほどの困難を感じはしなかつた。

三吉も手を振つて合圖に答へた。ジャンヌは三吉のちやうど眞下へ來て、上へあげた手を先刻三吉がのぼつて來た横の入口の方へ、徐徐に弧を描いておろした。のぼつて來たとほりに、石階を下つて來いと云ふ意味は明かだつた。三吉はわざと、上體をずつと乘りだし、手を何度も垂直に上下して、ここから眞直ぐに降りる記號をした。ジャンヌはさも慌てたやうに、兩手をはげしく左右に振り動かして、それを拒んだ。が、不安でたまらなさうに、急に駈けだした。駈けるにつれて、黑いロープの裾がうしろへ靡くのを見て、三吉は、その裾から海松のやうなちぎれ屑のさがつてゐるのを思ひだし、代りのを一つ買

つてやらうかなどと漠然考へてゐると、鐘樓への登り口へ行く曲り角でジャンヌは振返つた。三吉はまた下へ飛びおりる樣子をして見せると、地團太ふみながら手を振り、さうして蔭へ駈けこんで見えなくなつた。

三吉は再び窖の口のやうなところから、じめじめした空氣を吸ひながら、暗い石階をおりて行つた。二番目の明りとりのそばで暫く待つて見た。かなり下の方から、忙しさうな靴音が、微かではあるが、狹い石壁に反響してきこえて來た。三吉はちよつと惡魔的なほくそ笑ひをしたいやうな快感で、徐徐にまた降りて行つた。

二人の人間が上下から近寄りあつた時、暗闇の中で互に顏を窺ふやうにしたが、三吉が石壁にもたれ、笑顏をつくつて無言でゐるひまに、ジャンヌは挨拶をしてその前をすり拔けやうとした。三吉の踏んでゐる石階に片足をかけ、別の片足をその一つ上にかけながら、ふつとジャンヌは顏を三吉に振りむけた。驚きの聲が、塔內の靜寂を破つた。

三吉は何も云はずに、ジャンヌの片腕を縋らせながら石階を降つた。ジャンヌもものを云はなかつた。暫く行つたかと思ふと、ジャンヌが續けざまに鼻をすすりあげた。三吉は足をとめ、暗に眼をてらしてジャンヌを見ると、またすすりあげながら、あたふた手提袋から手巾をとりださうとあせつてゐた。

「どうしたんだい？」ジャンヌの氣持は解つてゐたが、三吉は優しく耳元できいて見た。

「いいえ、なんでもないのよ、なんでも、……」ジャンヌは手巾で眼をおさへ、泣きじやくりと一緒に震へ聲で答へた。さうして自分から先に、また降りはじめた。

外へ出た時ジャンヌは齒つかけの口をあけて、三吉に微笑した。眼はいつものやうに美しい靑さで、明るく澄んでゐた。

「ほんたうに僕があそこから飛びおりると思ひこんだの？」

「最初は思はなかつたけれど、あんたに別れたら急にこれは大變なことになつたと思つたのよ。」

ノートル・ダアムの前をすぎて橋にさしかかつた時、下の石壘の岸に釣をしてゐるのを見て、二人は欄干にもたれた。セエヌ河がよひの小蒸汽船が通りすぎたところで、そのうねりの餘波がよせて、釣絲のうきが搖れ漂うてゐるのも見えた。

裁判所の大時計が、禱の鐘のやうな朗かな澄んだ音色で、遠くから河面を越えて三時を告げた。

「お前がノートル・ダアムへあがつて見て、その時僕がすでに下の街へ飛び降りて死んじまつてをつたらどうするつもりだつたの！」

「あたしも直ぐに飛び降りて、死んじやうつもりだつたわ。」

「嘘だらう？　お前だつてやはりカトリックの信者ぢやない？　さうだらう？」

「いいえ、もう信者ぢやないの、故鄕のオルレアンへ、信者のジャンヌは、もうとつくに葬つちやたの

よ。」

「もうオルレアンへは歸る氣がない？　お母さんが待つてるだらうに。」

「いいえ、あまり子供が多いんで、きつとあたしのことなんか數へ忘れてるわ。でないにしても、貧乏百姓ぢやねえ、すたれ者の娘よりは、麥の穗一本の方が貴いのよ。おまけに、……」と云ひかけて、ジャンヌは眼を瞠り、神經的に首を振つた。

「……鍬や鎌の使ひ方だつて忘れてしまつたんだし、何よりもいけないことは、あの土の臭が、……」

ジャンヌは舌打をした。

「土の臭が嫌だつてえの？」

「いいえ、サンキ、あんたには解らないのよ。土の臭が嫌などころか、……あたしなんか土から生れたやうなもんですもの、……ただね、この巴里、……巴里がなのよ、……ああ嫌だ！」

ジャンヌに別れて、三吉は金を借りに友人の下宿を訪れた。飴色の窓掛をおろした暗い部屋で、羅典語の本を片手に持つたまま晝寢をしてゐたところへ、三吉は寢臺の横に立ち、搖りおこして直ぐに病氣のことを云ふと、友人は眼鏡の奥で眼をぱちぱちさせ、口を尖らしながら上體をもたげたものだが、……

「金があるのか？」

「ないんだよ。」

「やらう。」

部屋へはひつた時の重苦しさが、忽ち明るく變つて、三吉は街へ降りた。キャフェへ行つて見る氣も自然に起きて來た。

ブウルワール・サン・ミシエルと學校街と丁字路をなしてゐる、その一つの角を占めるキャフェ・スウフレエの前で、三吉は硝子越に中を窺つた。すぐ眼の下に三人の女が對ひあひに喋べりあつてゐた。三吉から見て眞向うに、シュザンヌは、今日は鍔の廣い空色の帽子に耳飾はなく、金髮の房毛を鬢のところへさげ、別にサン・ラザールで寢れたやうな容子もなく、他の女の話でも聞いてゐるらしく、ぢつとしてゐたが、ふと硝子越の三吉を見つけると、血色のいい豐かな頰に笑ひを浮べ、いきいきした空色の眼に誘ひの瞬きをして、三吉を招いだ。一度しか會つたことがないのに、シュザンヌに見覺えられてゐるのを、三吉は甘い心で嬉しく思ひながら、キャフェへはひつて行つた。

暫く見ない間に、イヴォンヌは顏も痩せ衰へ、病人らしい寂しい表情になつてゐた。

「お變りなくつて？」三吉の手を握ると一緒にさう云つたイヴォンヌの笑顏は、却つて憂色を湛へてゐるやうに思はれた。

「有難う、まあどうやらかうやら、……君は？　どこか惡さうに見えるけど……」

「え、有難う、またね、例の咽喉が、……」

イヴォンヌの咽喉は性病的に冒されてゐるのではないかと、日頃その嗄れ聲から推察してゐた三吉は、今また惡いと聞いて暗い氣持にさせられた。

「シュザンヌ、君はどう？」三吉はそれでも快活に云つて、シュザンヌと握手した。

「有難うよ。あたしね、それや元氣よ、大元氣よ。今さつきサン・ラザールから出て來たところなの、まづいまづい肉汁ばつかり食べさせられて、弱つちやつたわ。今晩御馳走して下さらない？」

「あ、してあげよう。」

「本當？」

「本當とも。今晩は、僕もうまい晩飯にありつきたいと思つてゐたところなんだ。」

「まあ嬉しい！」

シュザンヌは薄物一つで乳房の張りきつて見える胸の前に、兩手を握りしぼり、身を震はすやうにして喜悅の表情を示した後、魅惑的な眼をあげて三吉に媚びを送つた。

三吉はジャンヌの嫉視を感じながら、素知らぬ顏でその横に腰をおろしたが、すぐにジャンヌは怖ろしいほど眞劍な顏で詰つた。

「サンキ、そんなことしていいの？」

「何をさ？」

「やたらに食べたり飲んだりしてさ、肉だの葡萄酒だの、……」

「構やしないよ。お前も一緒においで、イヴォンヌも、……」

ジャンヌは鼻の上に皺を寄せて、意地惡い顏をした。イヴォンヌは手紙を書く手を一寸やめて、三吉に目禮するとまた書きつづけた。シュザンヌ一人は、卷煙草の煙を細く吐きながら三吉に美しい媚び笑ひを、惜しげもなく寄せてゐた。

綠色の街燈が午後九時すぎの淡い夜霧に蔽はれ、棒立ちになつた背の高い黑服の巡査の、後姿に肩から斜にかけられた拳銃の革袋を鈍く照らしてゐた。三吉はそれに眼をとめながら通りすぎたが、すぐ前に、イヴォンヌに扶けられて漸うしどろもどろな足を運んでゐるジャンヌの、わざとらしいやうな醉態を見て、それ以上一緒について行く氣がなくなつた。

「イヴォンヌ、僕あ歸るよ、うちへ。」立ちどまりながら振りかへつたイヴォンヌの手を握つた。

「明日また。」次にジャンヌの手を握つた。

ジャンヌは何時までも三吉の手を放さうとはしなかつた。だんだん力を強めて握りしめた。

「サンキ、うちへ歸るつて？　ふふん、嘘、嘘でせう？　これからシュザンヌのとこへ行かうつてんでせう、行けるものなら行つて御覽。行かせあしないから。」齒つかけの口を洞穴のやうにあけ、甲高い震ひ聲できんきん云つた。

「何云ふんだ！　シュザンヌは食事を濟ますとすぐ、今夜はうちへ歸つてぐつすり眠るんだつて、さつさと行つちやつたぢやないか。僕は知りもしないんだよ、シュザンヌの住んでるところなんか。」

「おお、お上手なこと！　約束さへしとけや、何處のキャフェでだつて會へるぢやないの。さあ早く、行つといで、サンキ。」ますますきつく、痺れるくらゐに三吉の手をしめつけた。

「馬鹿！　何時僕が約束したつてんだ。シュザンヌとはものだつて碌すつぽ喋べりやしなかつたんだ。」

「口で云はないたつていくらでも出來るのよ、約束なんて。……食卓の下でだつて出來るのよ、靴の先でだつて、左樣ならの握手の時に指の先でだつて、……ね、さうでせう、Dと書けばダルクウル、Lと書けばリップさ、Pならパンテオン、Bならバルザアル、まだまだいくらだつて、キャフェはあるし……」

「もうよせ、馬鹿！」

三吉は力一杯手をひいた。それでもジャンヌは放さずに、身體ごと引かれて三吉によろめきかかつた。

「どうしても行く氣なの、シュザンヌとこへ？」三吉の胸に兩手をかけ、哀願的な眼差で見あげながら、急にうちしをれた細い聲で云つた。

「誰も行くつて云ひやしないぢやないか、おまけに僕は病氣なんだ。」

「それにしても、ぢや、あたしから離れて行つちやう氣でせう？　さうよ、解つてるわ。戀でもなんでもないんだから、でもね、シュザンヌだけは、賴むから、よしてね。あの女は、それやいけない女なの

よ。ムシュー・ウィル、ほら、そこのノクタンビュールのヴィオロニストね、もとあの人は、隨分あたしを可愛がつてくれたのよ。そしたらね、シュザンヌがあの人にヴィオロン教へて貰ひたいからつて、あたしに紹介賴んだの、……それつきりの話、シュザンヌはヴィオロンなんか、ちつとも稽古しやしないムシュー・ウィルはあたしを、もうちつとも可愛がつてくれやしない。入齒を質に入れたのもその時、着物だつて指環だつて、なにもかもみんな金にしてムシュー・ウィルに、……とられるものは殘らずとられて、それつきり、あたしは拋り出されたやうなもの、……」

「そしてシュザンヌは今も？」

「いいえ、今度はあべこべにシュザンヌの方で、……シュザンヌつてそんな女なのよ。だからね、……」

ジャンヌの無理强ひとイヴォンヌの懇願で、三吉もすぐ傍の小さなキャフェへはひつた。

「あたしが子供であつた時

あたしは、今よりちッちやかつた」

明るい部屋へはひると一緒に、ジャンヌは陽氣にはしやいで、そんな出まかせな唄をうたつて、聲高に笑つた。

「ギャルソン、鵜の巣を三つ。」

頭の禿た太つちよの給仕は、いつものジャンヌの註文を呑みこんで、混合酒らしい黄いろい酒を大きな

コップに三つ、銀の盆に載せて來た。

「有難う。……サンキこれはね、鵝の巣つて酒よ。鵝つて鳥知つてて？　頭の黑い、羽根も黑い、胸だけ白くて、嘴は黃いろで、ちやうどこの酒のやうな、つやつや光つた黃いろよ、だからね、これはあたしのつけた名、鵝の巣つて、……巣は變だけど、嘴つてよりは藝術的でせう。かうやつて、一遍に半分飲んぢやうの、とてもおいしいわ。サンキも飲まない！　病氣なんか構やしないさ。さうよ、あたしが子供であつた時、あたしは今よりちッちやかつた、それに違ひないわねえ。

山からとつた鵝の巣
母がひとりに子が五つ
子供は母よりちッちやかつた

さうよ、たしかにちつやかつたのよ。巣の緣にちつちやな頭を五つ並べて、母ちやんの口から餌を貰ふんだわ。だのにね、サンキ、覺えてるの？　あの雨の降る晩……」

ジャンヌは自分のコップを飲みほし、イヴォンヌのをとり寄せて、その半分をあふり、燃えるやうな眼を輝かして三吉を視つめた。

「あの雨の降る晩、もう十二時すぎだつたわ、ブウルワール・サン・ミシェルの靴屋と寶石屋の堺のところの暗がりに、雨傘もなく外套もなく濡れてしよんぼり立つてゐた女、サンキ、覺えてる、朝つからまだ

何にも胃袋へいれずにさ、五法でもいい、三法でもいい、いや一法も貰はなくつてもいい、誰か暖かい部屋へ寢かせてくれるなら、……肉汁の一杯も飲ませてね、そしたら神樣にお禮を云はうと思つてゐたくらゐ、慘めた境涯にあつた女さ、覺えてるわねえ、サンキ、あの晩暖い部屋へ連れてつてくれたのがサンキだつたんだもの。それだのに、あたしはまた、あんな夜更の雨の中へ、たつた一人拋りだされるとおなじ目に會はせられるんだ。さうよ、鵝の子の方が、どんなに幸福だか知れやしない。

あたしが子供であつた時
あたしは今よりちッちやかつた、
今より綺麗で幸福だつた

……ああ、さうよ、美しい、でも悲しい！」しまひには朦朧とした眼を空間に漂はせて唄のやうなものをうたつてゐたが、がつくりと卓子に伏さり、何か呟くやうにぶつぶつ云つて、最後にぢつと靜まりかへつた。

イヴォンヌはジャンヌの肩を叩いた。

「ジャンヌ、どうしたの？　あたしんとこへ行つて寢ようよ、あたしも一緒に歸るから。」

ジャンヌは首を横に振りながら、起きなほつた。さうしてイヴォンヌのコップをすつかりからにし、三吉の飲みかけをも一氣にあふりつくした。

「ギャルソン、鶫の巣をもう三つ。」

「もうおよしよ、歸つて寢ませう、ねえ？」

「いいや、あたしには歸る家なんかありやしない。寢るところなんか、……」

「あたしの部屋へ來て、昨夜とおなじやうに一緒に寢たらいいぢやないんだ。お前は明日の御飯をあそこで稼ぐんだよ。あたしはどこかの玄關へでも、もぐりこんで眠るから。……イヴォンヌ、お前はあんまり親切すぎる、さうよ、どうせあたしなんか、身體はもう病氣で腐つてるんだもの、……サンキ、許してくれる？」

「違ふ！　お前んとこへ寢るのは、あたしぢやないんだよ、あたしぢやないんだ。」

三吉はうなづいた。「今夜は僕んとこへ來ておやすみ。」

ジャンヌは滿足したやうに、につこり笑顏を見せた。が、すぐに顏を雲らせ、兩手に蔽うたかと思ふ間に、細い忍び泣きを絞りだした。それが張りつめて來ると、胸を苦しさうにそらして椅子の背にのけぞり、帽子をかなぐり捨てて、齒つかけの口から泡を吹き、呻きを洩らして髮をかきむしつた。

「ママン、ママン！　苦しいよ、ママン！」

息のつまるやうな切ない聲で呻きだして、ジャンヌはそれなり泡を吹きつづけた。

「時時こんな發作が來るのよ。」イヴォンヌは訝る三吉に寂しい薄笑ひをして見せ、給仕に濡タオルを頼

んだ。

ゐあはした客は周圍に立ち寄つて來た。三吉はその中で、窪に落こむやうな暗い果敢ない氣持で、椅子の背にのけぞつてまだ泡を吹いてゐるジャンヌの、怖ろしい蒼ざめた顏を凝視してゐた。

血

昨日の朝も咽喉から血が出た。
今朝も出た。
明日の朝も出るだらう。
美代がしぶしぶ七本目の銚子をとりあげて臺所へ立つたあと、三吉はちやぶ臺に頰杖ついて、頭を提灯のやうにぶらぶらさせながら詩か何かのつもりで小聲に云つた。
「何をぶつぶつ云つてるのよ、飲みんべえ！」
しぶしぶいれて來た七本目の銚子を、ごぼりと美代は銅壺に邪慳につつこんだ。
三吉は持前の大きな眼で、美代を睨みつけた。美代も睨みかへした。
「飲みんべえとはなんだ！」
「飲みんべえだから飲みんべえよ。どこに毎晩六本も七本も飲む奴がゐるもんか！」
「どこにゐなくつても、ここにゐるさ。ここにゐるんだよ。ここに。」三吉は顎をつきだした。「それに

第一、飲みんべえなんて間違つてらあ。飲んべえつてんだ、飲んべえ、な、解つたか？」
「どつちだつておんなじでくさ。」
「違ひますとたい。……かうつと、」彼はもつともらしく首をひねつて、「五郎ん兵衞と權兵衞、なるほどたしかにそれくらゐは違ふ、五郎ん兵衞と權兵衞、飲みんべえと飲んべえ、五郎ん兵衞は飲みんべえで、權兵衞は飲んべえ、……」
たうとう美代はふきだした。
「何云つてんのよ、馬鹿馬鹿しい！」
「やつと御機嫌がなほつたな。さうやつてにこにこしてるのが、一番性にあつてるんだからね、膨れちや駄目だ。そんなおまるさんぢやあ、いくら睨んだつて睨みがきかないや。……ところでおれは今、詩をうたつてゐたんだ。自由詩つてやつさ。きけよ！……」
「詩なんかおれに解らないよ。」
「まあさう云はんときけ！」
と、勢に乗じて云ふには云つたものの、三吉はふと氣がついた。毎朝毎朝うがひする時には、なるべく美代に見られないやうに骨折つてゐるくらゐなのに、今更咽喉から血の出る自由詩なんてうたつてきかす頓馬があるものか、ぶちこはしだ、ぶちこはしだ！……そこで彼は、盃をぐつとほした。

「どうしたのよ、詩は？」

「ああ、詩か？　さうだつたつけな、詩をうたふんだつたなあ！　どんな詩だつたか、……何しろ即興詩なんだから、……一體全體即興詩つてものは、……」

彼はしきりに考へた。

「思ひだしたよ、かう云ふんだ。昨日の朝も太陽が出た、今朝も出た、明日の朝も出るだらう、……どうだ、いい詩だらう？」

「そんなのいい詩つてえの？　なら、おれにだつて出來るわ。昨日の朝も鴉がないた、今朝もないた、明日の朝もなくだらう。」

「違ふ、違ふ。鴉ぢやないんだ。太陽なんだ。眞赤な太陽、ね、血、血だよ、血のやうに眞赤な、……」

彼は或る感激に熱して、ぢつと美代に鋭い眼をする。兩腕で顏の前に太陽の形をつくつた。「血で塗つたやうな眞赤な太陽が、昨日の朝も東の地平線上に、ぬつと顏を出したんだ。そこで生活がはじまるんだ。生活は爭鬪さ。つまり喧嘩なんだ。……」

「そらそら、おはこがはじまつた。」

「まあ默つてきけ！　あの太陽つてえやつは、永遠に絶えない爭鬪生活のシンボルなんだ。血のやうに赤く、血のやうに燃えてるんだ。だから、昨日の朝も太陽が出た、今朝も出た、明日の朝も出るだらう、

……こいつは生活讃美の詩なんだ。」

「もういい、解つてよ。でもこんなに冷えると、……」美代は襟をかきあはせながら、長火鉢にかぶさつた。「明日の朝は雪かも知れない。太陽なんか出つこないやー　寒いから寢つちやはう。お先に失敬！」

つかまへどころのない、しかし何かしら火の塊のやうなヒローイックな昂奮を頭にもやしながら、三吉はひとりで酒をのみつづけた。が、八本目の銚子を持つて、臺所に行き、板の間にどつかり胡座をくんで、とりあげた片口にきら〳〵搖れる液體を見ると、ごまかしにうたつた生活讃美の詩も絲瓜の皮ほどの效力さへなくなつた。

昨日の朝も咽喉から血が出た。

今日も出た。

明日の朝も出るだらう。

かすれ聲でうたひながら、三吉は銚子にあふれるほど酒をみたした。さうして藥でも飲むやうなにがひ思ひで、冷たいのをごつくり飲みくだしたが、自分ながらあさましくなつて、無暗に拳固で頭をなぐりつづけた。

血吻空醒千里草。

古雜誌にか、或は何かの本にかあつた句を、三吉は、いろんなものを汚らしく書きつけてある机上の

メモに、いつかやはり心覺えに書いておいた。彼はこの句をどう讀むのか知らなかつた。ただ彼流に解釋して、千里草茫茫たる戰場の跡に、唇に血を流した死屍が横たわつてゐる光景を描いた。

この句をメモに書きつけたのは、血吻の二字にともなふ一つのなまなましい聯想が彼にあつたからだ。

彼も唇に血を流し、相手も唇に血を流してゐた。

或るカフェでの愚劣な出來事だつた。隅の椅子の上に相手をあふのけにおしつけ、そいつの頸を眞上から彼はぐいぐいおしつけてゐた。相手の口角から流れる血を見ると、彼は何とも云へぬ快感に醉つて、頸をしめつけてゐる手の力を、弛めたり強めたりしてもてあそんでゐた。

が、思ひだすと決していい氣持のものではなかつた。むしろ、ぞつと身の竦むやうな思ひがした。

先方は五六人、勿論喧嘩を賣るつもりだつたのだ。買つた三吉は馬鹿だつた。二言三言賣言葉に買言葉をかはしてゐるうちに、向うの一群から誰かがどなつた。

「なぐれ、なぐれ！」

三吉はむつくり立つと、卓子の間を縫つて彼等の前にづかづか進んだ。

「なぐるならなぐつて見ろ！」

彼は臆面もなく、何の身構へもせずに彼等に顏をさらした。三人ばかり前につつ立つてゐる、そのうしろから一人が腕をのばして、三吉の頭上に拳固をふりあげた。彼はそれを避けようともしなかつた。

いきほひその握り拳は彼の頭に落ちて來る外はなかつたが、敵は氣勢に呑まれたか、案外なぐられればえのしない弱いものだつた。

それを見てとつて、機會をはづさず三吉は猛然と腕をふりまはした。なぐられた以上は、なぐりかへす。兩手の親指を內側に握りこんで、相手かまはず突きまくつた。敵が大勢だと云ふことも忘れてゐた。

女給が喚きながら階段を逃げあがるのや、コック場の若者がとめにかかるのや、そんなものが急激な勢で三吉の眼に廻轉したが、彼は夢中で一番首領らしいのをぐいぐい隅におしつけ、椅子の上にあふのけに倒したのだ。うしろから敵に襲はれることを懸念して、半身をひらきめにしながら窺つても、もう誰もかかつて來さうにない。そこで彼は勝ち誇つた氣で、こいつに最後のとどめをさしてやれと云ふ殘忍性から、思ひきり頸をにぎりしめてやつた。

相手は眞赤な顏で、眼を裂けるくらゐに瞠つて三吉を下から睨んでゐたが、やがてそれを瞑りかけながら、力のないながい呻きを口の中で云ふと、また弱弱しく眼をほそめに開いた。

その口角からは血が流れて、だんだん咽喉の方へと重重しくねばりついて行くところだ。三吉はやうやく手をはなした。生れてはじめて、血を見ることの快感を彼は味はつた。

鬪牛で、騎士の乘る馬が牛の角に胸をえぐられ、心臟から文字どほり瀧のやうに血をほとばしらせて、最後に後脚で竿立ちになると、ばつたり倒れて悶死したのを見たことがあつたが、彼は今にも瀕貧血を

起して倒れさうになつた。自分で自分の顏色の靑くなつてゐるのが解つた。

それだのに、その大闘牛場を埋める何萬の觀衆は、口笛を吹いたり、わめいたり、拍手をしたりして熱狂してゐる。砂塵もたたない炎天下に、眞黑の牡牛はますます荒れ狂ふ。また別の馬の腹を突く。血まみれの內臟をぶらさげて、馬は場內を逃げまどふ。觀衆は喝采する。……

三吉は、傍の西班牙駐箚公使の橫顏をそつと窺つて見た。彼もまた會心の微笑で、眼をいきいきと動かしては熱心に見てゐるではないか。三吉はまゐつた。

すつぱい液を氣味惡くのみこみながら、しばらく眼をつぶつてゐると公使に見つけられた。

「どうですね、ははは！」彼はいくらか揶揄的に、しかし決して非紳士的ではなく笑つたものだ。「はじめ二三度は誰しもさうですよ。ぢきに何でもなくなるんでね。しまひには、闘牛士が牛の角にかけられるところでも見ないと、承知出來ないと云ふくらゐになつてしまふもんだが、……」

「そんなことがあるんですか？」

「ありますどころか、現に去年、ここで一度ありましたよ。有名な闘牛士でしたがね。」

「御覽になつたのですか？」

「見ましたとも。」

日にやけた顏に、眼の優しい、白い薄髮の溫厚な伯爵公使は、山高帽子を、わづか搖するくらゐに絕

えず肩を動かし、にこにこしながら三吉に說明した。

ともかくその日の晩餐を、彼は味はふ氣がしなかつた。水を飲んだだけでも、嘔氣を催した。

それが今は、自分の手で流した血に快感を覺えると云ふことになつたのだ。彼はその夜、警察の留置場で油くさい毛布にくるまつて寢ながら考へた。こんな意氣地なしでも、まさにこれが敵だと見れば刺せさうだぞ。人殺は極惡だなんて、ふだんは涼しい顏で道學者ぶつた口をきいてゐたつて、いざとなれば人殺をしかねないぞ。その證據には、現在、敵の唇に流れる血を見て、ますます勇躍したではないか。

闘牛場で馬がやられるのを見て氣をうしなひかけた弱蟲を、つまり自分を、三吉は嗤つてやりたかつた。誰でもいい、何でもいい、强いものが喝采されるに過ぎないのだ。觀衆はただ、敵を殺した强者の心理を得するだけのことだ。牛が馬の心臟を破つたのなら、そこから流れ出る血に牛がどれほど狂喜するか、それを觀衆は味はへばいい。さうしてその牛が、今度は闘牛士の劍に肩口から心臟をさされ、吐血して死に瀕するなら、その時の、敵をたふした闘牛士の勝利を、わが勝利とすればいい。闘牛士の歡喜はただちに觀衆の歡喜だ。若し闘牛士が牛の角にかけられたら？　それこそ人間と云ふ强敵を屠つた勇者として、牛は歡呼されなければならない。……

考へながら、變な、野蠻な結論に到着したものだと三吉は思つた。これこそ血迷つたのではないかと

苦笑したが、どうしても血の誘惑をふりきることは出來なかつた。

洋服の袖にも、ネクタイにも、カラーにも、血痕がやたらについてゐた。洋服は青黑い地で、一見したところ、乾ききつた血痕は眼につかなかつたが、ためしに濡れ手拭で拭いて見たら驚いた。手拭がすぐ眞赤になつた。

「洗面器に水を！」

美代は緣側に洗面器を持つて來た。

「ブラッシュ！」

美代はあたふたブラッシュを持つて來た。何をするのか彼女には解らなかつたが、たゞ何か一大事が起つたに違ひないと云ふやうに、怒りつぽい顏であわてまはつた。

「まあ、あきれた！」

洋服の兩袖を、水に含ませたブラッシュでこすると、水はたちまち赤く染まつた。それを見て美代は侮蔑的に顏をゆがめたものだ。三吉はにやにやしてゐた。

「それ一體、誰の血？　三吉の？　それとも、……」

「おれんぢやないだらうよ。おれの疵は、ほら、これつきりだ。」

彼は上唇をとがらして、そこの僅かなかすり疵を見せた。

「うらめしいわ、ひとの血なんて！」

美代は簞笥に駈けつけて、ワイシャツをとりだした。次には、ソフトカラーにはさまつたままのネクタイを。

「ついてる、ついてる！　ちえつ、ちえつ！」

彼女は誇張的な舌打ちした。

ソフトカラアには、紅と墨を含ませた水筆をぽつと指で一彈きはじいたやうに、血のこまかいしぶきがはねかかつてゐた。ネクタイには、ずつと下の方に二寸四方ぐらゐ、模樣が模樣で、赤や紫や綠の細い更紗模樣だつたので、まぎれて見えはしなかつたが、ひからびた血で薄絹地はかばかばになつてゐた。

「これどうする？」

「うまく洗ふさ。」

「緣起が惡いわ、ひとの血のくつついたもの！　棄てつちやはうか？」

「棄てるにはあたらんよ。そいつはおれの氣にいりなんだ。サマリテーンで買つたんだぜ。」

「サマリテーンだつてどこだつて構やしないわ。こんなものしてくと、またきつと喧嘩することになる

から、……でも、どうしてこんなところ？　チョッキの下になつてるところぢやないの？」
「きつとかうだよ。あいつ苦しまぎれに夢中でおれの胸のあたり引掻きまはしたんだ。その拍子にネクタイがチョッキからはづれたのに違ひない。」
「なんでもいいから、これ棄てつちやいませうね？」
「棄てないつて云つてるぢやないか！　くどい！」
縁側に水をところ構はず跳ね散らしながら、三吉はブラッシュで洋服の袖を荒々しくこすつた。
「ええ、え！」語尾をあげて棄鉢氣味に彼女は云つた。「どうとも勝手になさいだ！　いまに喧嘩して殺されちやつたつて知らないから。」
「殺されたつて構はないさ。誰のからだでもない、おれ一人のからだなんだから。」
それでも晩に一杯やりだすと、三吉は穏かにぐつと折れてゐた。
「實際今になつて考へて見ると、そつとするね。ああ云ふ仲間には命知らずがゐるんだ。横合から短刀でもつき刺されたら、それつきりだぜ。」
「さうよ、それつきりよ、だから、……」
「解つた解つた。」
「今こそ解つた解つたなんて云つたつて、根が氣の荒い人なんだから、いつ何するか解りやしない。美

つちやんの腕や腿だつて、疵だらけぢやないか。どこだつて構はずつねるんだからね。紫色にかたがついて、お風呂へ行つたつてきまりが悪いわ。」
よくやるやうに。三吉は掌につばきをつけ、美代のおでこの前へもつてつた。彼女も別に逃げようとはしないで、眼をぱちぱちして、かへつておでこを三吉の掌の方へ傾けかけて來るところを、彼はぴつしやりぶつてやつた。
「云ふか云はないか？」
「つねるかつねらないか？」
「つねる時にはつねる。」
「ほんとうにつねるだけは、もうよすのよ、お風呂で恥かしいから。つねるだけならなんだけど、蒲團から蹴つとばしたりするんだから。……亂暴者の野蠻人！」
さうなると、三吉は酒をしきりに飲みながら、ただにやにや笑つてゐるきりだつた。
するとまた、美代の癖のいたづら質問がはじまるのだ。
「もう亂暴はよすのよ。」
「うん。」
「時時はやつばりやるんでしよ？」

「うん。」
「どつちなのよ、亂暴よすの？　よさないの？」
「うん。」
「またはじまつた。」
「うん。」
何を言はれても、三吉は「うん」の外には答へなかつた。それを承知で、美代はまたいろんな質問をしかけるのだが、さうやつてやがて他愛もない平和な、時としては退屈な家庭生活の雰圍氣が彼等の上にとりもどされて來るのだ。

それから暫くたつた或夜のこと、そとから歸つて來た三吉は、洋服も着換ずに長火鉢の前にあぐらを組んだ。彼の口元は笑つてはゐたが、顏は變に蒼ざめてゐた。
「また？」美代は直覺したやうだつた。
三吉は首を横に振つた。
「ぢやどうしたのよ？」
「會つたんだ、こなひだの奴に。」

「どこで？」
「プランタンで。」
「この前もプランタンでしよ、行かなけやいいのに、あんなカフエへなんか？」
「そんな解らんことを云ふ！　用があれば何處へだつて行くよ。今夜あそこで友達に會ふ約束がしてあつたんだ。」
「おこりん坊ねえ！……で、どうしたの？」
「はひつて行つたら、おれはもう顏なんか忘れてたんだが、そこに三四人ひとかたまりになつてゐたのが、なかからいきなり一人、ぬつと立つたもんだね、見たらあいつなんだ。咄嗟に、こいつあ！　と思つたよ。おれの名前まで知つてやがつて、外の奴等、『岡野だ、岡野だ！』つて囁きあつてるんだ。ひよいと見ると一人の奴が、まだ十六七くらゐの若いのさ、そいつがふところをもぞもぞさせてると思つたら、テーブルの端つこの方から匕首の先を見せやがつたんだ。どきどきする奴を。」
美代は眉根に苦しさうな皺をよせて、ものも云はずに三吉を見つめてゐた。
「おれの前には、例の口から血を垂らした奴が面と向つて睨んでる。おれは笑つてたよ。どうせやるならやらうつて氣でね。機先を制してやらうかとも思つたんだ。だが、こつちは無手だらう。無手でも仕方がない。相手から眼をそらすわけにいかないから、眼球をぐるぐる廻して思案してるところへ、ちや

うど文壇の連中が四五人どやどやはひつて來たんだ。ほつとしたね。誰しも一眼で樣子の變なことは解る。『やあ。』『やあ。』『どうしたんだ？』『いや、どうもしないよ。』『二階へ行かないか？』『あ、あとで行かう。』てな具合で、それをきつかけにそこの椅子へ腰かけてやつたんだ。さうして奴等と一緒に飲んだのさ。匕首なんかいつのまにかひつこんぢやつたよ。」

「ほんたう？」美代はまだ氣遣はしさうだつた。「どこか斬られるか刺されるかしたんぢやない？」

「馬鹿！　斬られるか刺されるかしたんぢや、こんなに平氣でゐられるもんか！」

「でも、さつきの顏つたらなかつたわ。血の氣のないやうな、眞蒼な顏で、……腕か腿か斬られて、繃帶でもしてあるんぢやない？」

「よせよ、よせよ、緣起でもねえ！」おどけ半分に云つて三吉は元氣よく立ちあがつた。「ぢや裸になつて見せてやらう。ほら、早く脫がしてくんな！」

上着を脫ぎ、チョッキを脫ぐと、美代はいきなりネクタイを掴んだ。

「氣がつかなかつたわ。またこれをしてつたのねえ！　あんなに下の方へかくしといたのに！　このネクタイには恨みがこもつてるのよ。」

それつきり、そのネクタイは三吉の眼に觸れることがなかつた。

しかしネクタイはなくなつても、來るものはいつかやはり來なければならなかつた。

六月初旬のこと、七月から創刊する『不同調』の同人會が神樂坂の或る牛屋で催された時、三吉もセルの着流しかなんかで寬いだなりで日の暮れに出かけて行つた。

はじめて出す雜誌のことで、一座には何となく活氣がみなぎつてゐた。時が進むにつれて、牛鍋のまはりにはビール壜や銚子がつぎつぎに殖え、いろんな抱負や計畫を語るものや、しやべりあひながら寄せ書を書くものや、だんだん賑やかに座はみだれて來た。

ちやうど三吉が、壘にふさつて寄せ書に夢中で鉛筆を走らしてゐる時だつた。廊下の方で何か騷がしい人聲がしたかと思ふか思はないに、障子をあけはなつてある部屋へどやどやとなだれこむなり、ビール壜や銚子のこはれる音、罵聲、怒聲、……三吉は一瞬間あつけにとられて振りかへつた。見ると、兩腕をふりまはして喚いてゐるのは、例によつて紋附羽織の加藤鐵誠だつた。プランタンで三吉と喧嘩をした相手は、その當時保釋中の人間だつたので、喧嘩ときいて駈けつけて來た加藤が巧みに彼を逃がし、自分が身代りになつて三吉と二人警察へひつぱられたのだ。その加藤が何かの因緣をつけて擲りこみをやつたとすれば、きつと他の一味もゐるに違ひない。

かなり三吉は醉つてゐたが、こいつあ只事ではないと思つた。急に考へついたことがあつた。さつき下の帳場へ電話をかけに降りた時、やはり電話をかけに降りて來た二人の若者があつたが、半纏姿だつ

たので三吉はその時氣がつかなかつたのだ。たしかプランタンの時の連中だ。三吉の方を盜み見ながら、二人で何かひそひそ囁きあつてゐたことも思ひ出されて來た。

三吉に對する復讐、さうでないにしても、若しその一座に三吉のゐることが解つたら、……加藤鐵誠の顏を見るやいなや、彼は醉つてゐる頭のなかで咄嗟と云つていいくらゐ僅かの分秒時に、くるくるつといろんな考へが閃めいた。

彼は立ちあがると、荒れ狂つてゐる加藤の前に立ちはだかつた。

「加藤！　貴樣おれ達と喧嘩しないことにあの時約束したぢやないか？」云ひながら、彼は加藤を廊下の方へおして出た。

「約束も糞もあるもんか！　貴樣、岡野の野郎！」

蒼ざめた顏に氣ちがひじみた眼を光らして、三吉にかかつて來ようとした。三吉は手をはなして、加藤の前に頭をさげた。

「おれがあやまる！　おれ一人ならどうでもいいが、……」

ひよいとそこへ、プランタンでやつた時の當の相手が、加藤の肩越に物凄い顏をぬつと出した。細面の彼は、顏を赤くし、血走つた眼で三吉を睨みながらにやつと笑つた。

三吉も笑つた。

「やあ失敬。一體どうしよつてんだ？　おれがあやまると云つても、きかないのかね？」

云つてゐるまに、彼等の一味はどうつとまた部屋へ闖入しさうにした。

「よおし、謝つてもきかないつてんだなあ！　勝手にしろ！　おれに恨があるつてんなら、どうともしてくれ！」

三吉は捨て身になつて、そこへいきなり素肌脫ぎになると胡座をかいた。

「それほど喧嘩がしたいんなら、眞先におれを存分ぶつなり蹴るなりしてから、それから好きなやうにやつてもらはう！」

思ひだすと、あまり芝居じみて彼は氣恥かしいくらゐだつた。そればかりではない。幸ひ巡査が駈けつけたらしく、みなは逃げ支度をはじめたからよかつたやうなものの。さうでもなかつたら三吉はどんなことになつてゐるか解らなかつた。考へただけでも冷汗が流れた。

前の時とおなじに、加藤が警察にひつぱられて行くらしく、梯子段の下から彼の聲で、

「岡野、貴樣來るんだぞ、警察へ！」

と云ふやけ半分な捨臺辭がきこえた。誰が行くもんかと思つたが、口では、

「ああ、行つてやらう！」

と大聲で返事して、彼は肌をいれたものの、素裸になつたりしたのがひどくきまりが悪い思ひで一座

の中へ戻つた。が、そこには知らないまに、きまり悪さなんかふつ飛んでしまふやうな事件が起つてゐた。彼は驚いて、いくらか大袈裟に喚いた。

「どうしたんです、大村さん！　こいつあひどい！　早く繃帶、繃帶！」

大村さんと呼ばれた人は、左の蟀谷にハンケチをあてがつたまま、一平式の漫畫に書けば頼朝公のやうな尻さがりの愛嬌ある髭になる、そんなユモラスな髭を持つた口元に微笑を含みながら、しかしそれとはあべこべに、一流の毒氣ある憤慨を述べてゐた。蟀谷にあてがつた血染のハンケチはしたたるばかりで、手の指の股から絲をひいたやうに幾筋も血は流れ、鼻の頭も顎も、頸筋も、着物の胸も、赤く染まつてゐた。

「……藪から棒に森村君がひどいめに會ふのを見て、僕はいきなりどなりつけてやつたところが、今度は爛德利をもつて僕にむかつて來るなんて、實に不屈きぢやないですか！　こつちが口で云ふのに、先方は暴力で來るとは、實に亂暴きはまる。こんなことが若し許されると云ふんだつたら、僕は大砲を持つて來て誰彼の嫌ひなくぶつぱなしてやつてもいいと思ふ。……」

大砲を持つて來るなんて、たしかに大村流の豪放な表現だと三吉は愉快に思ひながら、ちやうど女中の持つて來た繃帶をせつかちにとるなり、彼の頭をぐるぐる卷きに卷いてやつた。その間も彼は、昂奮と酒とで赤くなつた顏に、いくらか充血した眼をぎらぎらさせてはしやべつてゐた。……

遲く目白の驛に着いた時、プラットホームに降りた三吉は、初夏のわずかばかりな微風にすら身震ひがした。つめたい、ぞつとするやうな氣持で階段をあがり、改札口を出ると、そこにつるされた薄暗い電燈のあかりで彼は自分の兩手を調べて見た。着物の袖や胸前を調べて見た。どこにも血はついてゐなかつた。

彼は數かぎりなくきらめく星を見あげたり、黑い森を眺めたり、眞暗な行手に遠く二つ三つともる燈火に眼をこらしたりしながら、ぶらぶら歩いた。よくも今夜は手だししなかつたものだと、彼は自分で自分に感心した。若し手だししてゐたら、どんなことになつてゐたらう？　おそらく今夜は家にも歸れなかつたに違ひない。ことによると、あいつのために胸に短刀でも刺されて、今頃はもう息の根がとまつてゐたかも知れない。もう一度彼は悪寒を覺えて、ぞつと身震ひした。

家に歸つても、三吉は美代には何の話もしないで、そのまま寢床にもぐりこんだ。

が、翌日の夕刊で、ばけの皮はすつかり剝がされた。

外出先から歸つて來ると、美代は玄關に迎へるなり、すぐに三吉の鼻先へ人差指をさしつけた。

「いくら匿したつて駄目ですよつと。夕刊にちやんと出てますから。」

「云ふとまた、なんだかんだで面倒くさいから默つてたんだ。」

三吉はにやにやしながら、あがつて四つの夕刊を讀みくらべた。

「ふん、どれもこれも、本當のことを書いてるのが無いや。」
「大村さんそんなにひどく怪我なさつて？」美代は眉根をしかめた。
「大分縫ふには縫つたさ。だが平氣だよ。牛込へ行つたつひでに見舞ひに寄つたらね、寢ては居たが元氣さ。」
「大村さんだけなの？　外は誰も？」
「森村君が口のあたりを少しやられたきりだ。」
「あんたは？」
「見れや解るぢやないか？　ゆうべは僕あやまり役だつたんだ。」
と云つて笑つたが、彼の氣持は變に寂しかつた。ゆうべは喧嘩に手だししないでよかつたと、自分で自分に感謝しながら、今日になるとなぜゆうべもつともつと大きな修羅場を演じなかつたのかと、かへつて自分が卑怯者のやうに恥かしくさへ思はれて來た。

夏よりも秋、秋よりも冬になるともつとひどく、毎朝三吉の咽喉からは血が出た。
或夜のこと。
博多そだちの美代が寒くなるとよくやつてくれる水たきで暖まりながら、例のとほり三吉は五本も六

本も銚子をかへさせて機嫌よく飲んでゐると、不意に美代の非難の眼が長火鉢越しに彼に据ゑられた。
「ああ解つた！　あんまり毎晩お酒飲むからよ。だから咽喉から血が出るんだ。あたしまた齒をみがく時に齒莖から出るんだとばかり思つてたのに。」
「おれがか？」ぎつくりしたが、三吉はとぼけ顏をして見せた。
「おれがかもないもんだ、しらばつくれやさん！　せん頃壞血病とかだつて、野菜が少いのなんのつてぶつぶつ云つてたから、をかしいなあ、うちなんか馬の食ふほど野菜を食べるのに、ともつて不思議がつてたら、齒莖ぢやない、咽喉なんだ！　咽喉から血が出るんだ、いやんなちやう！　今に死んじやうよ、三吉！　お酒どうしてもよせないの？」
「よせつてばよすがね、よしたらそれこそ死んだも同然だらうよ。なんにもせずに、ぶらつかぶらつかして、だが一體、いつのまに氣がついたんだ、咽喉から血が出るなんて？　うがひする時、あんなにめつからないやうに苦心して隱してるんだがなあ。」
「ちらつと見たんだよ、こなひだの朝。でもその時は、例の齒莖からだらうともつて、氣にもかけなかつたの。だがね、それにしても血の量が多いとは思つたんだが、ひよいと今思ひだして、てつきりこいつは咽喉から出るのに違ひない、……」
「畜生、かまかけやがつたなあ！　ぬけぬけと一杯してやられたわい。だが構ふもんかい、血を吐くぐ

らゐ！」彼はぴつしやりと平手で自分の額をぶつた。「かう云ふ文句つくつたんだ。『昨日の朝も咽喉から血が出た。今朝も出た、明日の朝も出るだらう、』つて。そいつをいつかの晩、醉つたまぎれにうたつてたら聞きとがめられたのさ美つちやんに。早速ごまかしてやつたつけ。『昨日の朝も太陽が出た、今朝も出た、明日の朝も出るだらう』つて。もつともらしい註釋までつけて、まんまと首尾よく騙してやつたなあ！」

三吉はがらがら笑つて、美代が唇をとがらし、眼をくるくるまはして膨れてゐるのを却つて面白さうに眺めながら喋りつづけた。

「もつと若い時には、まだまだこんなもんぢやなかつたんだぜ。酒ぢやない、燒酎なんだからね、朝起きて井戸端へ出てかあつとやると、口の中が一杯の血さ。」

「燒酎なんか飲んだの？」

「毎晩五合くらゐ、死んだ兄貴とふたりで。學生時代さ。おれが雜司ヶ谷の方に間借して自炊してゐた頃なんだ。そこへ兄貴が轉げこんで來たんだ。酒なんか買ふ金ありやしない。だもんだから毎晩安い燒酎で間にあはせたんだ。五合、時によると七合八合。」

「だからお兄さん死んぢやつたのよ。」

輕蔑的にさう言はれると、三吉はちよつと腹も立つたがそのとほりなんだから仕方がなかつた。酒で

死んだ兄貴の話になると、彼はいつもにやにや笑つて感情をごまかすのが癖だつた。

どうせ兄貴のやうに、酒を飲んで一晩のうちに死ぬか、それとも喧嘩でもして刺し殺されるか、さうきまつてゐるんだつたら、……無論こんなことを云ふのは、美代の茶目半分な冗談ではあるが……

「四年の五年のと先へ行つてからだと、こつちが迷惑する。お婆さんになつちやお嫁の貰ひ手もないからね、だからさつさと今のうちに、死ぬものなら死んでくれよ。」

持前の無遠慮さで、づけづけと、しかし笑ひ笑ひ甲高聲で美代は時時云ふのだが、その場は三吉も笑ひに紛らしてはゐるものの、心の底には、いつも笑ひきれない濁つた苦い滓が殘つてゐた。

兄が頓死してまる三年、さすがの三吉も妙な宗教的な、また自重的な發心で、きつぱりと斷酒したものだ。酒を飲む機會の多い雜誌記者生活と云ふ環境のなかにあつて、絶えず酒飲友達にとりかこまれてゐた彼としては、斷酒がどんなに苦しいものかと心中不安に思つてゐたのに、いざやつて見ると、どんなに賑やかな宴會であらう、と或はまた、どんなに色つぽい、所謂淺酌低唱の料理屋待合であらうと、彼は平野水一點張りで少しの苦痛も感じなかつた。

一つは心の張りもあつたのに違ひない。その當座は、ふとしたことからでも兄貴の死顔が眼に見えてしようがなかつた。

血吻空醒千里草。今ならば、この句の血吻にもおのづからつながる聯想だ。急の知らせで本郷追分の家に行くと兄は死骸になつて奥の部屋に仰向けに寢てゐた。顏の布をとつて見れば、紫色に變つた唇の隅に、まだ拭ききれない黝んだ血が、ゆうべの無殘な死にざまを雄辯に物語つてゐた。

新宿の知人の家へ夜遲く寄つたら、主人はちやうどそこへ來合してゐた、やはり兄貴とも知り合の人と飲んでゐた。その座に加はつて、いざ飲まうとすると、兄は坐つたなりに、すうつとうしろへ寢たふれて、ながくなつてしまつた。

「岡野君、岡野君、何冗談するんだ、君、君！」

いくら呼んでもそれきりだ。なんでも、どこかで飲んだ揚句に、例の蠻勇で往來を無暗と駈けつづけて來たものらしい。……陸にあがつた魚の眼のやうに、赤く濁つた涙の眼で嫂の話をききながら、三吉は「兄貴の馬鹿！　兄貴の馬鹿！」と心で何度云つてゐたか知れなかつた。顏の色こそ壁色にはなつてゐても、頰の肉もこけてゐるではなし、鼻もちやんと高く、口は微にあいて、さうして頑强な胸をたかく張つて寢てゐる姿を見てゐると、死なんてもいいのに死んだ兄貴を、馬鹿と呼ぶより外の呼び方を發見することは出來なかつた。

現に終焉の場にゐあはしたものさへ、冗談としか思へなかつた程ではないか。そんな死にざまは、誰が考へたつて賢い人間の死にざまと思はれる筈はない。馬鹿だ。が馬鹿なら馬鹿なりに、さうなるまで

の兄貴の心的の經過は三吉に解る氣がした。

一旦どつちかに傾きかけると、もとに起きなほらうなどとはしないで、ますますその方へ傾きつづけて、つひには行き着く處まで行き着かずにゐられないと云ふ氣性は、岡野家の一つの通有性だ。父が產を傾けたのも、その性の現れと見ていいし、兄が放浪生活をつづけて最後に不慮の死を招いたのも、それとおなじ性の現れと見てよかつた。その通有性を、極く短い期間に凝縮して、もつとも具體的に表現するものは酒である。ふだんは兎も角穩かに沈潛してゐて、さも何事もなささうに見えてはゐても、底に隱された荒い氣性は、酒の煽ふりに會ふと忽ち一氣に、奔放に、我武者羅に荒れ狂ふのだ。

殊にそれをたすけて、一種絕望感のともなふ暗闇におとしこむものは、三吉や三吉の兄の成年時代に彼等をやしなつたニヒリスチックなデカダン思想だつた。それが、力の過剩に惱む彼等をして、最後には無目的の破壞思想にまで追ひやらしめた。兄貴の頽廢的な放浪生活も、それの一分派に過ぎなかつたのだ。

三河屋あたりで飲んで、よく四谷見附から新宿の方へ夜遲くぶらぶら歩くことがあつたが、そんな時三吉は、七年前に死んだ兄を思ひ出すことがあつた。

あの晩兄がどこで飲んで、さうしてどの邊からどの邊まで駈けつづけたものか、また電車と競爭でもしたのか、それとも人生が癪にさはつてただ反抗的に狂奔したのか、誰も知るものはなかつたが、さう

やつて夜更けの路上で兄貴を思ひだす毎に、三吉はきまつてゴーリキイの小説『三人』の主人公とも云ふべきイリアの最後の場面を思ひ起すのが癖になつてゐた。

雜司ヶ谷で兄弟が自炊生活をしてゐた時代、讀むものと云つては殆ど露西亞の文學だつた。殊に三吉は、彼の好みでゴーリキイの小說を耽讀してゐたので、自然彼の兄もゴーリキイの作品に親しむやうになつた。ヴォルガ河の乞食のやうな曳船人足、麵麭を盜む淫賣婦、工場のストライキの先頭に赤旗を振つて行く青年、それを見送り屬ます老母の涙、革命の陰謀に參加する白い手の大學生、急ごしらへの防壘にはぢける小銃彈の叫び、……そんなものが、燒酎の醉ひで昂奮した彼等の間に、いつも聲荒くとりかはされる愉快な、また痛切な話題だつた。

「おれは露西亞へ行く！」

何度三吉の兄は、拳固を振つてさう云つたか知れない。

「おれだつて行くよ、おれだつた！」

三吉自身にしてもさうだつた。

だが、彼等は露西亞へ行つて何をしようと云ふのか？　無論何も考へてゐたのではなかつた。ただ何となく、露西亞を口にすると云ふことが、眞理を口にするとおなじやうな、眞劍な、純粹なものに思はれてゐた。露西亞と眞理は同意語だつた。

「行ければ露西亞まで行くつもりだ。そのつもりで、兎に角朝鮮へ渡るから。」

二人で自炊生活をして三ヶ月もたつたか、兄は三吉に決心を語つたものだ。眞夏だつた。隣りへでも行くやうに、浴衣がけで荷物は何一つなく、泣き黑子のある眼尻に皺をよせて兄はにこにこと、弟は小倉の袴に角帽で、或る悲愴感に緊張しながら東京驛のプラットフォームで手を握りあつた。

京城で土方をやつたり、肉屋の御用聞きをやつたり、新聞記者をやつたり、さうして露西亞へ行くどころか、また日本に舞ひ戻ることになり、歸途釜山で土方相手に喧嘩をして額を石で割られ、……象潟署からの呼びだしで、北風のびゆうびゆう寒い十二月の或日、日暮に三吉は警察に行つて兄に會つたのだが、その時の印象は、生前の兄が殘した最も親しみ深い、ユモラスな、强い印象だつた。

東京に歸り着くとすぐ、十年も船に乘りつづけて歡樂に饑えきつた人のやうに、彼は東京驛からまつすぐに淺草へ行つた。そこで彼は財布の底まで飲つみくし、夜の六區をさまよつてゐるうちにお齒ぐろ溝に落ちこんだ。

はじめての經驗で腋の下から冷たい汗を流しながら、三吉は警官に導かれて廊下づたひに留置場の方へ行つた。變な臭氣が鼻をついて、同時に沼に湧くあぶくのやうな呟き聲や囁き聲がするので、横を見ると、格子のはまつた暗い一室に女の顏が七八つも白くうようよと浮いてゐた。みなの視線が、一樣に三吉の方へそそがれ、冷笑でもされてゐるやうで向きかへると、そこへ、警官に呼びだされた兄が別の

部屋から出て來て、三吉にぴよこんとお辭儀をした。

油じみた茶色の毛布に頸をうづめ、客待ちの車夫のやうにしつかり內側からひつぱつてはゐたものの、それも素肌で下から脛は二本によつきり出てゐるし、足も素足だつた。それでにこにこ弟懷かしさうな人のいい笑顏で、ぴよこんとお辭儀されたのには、三吉も思はず好意の笑ひを誘はれた。

三吉が用意して行つた着物に着換へ、新しい下駄で警察を出ると、兄はそれでも、ふとい溜息を空にむかつて吐いた。

客のゐない小さな蕎麥屋を選んで二人はあがつた。電燈の光の下に相對すると、何より先三吉は兄の額に、まだ絲も拔かれてゐない一寸ぐらゐの疵痕を發見した。

なんだかまだ親しめない氣持で、三吉は疵痕を見つけても默つてゐた。兄の方でも、三吉に氣づかれてゐることを知つてゐながら、わざとそれに觸れずにゐるやうに見うけられた。

銚子が出て、一二杯やると、彼はやうやく話をきりはじめた。

「釜山で土方と喧嘩やつたんだ。」云ひながら、彼は三分ばかり殘つてゐる絲の端をつまんで、ひつぱつて見せた。三吉は妙に自分の額が痛く感じられて、眼をしかめた。

釜山で船に乘りこむ前ふとして、以前京城で仲間だつた綽名を『ちび久』と云ふ土方に出つくわした。『ちび久』は寒空にぼろぼろの半纏一つで、だしがらの昆布かなにか嚙じつてゐたところだつたが、そこ

で三吉の兄は一船のばして、彼に酒を振舞ふことにした。すると集まつて來るは來るは、折柄の霙にあぶれた、と云ふよりはもともと乞食同樣の土方連中が七八人よつて來て、たうとう夜の夜なかまで居酒屋に神輿を据ゑることになつた。するうち兄貴は、例によつてだんだん本性を現はして來た。

好物のてんぷら蕎麥をさかなに、二本三本と銚子をからにして行くと、三吉の兄は元氣になつて當時の有樣を、仕方話で三吉に話して聞かした。

「貴樣たちはみんな無用の人間なんだ！　さつさと婆婆から姿を消しちやつたがよからうぜ！」

土方連に兄貴はそんな毒口を吐いたが、振舞酒の手前もあつたらうし、また、何と言はれても怒らないだけの寬容な心を持つてでもゐたのか、誰も口答へ一つしないで、むしろそれを肯定するかのやうに、或は單に笑殺するかのやうに、にやにやして盃を重ねるばかりだつたのに、ただ一人『ちび久』だけは、ちびの癖に大威張りで云ひかへした。

「おれ達が無用の人間てこたあ極りきつてらあ。だがおめえだつておんなじだらうが！　やつぱり無用の人間ぢやあねえか？」

兄貴が土方連を無用な人間呼ばりした半面には、明かに彼自身もそのなかに含められてゐることを承認してゐたのだ。だから『ちび久』にさう言はれると、兄貴はそれこそ我が意を得たもののやうに喜び

一層自分自身を無用な人間視することに感激した。

「さうとも、おれだつてやはり無用な人間さ！　だからおつつけ婆婆にお暇乞しようと思つてるんだ。」

そこで『ちび久』は、

「それぢやおれが暇乞させてやらう。」

「うん、させて貰はう。」

「表へ出な！」

「出よう。」

と云ふことになつて、兄貴は『ちび久』にひかれて戸外に出た。いきなり道路に投げ倒された。さうして上にのしかかつた『ちび久』が頭に振りあげた右手に、かなりの切石が握られてゐた。

「亂暴な奴でね、その『ちび久』つてえ奴、……」三吉の兄は、盃を舐めて下におくと、例の泣き黑子のある眼尻に皺をよせて微笑した。「その切石でおれの眉間を、ひとおもひに割つて引導わたすつてんだからね。」

三吉はぞくぞくと寒氣がした。唾液をのみこんで、默つて兄の眼を凝視してゐた。

「いい按配に、外の連中が出てくれたんだ。まさにつてえところで、『ちび久』がみんなに抱きとめられたんだが、とめられた拍子に、石があいつの手から落ちて、……うまい具合にここへさ、……」

兄は額の疵痕を、人差指で何度も叩いた。

「うまい具合どころですか！」三吉はちよつと腹が立つた「ちつとも抵抗しなかつたんですかその『ちび久』つてえ奴に？」

「しなかつたさ。おれは今殺されるんだなあと、はつきり頭のなかで考へてゐたよ。別に苦しくもなんともなかつた。……さうさう、ゆうべだつてさうだつた。もう一分、ひきあげられるのが遲かつたら、おれ死んでゐたんだぜ、溝にはまつて。」

「いやんなつちやうなあ！　なんだつてまた、おはぐろ溝へなんか落ちこんだの？」

「走りたくなつて、あの邊はしつたんだ。道路だか溝だか解りやしないさ。はつと思つたよ、それでも、溝にはまつたなんてえ感じぢやなかつたね。高い崖の上から谷へ飛びこんだ、それもね、急にすうつと落ちるんぢやないんだ、雲にでも乘つてゆつくり落ちるつてえ感じさ。別に惡い感じぢやないんだからをかしなもんだねえ！」

「をかしなもんだもないや！　少し氣をつけなくつちやあ、……」

腹立ちまぎれに吐るやうな語調で云ふには云つても、ふと氣がつくと、三吉は今度は今更もう兄には何を云つても仕方がないと思つて、兄のことは兄に委せると云ふ諦めを持つやうになつた。

銀座の方の通信社に勤めたり、京橋際の河添の或夕刊新聞社に變つたり、さうしておなじ新聞社の婦人記者と本郷追分に同棲し、男の子が生れ、……やがて、或晩、飲酒のあとで四谷見附から新宿までの間のどこかを駈けとほし、……これについては、當人の外誰も正確なことを知る筈はないのであるが、三吉はひとりでさうきめてゐた。夜更けて四谷から新宿の方へ歩く機會のある毎に、彼におなじその道を、一張羅の詰襟黒服姿でまつすぐに疾走する兄を思ひ描いて見た。

兄は決して、ゴーリキーによつて『三人』に表現されたイリアのやうな強い性格の持主ではなかつた。寧ろ無氣力な、消極的な、強い意味ではない虚無的な性格を持つてゐた。それがアルコールの昂奮に驅られると、一種の情慾に燃えたつて、常には觸れ得られない人生の尖つた部面に端的に接觸することが多かつた。兄が絶望感に囚はれるのは、さう云ふ時である。

イリアがやはり或種の絶望感でまつしぐらに坂を駈けおり、その力で前面に立塞がる石壁に自分で自分の五體を投げつけ、滅茶滅茶になつて死んだと書かれてある『三人』の最後の場面と、三吉の兄の最後の場面とを結びつけなければならない理由を、三吉はちつとも認めはしなかつたし、また強てその二つを結びつける場合は、多少ともに兄の死に何か意味深いものを附與しようとする感傷主義の潜在を承認することにならなければならなかつた。だから、ただの聯想に過ぎないと云つた方が、三吉の氣持に最もふさはしいのだ。

それとおなじやうに、酒を飲んで咽喉から吐く血と、喧嘩で流す血と、死骸の唇にのこる血と、その他いろいろの場合の血に、何かしら因縁が絡みついてゐるやうに意味を強ひてつける理由も必要もないが、ともすれば三吉の暗鬱な思想に、この血と云ふものが一つの畸形な觀念を注入し、一脈の荒んだ感情を同時に與へることは否めなかつた。でなかつたら、彼の生活を健全にまもるために、殊更理性の力を借りて、とかく荒頽的にかたむきがちな心の動きに手綱をひきしめようと努力するいはれもない筈である。

彼が『喧嘩三昧』と云ふ小説を書いたのも、一つは荒頽生活を卒業したいためだつた。成程一時は彼の『病』も小康を得た。その『喧嘩三昧』に『森』と云ふ名で書かれてあるのは、三吉の喧嘩相手の洋畫家だが三吉より三年おくれて巴里からこの春歸朝したのに、機會がなくて會はずにゐたところ、多になりかけの頃、三吉が二三人づれで銀座のカフェタイガアの二階にあがつて行くと、そこのボーイ相手に喧嘩だか喧嘩の仲裁だかしてゐたのが『森』だつた。

これはこれはと三吉は思つた。『森』もぢき三吉を見つけた。彼は例のとほり少し猫背の恰好で、蒼ざめた顔に黒瞳がちの鋭い眼を上睨み加減でやつて來た。

向きあつた二人には、自然友情の微笑がかはされた。巴里の里昂停車場で握手して別れて以來足掛四年ぶりで、手を握りあつたのだが、その再會の場面が、喧嘩なんだ。

「またやつてるのか！」

「うん、なあに、ちよつぴりよ。これから警察へ行くんだ。」

巡査が一人、劍の鞘を握つていくらか昂奮しながら、ブースの前の人込みをかきわけてゐた。

「警察はちよつとで濟むんだ。それからライオンへ行くんだ。待つてるから來いよ！」

『森』は云ひすてて、がたがた大勢と階段を降りて行つた。

三吉はなんだか肌寒い氣がした。いくらカクテールを飲んでも、更に醉はなかつた。室の一隅では、その日早慶戰に負けた慶應方の學生が六七人一團になつて、やけ酒みたいなものを飲んで、誰かしらに機會があつたらば口論でもしかけやうとするやうに、しきりにモーションをかけてゐたが、三吉は肚では小憎らしい邪魔者とは思ひながら、早くそこをひきあげるためのきつかけを窺つてゐた。彼は非常に弱く、消極的になつてゐた。が、却つてこんな醒めた、理智的な時に、酒に醉つた『森』と會ふことは危險率の多いことを彼は知つてゐた。

彼は『森』に會ひたく思ひつつ、たうとうライオンには寄らなかつた。

それだのにそのライオンで、數日後の夜、客で一杯になつてゐるなかに三吉はすつくり立ちあがつて、酒田と云ふ男を面罵してゐた。酒田も唇をとがらして、面罵しかへした。

「酒田だが酒樽だか知らねえが、兎に角氣にいらねえ！」

「おなじこつた！　おれだつてお前が氣にいらねえんだ。」

「昨日ブラトン社で、おれの面あ見ながら挨拶もしなかつたらう！」

「お前だつて挨拶しなかつたぢやねえか！」

「『不同調』の同人に碌な奴あ一疋もゐねえつて笑つたさうだな、貴樣！　碌な奴が一疋もゐるかゐねえか、見せてやらう？」

そこはスタンドの前だつた。云ひ終るか終らぬうちに、彼は拳固を振りあげたが、そばにゐた長谷川につかまつた。長谷川は三吉の親友でもあり、酒田の知人でもあつた。

「氣にいらねえ同士だ、綺麗にやつた方がいいぢやあないか！　構はずにやらせろよ！」

それでも長谷川になだめられて、兎に角テーブルについた。銀座界隈に顏の賣れてゐる酒田に聲援するものもあれば、顏が賣れてゐるだけ却つて反感から三吉の方に聲援するものもあつた。いづれにせよ、そんな野次馬をいまいましく思ふ三吉は、誰彼の差別なく睨みまはしてやつた。

「まあ仲なほりだ、いつぺえ飲めよ。」

さう云ふ場合、わざと潮來訛でとりなす長谷川の意中を察すると、三吉もいつまでも頑固をとほすことも出來なかつた。

「それ、なんとか云つたぜ、ア・ヴォートル・サンテか、……獨逸語ならプロージット、語學者は違つたも

んだらう。さあ、威勢よくかちつとやれよ！」

滿たされたビールのコップをそれぞれとりあげ、まさにかちあはせようとすると、三吉は二三寸手前で手をとめたものだ。

「どうも、おれにや氣にいらねえ！」と云つて彼は酒田を睨めつけた。

「おれだつて氣にいらねえ！」

酒田も負けずに睨みかへした。

十二時すぎの夜道を、長崎町へ自動車で歸る途中、三吉はおそろしく絶望的になつてゐた。若し自動車と云ふものがなかつたら、あつても乘ることが出來なかつたら、死んだ兄貴のやうに夜の往來を何處までも何處までも、心臟が破裂するまで駈けつづけるのではないかと思はれた。

おれも氣にいらねえ、お前も氣にいらねえ！　氣にいらねえ同士なら潔くやるがいい。が、ぶつかつて見たら、案外たがひに融和するものかも知れない。融和し得ないとしても、たがひに旗幟鮮明なのは嬉しいではないか。……かう考へて、彼は多少の明るさを感じたが、それにしても彼の持前らしい暗鬱な絶望感はなかなか消えなかつた。

家に着いたのは午前の二時頃だつた。

洋服のまま彼は、火の消えた長火鉢のそばにどつかり胡座をかいた。

「またやつて來た！」

搔卷を着て寒さうに立つてゐる美代に、彼は握拳を振つて見せた。

「勝つたの負けたの？」

彼女の氣性で、わざと心配さうな顏もしないで、笑ひながら問ひかけた。

「いや、やるところまで行かなかつたんだ。」

「なあんだ、つまんない！　うんとやつて來るとよかつたのに！」

「何云つてる！　おれが夜遲くなると、いつだつて喧嘩しやしないかと心配してるくせに。だがね、本當を云へば、おれは決して喧嘩なんかしたくないんだ。おれが本當にぶつかつて行きたいものは、どつか別のところにあるんだよ。ところがおれは弱蟲の意氣地なしなもんで、そいつに思ひきつてぶつかつて行けないんだ。それでくだらない喧嘩しちや、どうやら肚の蟲ををさめてるつてわけさ。解つたらうおれの氣持は？」

「解つた解つた。さあ、早くおやすみ！」

「ああ、寢ようか。」

立ちあがらうとする拍子に、何か三吉の咽喉にうづきあげて來た。無論解つた。

「紙！」

美代の手から紙をとるのももどかしく、こらへてゐたのをかつと出すと、赤黑い塊と一緒に鮮血が吐き出された。するとまた、鼻からぽたりと生暖かいのが紙に落ちて來た。つづけざまに三滴も四滴も。

「洗面器！」

云ひながら彼はあふむいた。かつと吐いた時に涙が出たので、彼の眼に電燈はきらきらと萬花鏡のやうに輝いた。臺所で喞筒をせはしく動かしてゐる音をききながら、彼は美代の心情などを想像してちよつとたまらなくなつた。

「昨日の朝も咽喉から血が出た、今朝も出た、明日の朝も出るだらう！　それきりの話ぢやないか！」

口癖の文句を心で云つてゐるうちに、白蠟で刻んだやうな血の氣のうせた固い彼自身の像が、三吉の暗い腦裡に自然と描きだされて來た。

三月變

一生のうちにたつた一遍、三吉は雨の降る往來を母をおぶつて歩いた經驗のあるのを、その母の死後時時思ひだしては、まざまざと生ける母の姿を、まのあたりに見る思ひすることがあつた。

母、三吉、四郎、五作、それに先年死んだ長兄の遺子で、來年あたり中學へはひらうと云ふ年頃の宏と、この五人が、小樽で死んだ三吉達の父の葬式を濟まし、初七日もをはつたところで、遺骨を携へ歸京したのであつた。

上野へ着けば、どしやぶりの雨だつた。十二月の上旬、日の暮も早く、雨脚が廣場のぬかるみに光つて、一層寒い思ひがした。

母は一晝夜半の長旅に、すつかり疲れきつてゐた。さうでなくてさへ、つれあひの死によつて、ひどく落膽し、あとの始末やなんか、みんな人手に委せきりで、自分では何一つ出來ないやうな狀態のところへ、汽車でも汽船でも、すべて乘物には弱い人で、寢臺車に寢てゐてさへ、僅かばかり食べたものをもどすと云ふ按配。ほとんど絶食にひとしい有樣で、上野の驛に降りた時には、よろよろして、出迎ひ

の者に手をひかれ、やうやう驛の表口まで出たくらゐであつた。

出迎ひには、母の弟、つまり三吉達には叔父にあたる人と、三吉の家内の文子と、ほかに、雜司ヶ谷の家に親しく出入りしてゐる大橋さんと云ふ女の人と、それだけ來てゐてくれた。

母が、血の氣のない、むくんだやうな青い顏をして、そのうへ、急に雷でもかかつたやうなぼんやりした眼をうろうろさせながら、足元も危なげに汽車から降りるのを見ては、迎へへの人もさすがに、くやみの言葉、勵ましの言葉、……何一つ口には出せないで、ただ頭をさげ挨拶するだけであつた。

「榮子はどうしたらう？」

荷物の揃ふのを待つたり、タキシーの準備に氣を配つたりしてゐる三吉に、母が不意に問ひかけるのであつた。トランクに腰をかけさせておいたのに、母は立ちあがつて、どうして榮子が迎へに來てゐないのかと、あたりをうろうろ眺めまはすやうにした。

榮子と云ふのは、三吉兄弟の一番上の姉のことだつた。母とは十五か十六しか年の違はない、まるで姉妹のやうなもので、普段何かと云へば意見が衝突したり、一つ家にゐてもあまり互にたよりあふやうなことのない間柄であつた。それだのに、父が死んでしまつた今、もう四十六にもなるその未婚の娘が、母にとつて實感的に如何に懷しまれ親しまるべき存在となつてゐるか、三吉にも理解されて、かうまでも弱弱しい心になつた母を悲しくさへ思つた。

「姉はどうしてゐます？」

四郎に手傳つて荷物の世話を燒いてゐる大橋さんに、三吉は近よりながら問ひかけた。

「風をひいて昨日まで寢てらしつたわ。でも熱はさうないんですつて。」

そのとほり母に報告すると、いくらか氣が晴れたらしく、またトランクに腰をおろして、寒いのであらう、道行の袖を前にきつちり合せて眼をつぶつた。

目白の四ツ家町にタキシーを乘りつけた頃は、雨も小降になつてゐたが、その表通から小路に折れて雜司ヶ谷の家へ行くまで、小半町はあつた。母のために足駄と傘をとりに誰かが行かうとするのを、三吉はいいからと、外套に着ぶくれた背を自動車の降口にむけて、母に、おぶさるやうにと促した。

四郎は小樽からずつと、父の遺骨を持つ役目をあてがはれてゐた。その四郎がバスケットを持つて大胯にとつとと行くあとから、三吉は案外母の重いのに感傷的な心強さを感じながら、遲れがちについて行つた。

「三吉、大丈夫かえ？」

まさか母も、この子におぶさるやうな機會があらうとは、思ひもしなかつたのであらう、氣遣ふやうに云ふその聲にも、どこか嬉しさうな張の籠つてゐるのが三吉にも解つた。

「大丈夫とも。だが、割に重いんだね。」

「さうかねえ。もう骨と皮ばかりだが。」
「これからせいぜい、肉をつけるやうにするんだな。」
「これからかえ？」
さう云つた母の聲音には、何かしら絶望的な感じが裏づけられてゐるやうに、三吉には思はれた。そのまま母は息を深くひくと、あとはぢつと默して、ぐつたり三吉の肩に全身の重みをゆだねるやうにした。うしろへまはした三吉の腕は、だんだんだるくなつて、門の前の石段を二段あがる時には、足も重く、うつかりすると、母をおぶつたまま、あふのけに倒れさうな氣がした。
やつと式臺に母をおろして、そこへ出迎ひに出た姉の榮子と顏を見あはせると、三吉は額の汗を手の甲で拭つて、ほつとした。
母は座敷の瀨戸火鉢のそばへ坐つたきり、他の人達が床の間に遺骨をかざり、燈明をあげ、燒香をしたりするのを、うつろな眼でぢつと見てゐるきりであつた。
「お母さんもお燒香なさい。」
榮子が立つて來て云ふと、母は、今まで夢でも見てゐた人のやうに、急にびつくりして娘の顏を見あげた。
「何え？」

さう云つて、左の方の耳を相手にぐつとさしのべた。
「耳がとても遠くなつたんだよ、」と、四郎は姉に說明しながら寄つて來た。
「お母さん、お燒香するんだとさ。」
榮子の倍ほどの聲で四郎が母の耳元で云つた。
「お燒香かえ。お燒香なら、もう澤山だよ。何十遍となくして來たんだから、あとはお前達でしな。」
何をするのも物憂いと云ふやうに、母は靑い顏を不快さうにしかめながら、火鉢の緣に伏さつてしまつた。
その頃三吉は橫濱の弘明寺に文子と二人、わざと世にかくれるやうな生活を營んでゐた。
父が病氣で寢てゐることを小樽の方から知らせてよこしたのは、十月の半頃であつた。父の兄、つまり三吉には伯父にあたる人は小樽のかなりな大地主であつたが、その死後、當主である養嗣子が、世界大戰中船に手をだし、結局三四十萬の損失を招いたのであつた。その負債の整理をするために、親戚が集つて合資會社を組織し、三吉の父は勞務出資者として、同家の債務整理の衝にあたるため、六七年前妻子を東京にのこし、單身小樽に赴いたのであつた。その後、死亡當時に至るまで、推されてその會社の代表社員となり、亡兄の遺產整理と同時に利殖の法を、ほとんど寢食を忘れて講じたのであつた。

三吉達にして見れば、父のやつてゐる仕事なんか、馬鹿馬鹿しいものに思はれて仕方がなかつた。他人の家の財産整理に寢食を忘れたり、手當と云へばいくらでもなし、その上いつも憎まれ役にまはつて、陰では糞爺とか何とか惡口を云はれたんでは、たまるものではなかつた。ただ父の意を忖度するなら、父にとつては兄の家である。その兄の家を傾けたくない一念から、ああして憎まれたり惡口云はれたりしながら、それに頓着なく、ひたむきに務めてゐる心を思へば、無下に馬鹿馬鹿しい仕事をやつてゐるとも云へないのであつた。

それに、父からの月月の仕送で、母と五作と宏と、この三人は雜司ヶ谷の家で生計をたて、五作は明治學院に、宏は近くの小學校に通つてゐるのであつた。それをいい事にして、三吉は、心では父のやつてゐる仕事を馬鹿馬鹿しいと思ひながら、自分の損にはならないので、敢て歸京を促すやうなこともなく、のんべんだらりと過して來たのであつた。

一朝父が死んだとなれば、覿面に一家の負擔は、ことごとく三吉の肩におしかぶさつて來るより外はなかつた。

四郎は不運な子であつた。ちやうど上の學校へでも行かうと云ふ年頃に、一家は沒落したのであつた。母方の叔父が深川で、當時かなり盛大に釘工場をやつてゐるところへ、職工見習ひにはひつたのも、さう云ふ事情からであつた。

一番の姉は二十歳の頃、當時創設されて間もない女子最高學府に學ぶことは出來たし、三吉は中學卒業後、東京で獨力洋畫の修業をしようとして失敗し、小樽に戻つて仕方なし稅務吏になつたり、それから兵隊に行つたり、普通よりは五年も遲れたとは云へ、姉のおかげや、また少しばかり苦學めいた事をして、とにかく早稻田の文科を卒業することが出來た。三吉のすぐ弟の四郎を飛び越して、その次の弟の五作はと云へば、これも幼年時代一家沒落の悲運に會し、母と二人、樺太の海馬島まで、昔召使だつたものが漁場をやつてゐる、そこへ落人のやうにして賴つて行つたこともあつたが、どうやら父の方も芽をふきだし、おかげで明治學院の普通部を終へ今では、高等部へ通つてゐるのであつた。

それにひきかへ、小學校きりで終つたのは四郎だけである。碌碌たる職工で、弟にさへ馬鹿にされ、日給と云へば二圓五十錢か七十錢、震災後大島町で昔の盛な俤もなく、貧乏くさくやつと機械を五六臺動かすに過ぎない叔父の釘工場に勤めながら、すまひは蒲田の裏長屋で、女房と女の子二人、ほそぼそ暮してゐるのであつた。

小樽の東端、築港附近にある崖地を宅地にして增收をはからうと、三吉の父は夏頃からその埋立工事に、遠いところを毎日現場監督にかよつたものであるが、秋になつて或る雨の降る日、若い時から烈しい負けず嫌ひの氣性で、寒さにもめげず、日暮れてまでも働いてゐるうち、ふと風をひいたのがもとで寢ついたのであつた。父病氣の報をうけ、三吉はとりあへず四郎を連れて小樽へ行つて見ると、父は思

つたよりも元氣で、奥の一間に、厚い夜具に顎をうづめ、汗をとつてゐた。

「なあに、汗さへ出してしまへば、けろりと癒るんですよ。」

父はむしろ怒つてゐるやうに、他人行儀な言葉つきで云つた。そこの家の者は、父に無斷で東京へ病氣のことを知らせたのであつた。その朝、三吉と四郎が顏を見せるまで、父は豫期もしてゐなかつたので、誰が東京へ知らせろと云つた、馬鹿野郎！　と、頭ごなしに叱られはしないかと、家のものはおどおどしてゐたが、さすがに、何年となく會はなかつた二人の息子の顏を見ることが出來て嬉しいらしく、いつもの短氣にも似ず、機嫌惡くぷりぷりするやうなことはなかつた。

醫師の診斷によれば、カタル性肺炎と云ふことで、三吉は新年號の仕事もあり、萬一のために四郎を殘して、一先づ小樽をひきあげることにした。

が、三吉が横濱に歸つて間もなく、小樽病院に入院すると云ふ電報に接したのであつた。旅嫌ひの母も、小樽行を決心しなければならなかつた。たつた一人の男孫の宏を連れ、五作に附添はれて旅に立つたのは、十一月の初旬のことであつた。

さうすると、雜司ヶ谷の家に殘るのは、炊事も何も出來ない、病身がちな、その上毎日母校に勤めに出なければならない榮子ひとりである。同居をいやがる四郎の女房をやうやう納得させて、蒲田の家をひきはらはせ、雜司ヶ谷の家へ來て炊事その他萬事をしきらせるやうに三吉が取計らつたのも、そのた

めであつた。

父の病氣は、雜司ヶ谷の家、蒲田の家、横濱弘明寺の家、それぞれに、小さな革命をもたらすことになつたのだ。四郎が釘工場を一時ひいて小樽に行つてゐる間、殘る女房子供の生計費は三吉の方で負擔し、四郎にはまた小遣を支給しなければならなかつた。父の死後は猶更のことである。葬儀を終つて一同は歸京したものの、今までは、とにかく遠く離れてゐたとは云へ、一家の支柱たる父が存命してゐれば、そこに薄弱ながらも傳統的統一があつたのに、一朝にして各人各個に生活の中心がばらばらとなり、さうして物質の負擔はひとり三吉の上に背負はされることになつてしまつた。

五作はどう云ふ事情によるか、父の存命中から、雜司ヶ谷の家を出て、大崎の方に友人數名と合宿のやうなことをやつて暮してゐた。大方學校が遠いので、父や母とも相談しての事であらうと、當時三吉としては、別段五作に學資を給與してゐるわけでもなし、また監督權もなし、深くその理由をただす必要も感じないのであつた。

一旦職を失つた四郎は、ますます深刻になる不景氣のため、容易に就職口をみつけることも出來なかつた。

三吉が時時雜司ヶ谷の家へ行つて見ると、母はいつもぽつねんと、瀬戸火鉢に手をかざしてゐた。

眼が霞んで、黒瞳と白眼の境界がうす濁りにぼやけてゐるのも、ひとしほの老衰を思はせた。

「小樽から何とも云つて來ないかね？」

三吉の顏を見ると、さう訊ねるのが母の口癖になつてゐた。

父の慰勞金のことであつた。いづれ春にでもなつたらと、先方から云ひだしたことで、母はそれのみを心待にしてゐるのであつた。七年間も獻身的に働いて、然も代表社員の地位にあつて死んだことでもあるし、一年を百圓に見積つても七百圓、まあ千圓ぐらゐはよこしてもいいと云ふ此方の肚であつた。が、三吉は全然そのことに望みを絶つてゐた。先方では、葬儀の費用を出しただけでも、つりが來ると思つてゐるに違ひないのであつた。

「まだ何とも云つて來ないが、まあ、あまり當にしないんだなあ。あんな金持の解らずやに、千圓やそこらの金で、恩に着せられるやうな思ひをしない方が、よつぽど氣がきいてゐる。」

三吉がさう云ふと、母は憤慨するのであつた。

「何も恩に着るのなんのと、そんなことないんだよ。あたりまへの事さ。よこさないつたつて、取るだけの權利がこつちにあるんだもの。」

「えらい事になつたなあ。」三吉は笑ひにまぎらした。

「一體お前たち、あんまり慾がなさすぎるよ。去年だつてさうさ。何もかも置いて來るなんて、そんな

馬鹿げたことが、……」

物慾のことになると、この老衰の母にもめざましく活氣が溢れ、言葉の端までが鋭く荒くなるのであつた。

去年と云ふのは、文子との戀愛事件で三吉が長崎町の家を棄てた時のことを云ふのであつた。家財什器一切、外に僅かばかりではあるが貯金まで、殘らず先妻の美代の方へ引渡したのであつた。母は何かと云へば、その事で不平を洩らすのであつた。巴里土産に、母へ黒天鵞絨の上等を三吉は持つて歸つたのを、襟卷だのその他何かに仕立ててやるつもりで預つておいたまま、それなりになつてしまつたのが母にとつて、かなりの心殘りであつた。

「毎月仕送をするとかつて、本當かえ？」

誰にきいたものか、母はそんなことまで云ひなじつた。

「することにはなつてるんだけれど、お父さんが死んだりなんかで、そんな餘裕なんかありやしない。」

「餘裕があつたつて、やることはないよ。……一體いくらよこせと云ふの？」

「月月七十圓。」

「ほ、七十圓あつたら、五作と宏を學校へやつて、樂に暮せるよ。……いつまでと云ふの？」

「雜誌記者とか、なんとか、まあ、そ云つた職業婦人にでもなつて、自活出來るまでと云ふんだが、そ

んな事云つてもきりがないから、十一月から、……去年のね、……向ふ一年間、月月七十圓づつ仕送して欲しいと云ふんだよ。」

「お前、出來ればやるつもりかえ？」

「ここに千圓も遊んでゐる金があつたら、一度期にやつてしまひたいくらゐなんだが、……實はね、間にたつてくれる人が色色心配してくれて、今度三百圓だけ一纏めにやつて、それも雜誌社から借金しての話なんだが、それでさつぱりと打切ることにしたんだ。」

「三百圓でね？」

母はまじまじと三吉の顏を眺め、まだ何か意にみたなさうであつた。

「自分で稼いでとつた金を、自分が好き勝手に使つたつていいぢやないですか。そのために、お母さんや子供達に不自由をさせると云ふわけぢやなし、……」

つひ三吉も聲を尖らして、つつかかると、母はぢきおどおどと、額を伏せるのであつた。

「お前が好きで、美代に金をやると云ふのを、誰も何とも云ふわけではないよ。それで綺麗に手を切ると云ふなら、……」

母はしよげきつて、眼をしばたたいた。

「ただね、五作だつて學校がまだあと二年もあるんだし、宏は、はひれる、はひれないは別としても、

今年は中學へいれなければならないし、それもこれも、みんなお前一人の肩にかかるんだからね、……それだから、今三百圓のなんのと、そんな金、なんだか泥溝にでも棄てるやうで、勿體ない氣がしたんだよ。」

「千圓が三百圓になつたら、やすいもんさ。」三吉は、わざとその場の空氣を輕くするやうに、冗談めいた口のききかたをして笑つた。

「だが、よくもまあ圖圖しく、緣の切れた人間に、一年も仕送してくれなんて、云へたものだね。わしらの國では、出來ない藝だよ。」

母は三吉の冗談笑ひに勢を得て、またにくていな口をきいた。

「美代は一體に口數がおほすぎて、……ああ云ふおしやべりの女、嫌ひだよ。縹緻だつて少しもよくはないし、……今度の方が、なんぼいいか解らない。第一、口が少いし……」

「第二に縹緻はよしか。」

母のお世辭を茶化すやうに、三吉はわざと云つて笑ひだした。

「本當だよ。縹緻よしだとも。」

母は大眞面目であつた。が、文子に對する母の批評が當つてゐる當つてゐないは別として、今では三吉夫婦しかたよりになる人間のゐない事を、母が自覺してゐることは、さう云ふ言葉のはしにも顯める

のであつた。

春になつて暖かくなつたら、横濱へ行くよと、母はこれも口癖のやうに云ふのであつた。

「櫻の咲く頃までは、弘明寺にゐるつもりだから、……」と、三吉も、是非一度横濱へ母の來ることをすすめた。

弘明寺の三吉の家は、秋には芒が繁つたり、野生のコスモスが咲いたりする原つばに面してゐた。その原つばを越して、まん前に、大岡川の堤につらなる櫻並木が見えるのであつた。花時になれば、緣側にゐながら櫻を眺められることを思ひ、四月までは、とにもかくにも、弘明寺からは動くまいときめてゐた。

「早く暖かくなるといいわ。雜司ヶ谷のお母さんに來ていただくんだから。」

文子も四月になるのを心待にしてゐた。

それだのに三吉は、今まで消極的に、强ひて自分から逼塞するやうにしてゐた氣持が、にはかに鬱勃として來るのを感じた。父の死後、文子と二人きりのひそやかな獨善的生活に閉ぢ籠つてゐられなくなつたのも、彼の鬱勃たる意氣をあふる一つの因をなした。それに、近く或る新聞に連載小說を書くことになつたので、それを機會に、靜かではあるが、便利のよくない横濱をひきあげ、東京に居を移すことにした。

これを一轉機として、もつと積極的に仕事もし、世の中へも顏をさらけ出さうと、さう云ふやうな氣持から、東京もわざと郊外を避け、都塵にうづまるつもりで牛込の矢來に家を搜し、平生はどこか姑息因循でありながら、いざとなれば極端なほど一氣に物事を決する三吉の癖で、二月にはもう矢來の住人になつてゐた。

「折角横濱の櫻を見に行かうと、樂しみにしてゐたんだよつて、お母さん云つてらしつたわ。」

或時、文子が雜司ヶ谷へ行つて來ての話であつた。

「でも、牛込だと近いし、そのうち四郎さんに連れて來て貰ふんですつて。乘物はいやだから、歩いてですつてよ。杖をついて。」

その、杖と云ふ言葉が、强く三吉の頭に來た。そとへなんか出ることもなく、一生をうちでばかり過して來たやうな母であつた。その母が杖をついて、足元も危つかしく歩く姿を、三吉は嘗て想像したこともなかつた。小づくりな人で、腰も少しくの字に曲り、なほのこと背は低く、顏も小さく、眼は、三吉兄弟もみんなそれをうけついでゐるのだが、人一倍大きく、幾らか險はあつても、今では霞んで生氣のないものであつた。遺傳的なリユーマチで、指指の節が多少まがり加減になつてゐる、その手に竹の杖でもしつかり握つて、目白の通を、年中脚氣の氣味で躓きがちな足を、古風な內輪にそろそろと運んで來る恰好が、眼をつぶると三吉にありありと見えるやうな氣がして、はかない感じを抱きながらも、

然し心待にその日を待つのであつた。

夜、電燈を消し、眞暗な部屋に三吉は寢て、さうした母の、杖をついて、とぼとぼとやつて來る姿を、闇の中に何度も描いて見た。その母は眼を瞠つたまま、執拗に三吉の方をいつまでもいつまでも、ぢつと見つめてゐるのであつた。母の眼は、何事かを三吉に語らう、訴へようとしてゐるのであつた。

それは勿論、日頃から三吉が母の心を推量してゐる事柄に關聯して、三吉自身描きだすところの幻影にすぎなかつた。その幻影を描きだされた母の、何事かを訴へ語らうとしながら、ぢつと三吉を見つめてゐる眼の意味は、五作に繋がるものであつた。

五作は末つ子で、然も海馬島まで落ちて行つて、母と艱難を共にした、いとし兒であつた。母は老後を五作によつて養はれようと、それのみ思つてゐたのだ。五作もまた、中學の課程を終へたら、すぐに月給取にでもなつて、母を扶養しようと、明治學院の普通部を卒業する間際まで考へてゐたのだが、やはり知識慾に負け、高等部へ、それでも將來を慮かつて商科にはひつたのであつた。

どうぞ無事に、五作が學校卒業出來るやうにしてやつてくれと、沈默の間にも三吉に向つて呼びかけてゐる母を、彼は思ふのであつた。それと、もう一つは、五作と互に許しあつてゐる、或る若い娘のことである。一度母は、三吉にその娘のことを告げて、將來二人を一緒にさせてやつてくれるやう頼んだのであつた。

母がしきりに三吉の家へ來たがつてゐるのも、あらためて懇懇と、五作のことに就いて話しておきたいからであらうとは、かねてから彼の想像するところであつた。

それだのに、母が矢來の家を訪れる日の來る前に、あの××黨事件が勃發したのだ。

三月七日、つづいて三月十五日、次次に殆んど全日本を襲つた××黨檢擧の津波は、五作をも浚つて行つてしまつた。

「五作の奴、すつかり赤くなつちまやがつたよ。まるで余市林檎かトマトーさ。」

無學の四郎が、自分ではよつぽどうまい警句を吐いたつもりで、あはあは上機嫌に笑つての話であつた。三吉がまだ弘明寺にゐた頃であつた。四郎は職のないままに、時時は大崎の合宿へ遊びに行くらしく、そのついでには横濱の兄の方へまはつて、晩に一杯御馳走になり、好き勝手な話をするのであつた。

父の病氣で、最初三吉と一緒に小樽へ行くことになつた時、四郎は滿足な旅裝もなく、三吉が巴里で作つた、とてもハイカラな、胴のつまつた洋服を借りに行くことにした。その洋服は、あまりしやれ過ぎ、氣恥づかしくて、日本に歸つてから三吉は一度も着たことはないのであつた。それを四郎は、得得として、これ見よがしに、外出毎に着て出る恰好は、職工のくせに紳士ぶる、つまり孔雀の尾をつけた鴉と云つた感じで、滑稽でもあり、また彼の心理を考へれば不憫でもあつた。

津輕海峽をわたる連絡船では、一人一人船客の姓名職業等を書いて出すことになつてゐるのだが、小樽からの歸り、その船上で皆の分を五作がひきうけて書いて行くうち、四郎の職業のところで、ちよつと鉛筆をなめつて思案しながら、

「職工か。」

さう獨語して書かうとすると、あわてて横合から四郎が口を尖らして云つたものである。

「會社員だよ。職工だなんて、やめてくれ。」

「だつて、職工に違ひないんだもの。」

五作がどこまでも追究するのを、はねかへすやうに四郎は反身になり、例の、からだにぴつちりと食ひこむ程のしやれた上着の胸前を兩手につかんで、ぐつと引きさげて威張つて見せた。

「なんでえ！　職工職工つて云ふなえ。人聞が惡いや。」

すると五作は、憐むともつかず、皮肉ともつかない笑ひを浮べた。

「馬鹿だなあ。今に、會社員なんかより、職工の方がうんとえらくなる時代が來るのを知らないんだから。」

「そら、またはじまつた。」

それなり四郎は、わざととりあはないやうに、船室から甲板の方へ出て行つた。

四郎には全くプロレタリア意識なんかないのであつた。

「をかしなもんだ。俺なんか一時も早く脱いでしまひたいと思つてゐるのに五作の奴、菜つぱ服を着たいつてんだから。」

或夜弘明寺へ來ての話であつた。

「研究のためとか云ふんだから、それでもいいのか知れないが、とにかく物好きなもんだ。學生なんて暇があつて、贅澤だよ。金は親や兄弟から貰へるんで、のんき至極なものさ。」

「五作が工場生活でもすると云ふのか？」

「さう云ふわけでもないんだらうが。……今日合宿へ行つたら、連中がそんな話をするもんで、そんなら、五作に、俺とかはらうかつて云つてやつたよ。お前は俺の工場へ勤める。俺はそのかはりに、何か勉强させてもらはうつて。」

「工場生活をすると云つても、そいつは勞働をするのが主ぢやないんだらうよ。……」

工場勞働者のなかへはひつて行つて、たとへば四郎のやうに、まだ眼覺めようともしない職工を教化し、階級闘爭に奮起させるのが彼等の目的であらうと、三吉は想像しながら、それを口に出しては語らなかつた。

五作が同志數人と大崎に家を一軒借りて、そこでどう云ふ事をしてゐるのか、おほよそ三吉にも解つ

て來た。五作はもと、明治學院普通部時代には、文藝部に屬し、雜誌に詩や小說を發表したり、ハモニカのバンドを組織したりして、藝術的方面に才能を發揮することを努めてゐたのであるが、いつかしら、當代青年の一樣にひしめき走るめざましい思想の流に合流してゐたのである。普通部を終つたら、實社會に出てサラリー・マンになり、母を扶養しようなどと云ふ殊勝な心根の消滅したのも、恐らく彼の思想轉換に原因すると云つていいであらう。さうして、高等部にすすんでからは、當時文壇でも最左翼と目されてゐた「文藝戰線」にすら飽き足らずとして、「文化批判」と云ふ雜誌を起したくらゐであつた。

文學藝術と云ふものから、五作の心はまつたく離れそむいてゐた。早晩××運動に赴かずにはゐられないであらうとは、三吉の豫想してゐたところであつた。

ロシア革命十周年祭には檢束されるかも知れないとか、大崎の住所は絕對祕密にしておいて下さいとか、××黨の黨歌の草案をつくつてゐますとか、さう云ふ手紙がよく三吉のところへ來た。父が死んでから、月に一度は、金をもらひに横濱へ來るのだが、本所公會堂で建國會撲滅演說會を開いた時、散會後街上にデモンストレーションをやつて××と搏鬪したとか、そんな話を、熱のある口調で、眼を輝かし、三吉に語りきかすのであつた。

二十年前のことである。三吉は中學五年の暑中休暇に、小樽から福山へ歸省したのだが、汽車で函館まで、それから汽船で海上六時間福山港へ着くのを、生憎その日は船が出ないと聞き、彼は一日待つの

をもどかしく思ひ、下駄ばきのまま二日がかりで、陸上二十五里の道を歩いたのであつた。夕方疲れきつた足をひきずつて、松前藩時代の唯一の名殘である三重の城近い松城町の、二抱もある櫻を前庭に持つ家に辿りついて見ると、空にはびこる櫻の蔭で一層黃昏の色を濃くただよはしてゐる門口に、母が赤兒を背負つて、ちやうど張板をとりこむところであつた。

いつ歸るとも前觸のない三吉の姿をすかし眺めて、母は一旦とりあげた張板を下におき、口をほつかりと開けたままであつた。

「歩いて來たよ。船が出ないんで。」

「下駄がけで、……まあ！」

母はあきれ、且つよろこんで、いそいそと內へはひつて行つたが、その時背に眠つてゐる髮の毛のうすい赤兒の頭が、うしろざまにがつくりと反りかへつた。その赤兒こそ、三吉がはじめて見る弟の五作であつた。

流行なのか、カラをつけない襟の低い學校の制服に、太い首筋を見せ、顏も大柄でいかつく、髮をながく波うたせ、三吉をも凌ぐくらゐの背丈にのびた現在の五作をしみじみと眺めながら、三吉は二十年前故郷に歸省した日の葉櫻蔭の夕暮を思ひだすのであつた。

「福山の墓へ骨を納めに、今年は行くつもりだが、お前も行くか？」

「別に行きたくもないけれど、……」

氣の乘らない返辭であつた。

「お前の生れた家なんか、覺えはないだらう。今あるかなあ。もうないかも知れない。あの櫻の樹だけはあると思ふが。……どうだらう、お母さんは行けるかしら？」

「行く氣があつたら、行けないことはないでせう。」

「今度雜司ヶ谷へ行つたら、お前からも云つて見な。……時時は雜司ヶ谷へ行くんだらう？」

「行つてます。」

「お母さんは、五作のおまんまを食べないうちは、どんな事があつても死なないつて云つてるさうだ。本當か？」

「ふん、……いつの事だか。」

五作は苦笑して眼をそらすのであつた。

「何をやるのもいいが、學校へ行つてゐる以上は、滿足にちやんと卒業だけはするやうにするんだな。」

「ええ。」

煮えきらない返辭だと思つてゐると、或日學院から葉書が來た。四月から十二月までの授業時間數六百二十九時間、そのうち缺席が二百七時間、かう缺席勝では修學上はなはだ遺憾であると云ふ注意であつた。

學校のことに就いて、よく五作の意見を質さうと思ひながら、三吉も仕事がせはしく、そこへ東京轉住のことがあつたりして、ゆつくり會ふ機會を持たないでゐるうち、折柄の總選擧に彼もまた××黨のために運動をしてゐるやうであつた。

越えて三月、あの事變であつた。

或日のこと、水島ちゑ子と云ふ娘が矢來の家へ、五作さんのことで伺ひましたと云つて來た。

日あたりのいい二階の書齋に、火鉢をさしはさんで主客は相對したが、あかるい陽射の照り映えで、その娘の丸顏は一層健康さうな色つやに見えた。剃刀をあてたこともないらしく、西洋の女のやうに生毛がめだつて、それが野生的な好感を與へると同時に、くるつとした眼にも愛くるしさがあつた。

「五作さんが二十日にあげられたつてことを、昨日きいたもんですから、……」

やや早言葉で、ちゑ子は前後の事情を物語るのであつた。母が云つたのは、この娘のことであつた。彼女は、今、自分の愛人が警察にあげられてゐるのに少しもしよげる風はなく、女性の若若しいしなやかさの中にも、敢然とした强い意志をほの見せ、清爽の感じであつた。

日本橋の或る株屋の小僧さんが、何かのことで、五作のあげられてゐると同じ警察へ拘留されたのが、二十六日目の日に出ることになつて、その時五作から、そつと、これこれの水島ちゑ子と云ふ人のと

ろへ、ここに檢束されてゐることを知らせてくれと賴まれたのであつた。その小僧さんの手紙を見て、ちゑ子は昨日(二十七日)日本橋のその株屋へ、ともかく行つて見ると、主人は親切な人で、一緒に大崎の五作達の合宿へまで行つてくれたと云ふことである。

その合宿の家はしまつてゐた。前の植木屋できくと、いつの間にか一人ゐなくなり、二人ゐなくなりしたと云ふのであつた。

「大崎の署から日本橋の方へまはされたらしいんですのよ。四人ですつて。」

「何か差入の必要があるかしら?」

「紙が欲しいやうな話ですけど、……でも、うつかり行けませんわ。僞名してゐるのかどうか、それも解りませんし。」

「君なんか行つちや駄目だよ。……大崎の家には、女の人もゐた筈だが、どうしたらう?」

「芳子さんやつぱりあげられたらしいんです。拷問でもされたら、どんなことになるだらうかと、思つてもぞつとしますわ。」

さすがにちゑ子は肩をつぼめ、顏をしかめた。

「五作達もやられるんだらうねえ。」

「でも仕方がないと思ひますわ。四人別別の部屋にゐるんですつて。その小僧さんに聞きましたの。英

語でもつて、大聲だして話しあつてゐますつて。何だか、絕食してゐるらしいとも、云つてましたわ。」

默つて成行きを見るより外に方法はないと三吉は思つた。

「雜司ヶ谷のお母さんには、勿論知らせないでせうね?」

ちゑ子はいそがしく顏を横に振つた。

「わたし、雜司ヶ谷のお宅へは、わざと行かないことにしてゐますの。」

「大橋さんにも默つておきなさい。」

「ええ。」

大橋さんと云ふのは、三吉の姉の榮子と同じ學校出で、やはりその母校へ勤めてゐる獨身の女性であつた。住居は雜司ヶ谷の家に近く、五作がそこへ遊びに行つてゐる間に、ちゑ子と知合になつたのである。それだから、五作とちゑ子との事に就いては、大橋さんにも多少の責任があるのであつた。

何はともあれ、五作檢擧のことを、母には絕對に知らせないやうにと、三吉は皆にいましめておいた。殊に弟の四郎は、口輕屋なので、嚴重に注意をしておく必要があつた。

「五作が此頃ちつとも顏を見せないとか、……そんなことをお母さんが云ひでもしたら、いい加減にあしらつておくんだぞ。學校の方がせはしいんだらうとか、なんでも友達と旅行に行つてゐるやうな話だ

とか、うまくその場をごまかしておけ。警察へあげられてゐるなんて、冗談にも云つちやいかん。」

「大丈夫ですよ。云ひやしないから。」

四郎は口ではさう云つても、にやにや笑ひをしてゐるところを見ると、こいつ、何かほのめかすやうな事を云つては、お母さんをからかつてるんぢやないかと、不安に思はれた。

母と四郎とは、あまり好い仲ではないのであつた。四郎のところにも女の子二人あるのに、その方の孫には少しも眼をかけないで、ただ五作と宏とだけを可愛がつてゐる母は、自然と四郎の反感を買ふのも道理であつた。

四月になつて或日の早朝、大橋さんが駈けこむやうにしてやつて來た。茶の間で三吉が新聞を讀んでゐるところへ、彼女はぴつたり坐つて挨拶もそこそこに、

「三吉さん、あんまりよ。どうしてすぐに知らして下さらなかつたの？」

笠にかかるやうにいきなり云はれて、三吉も面喰らつた。

「何のことです？」

「五作さんのことよ。」

「あッ！　あいつまた、おしやべりしやがつたな、……四郎の奴！」三吉は強く舌打した。

「おしやべりぢやないわよ。知らしてくれるのが當然ですわ。」

「あなたの方では、當然と思ふかも知れないが、……あなたばかりぢやないよ、……母にしろ、姉にしろ、あとで知つたら、なぜその時知らせてくれなかつたかと、不平を云ふかも知れない。けれども、こんな事は、知つたつて知らないたつて、なるやうにしかならないんだし、なまじつか母なんかに知らせるより、假に五作なら五作が、殺されるなりどうされるなりしてから、云つたつて、……その方がつまり、餘計な苦勞を母にさせないで濟むから、今度は僕は、知らしむべからず主義をとつたわけなんです。」

「違つてよ、違つてよ。お母さんやお姉さんは別よ。わたしにだけは、どうしたつて知らせてくれなければ。……ぢや、三吉さん、あんたは、わたしがお母さんやお姉さんに、おしやべりすると思つたの？……わたしなんぼ馬鹿だつて、そんな女ぢやないわよ。」

よつぽど口惜しいと見え、涙ぐんでゐた。ちゐ子と五作とのことに責任があるので、それで大橋さんはかうまで躍起になるのであつた。

差入れも何もしないで、ほつておいて下さいと三吉が云つても、大橋さんはいつかなきく事ではなかつた。

「いいのよ。わたしは、わたしの氣の濟むやうにするだけなんですから。知らないうちは兎も角、知つた以上は默つてゐられないわ。」

中一日おいて、大橋さんは四郎と二人でまた矢來にやつて來た。シヤツ、猿股、紙、齒磨、そんなも

のを差入れして來たと云ふのである。面會は出來なかつたが、主任の人の話では、元氣でゐるとの事であつた。

「起訴されるやうなこと、なささうですわ。學生は、そんなに重く見てゐないやうよ。」

「起訴されるなら、されたで、いいぢやないですか。」

三吉はやや反抗的な氣持になつてゐた。それには、文子の弟のこともあるのであつた。鵠沼に住んでゐる文子の兄から、葉書で、常雄も三月十五日の嵐に捲きこまれたと知らせて來てゐた。神戸の親戚の店に働いてゐたのを、とびだして、去年から尼ヶ崎の××黨支部に書記を勤めてゐたのであつた。

「これの弟も、神戸の方であげられてゐるんですよ。」

三吉は、長火鉢の向側に、いつもどほり無口なままおし默つてゐる文子を、顎でさし示した。

「これはもう、起訴にきまつてるんだ。」

「まあ、さうでしたの。御心配ですわねえ。でも、あながち起訴とは限らないんぢやないの。」

「それは解りませんけれど、どうなつても、仕方がないと思つてゐるより外はないんですもの。」

文子は寂しく微笑するのであつた。

四月十日にやうやう××黨事件も解禁されて、各新聞は殆ど全紙面をあげてその報道につとめた。

その翌日、二十九日間の拘留を終つて五作は十八日朝九時前に釋放されると云ふ報告を、四郎は矢來

の兄のところへ持つて來た。

「大橋さんと僕と、二人で、十八日の朝警察へ行くことにします。」四郎が云ふのであつた。

「大橋さんには氣の毒だが、ぢや、さうしてもらはう。一先づここへ連れて來るんだぞ。雜司ヶ谷へすぐ行つちやいかん。」

「さうしよつて、大橋さんも云つてゐた。」

「お母さんには、云ひやしないだらうな？」

三吉は四郎の顏色を探るやうに、鋭い眼でぢつと見つめた。

「云ふもんですか。」

「云はなければいい。……だが、お母さん何も訊きやしないか、――五作はどうしたらうとか、なんとか。」

「ちつとも此頃來ないね、とか、時時獨語みたいに云つてるけれど、とりあはないやうにしてゐるんです。……ああ、さうさう、」と、四郎はすぐ陽氣になる持前で、手をたたきさうにしながら、肩をゆすつて笑ふのであつた。

父がもと使つてゐた眼鏡を鼻の先へかけて、昨夜母は一生懸命新聞を讀んでゐたと云ふのである。

五作がまだ雜司ヶ谷の家にゐた頃、寄り集る同志等の會話を、母は、完全に理解する事は出來ないま

でも、そのなかから何かしら小耳にはさんでゐることがある筈であつた。それだから、母が、××黨事件の新聞記事を讀んで、それと、一ヶ月も顏を見せない五作とを結びつけて、忌はしい想像にかられないとは、云へないのであつた。

「いくらかお母さんも、感づいてるんぢやないかと思ふなあ。ゆうべの、あの、新聞に嚙りついてる熱心な恰好から見れば。……とてもそれや、眼を皿のやうにして。」

事あれかしに、面白がつて云ふ四郎を、三吉は睨むやうにした。

「お前がまた、何かほのめかすやうな事を云つたんだらう。」

「嘘ですよ。」

三吉は四郎を信用することは出來なかつた。が、十八日には警察から出ることにもなつたし、どうせ遲かれ早かれ母の耳にもはひるのだから、もうやかましく云ふ必要もないと思つた。

巷の騷音もあまり響いて來ない、閑靜な矢來の街に、家家の塀圍からのりだしてゐる櫻が、輝く春の陽射のなかに散つて行つた。

弘明寺の櫻も散つたであらうし、さう思へば、母が横濱行を樂みにしてゐるうち、三吉の方で東京へ移りすむやうになり、それなら春になり次第矢來へ行かうと、さう云ふ約束のところ、五作の事件で、もう花時も過ぎるのに、そのままになつてゐることなどが、自然三吉の思案にのぼつて來るのであつた。

今度のことがあつて、猶更母は五作の將來を案じ、それに就いては、五作に對する三吉の意中も知りたく、矢來の家へ來たがつてゐる模樣であつたが、風邪の加減で思ふにまかせないやうであつた。はつきりとは口にしないが、時時四郎が來て、五作は學院の方はどうなるのだらうとか、ああやつてぶらぶらしてゐたんでは、お母さんも心配だらうとか、暗に云ふのも、すべて母の指圖で三吉の意のあるところを、それとはなし探るつもりに相違ないことは、三吉にもよく解るのであつた。

「××の××××は大丈夫だ。××××××ゐないよ。」

警察を出た日、大橋さんと四郎とに迎へられて、五作は、やはり學生の同志と二人、矢來の家に來ると、玄關にあがるや否や、だしぬけにひどく興奮した風に云ふのであつた。

緣側に近い日向に三吉はゐて、それを聞くと苦蟲を嚙みつぶしたやうな、嫌な顏をした。××の××××だなんて、齒の浮く感じで、とても我慢がならないのであつた。が、三十日間も閉ぢ籠められて、自由勝手な言葉を使ふことの出來なかつた彼等二人は、檢擧當時のことや拘留中のことを、のべつ幕なしにしやべりたてるのであつた。續けざまにバットを吸ひつける、その指先は、癲癇やみのやうにぶるぶる震へてゐた。

興奮してゐる時に何か云つても、却て反抗心を募らすばかりだから、今日は默つてゐようと、三吉は、わざと無關心を裝うて、相手にもならなかつた。

彼等は今夜からでもまたすぐ運動に着手することが出來るものと、樂觀視してゐたのであつた。それが、一日二日日を經て見ると、もう手も足も出ないまでに、彼等の運動が完全に阻止されてしまつたことが解つたのであつた。

數日過ぎて五作がやつて來た。

「俺は××なんてえもの、大嫌ひだよ。」

のつけから三吉は、反動的にきりだした。さう云はれると、ちよつと五作は兄の顏を、額越しに見るやうにしたが、學校の服で、それまできちんと膝を折つてゐたのを、あぐらになつて、バットを強ひて深く吸ひこむと、横の方へぷうと勢こめて吐きだした。兄に云はれた冒頭の一句で、彼は反抗の態度をとつたのであつた。

「とにかく俺は、俺の生活を脅かすやうなものは、御免蒙りたいんだ。××が起つたら、俺は俺の生活を護るためには、斷じて××軍に楯をつくつもりだ。云つておくが、俺の生活と云ふのは、俺一人の生活ぢやないんだ。俺には、扶養しなければならない人間が、幾人かある。俺の生活には、それらの人達の生活がみんな含められてゐるんだ。さう云ふ人達の生活を誰かが保障してくれて、俺は俺一人で自由勝手な行動をとれるのだつたら、それや、どんなアクションに出るか解らないさ。だが、俺は何も、俺の家族の生活を誰かに保障なんかして貰はうとは思やしない。俺はどこまでも、家族を扶養するよ。た

だ、俺の家族を扶養し得る狀態に、俺はおいて貰ひたいんだ。お前は、家族制度は既に崩壞したなんてえことを云つてるが、冗談ぢやない、崩壞なんか、ちつともしやしないよ。現に、家族制度は既に崩壞したなんてことを云つてゐるお前自身、家族の一員になつて、俺の扶養をうけてゐるんぢやないか。お前が、俺の思想に反抗するならするで、それは、自由だ。そのかはり、物質的に、俺の世話にならないやうにしてくれ。家族制度が破壞したつて、そいつは構やしない。家族がめいめい獨立の生計さへたてくれれば、家長なんてものは、いやでも存在しなくなるさ。俺は二十の時、親父に反抗したよ。親父に反抗すると同時に、俺は出奔して、それ以來、親父の世話になんかなりやしないんだ。親子の間だつて、兄弟の間だつて、金錢をおいて何の情愛ぞやだ。その點、俺は物質主義者だ。くどいやうだが、もう一度云つておく。俺の思想に文句があるなら、今後俺から鐚一文貰はないやうにして、その上で立派に文句を云つてくれ。」

五作は横を向いたまま、持前の口を尖らしながら、默つてバットばかりふかしてゐた。

いつもどほり月の末に、三吉が金を持つて雜司ヶ谷へ行くと、玄關次の薄暗い三疊に、母は氣むづかしさうな青い顏で寢てゐた。風だと云ふのであつた。

「ものは食べられるの？」

座敷の方から三吉が聲をかけると、母は聞きとれないことを云ひながら、横になつてゐたのを起きなほり、床の上に坐るやうにして、額を枕におしあてた。そんなふうに動作が出來るくらゐなら、たいして惡いのでもあるまいと、あまり三吉は氣づかひもしないのであつた。それに、病氣には極めて神經質な姉の榮子もゐることだし、粗漏なことのありさうにも思はれなかつた。

五作は二階にゐると云ふので、三吉はあがつて行つて小遣を渡した。

「學問を勉强するために、學校へ行きたいと云ふんなら、いくらでも俺はやつてやるよ。明治學院がいやなら、早稻田でも何處でもいい。よく考へておけ。」

「考へておきます。」

それだけの應待で、あとは、これもいつもどほり、あまり母とも言葉をかはさずに、三吉はすうと歸るのであつた。

十日とたたないうちであつた。四郎が、母の容態はしくないことを告げに來た。

「醫者は流感だと云つてるんだが、……」

四郎の云ひたいのは、然し母の容態よりも外のことであつた。三吉が五作に對してひどく頑固な態度をとつてゐると、母は考へて、三吉をおこらしては、まだ一人前になつてゐない五作の行く末が案ぜられる、それだから、五作に、矢來へ行つて手をついて謝つて來いと、かう云つたと云ふのである。

「俺は頑固だとは思はないよ。」

母の心事には同情しながら、三吉は自說を飜さうとはしなかつた。

「學校へ行つて學問を勉强したいと云ふなら、大學だつて何だつて、卒業するまでは面倒見ると、俺は云つてるんだ。さうでなくつて、ソヴイエットロシアがどうしたとか、××主義がどうしたとか、××だとか何とか、そんなことをするなら、俺の世話になんかなつてやるんぢや、やり榮えがしないだらう、それだから、自立でやつたがよからうと、かう云ふんだよ、俺は。……これほど物解りのいい兄貴はないと思ふがね。」

「お母さんは、その、××主義とか何とか、さう云ふ怖ろしいものから五作が手を切るやうに、兄さんの力でしてやつてくれと、かう云ふ肚だと思ふんです。」

「怖ろしいものだかどうだか、それは俺には判斷がつかんね、……だけど、俺の力で、五作の思想をどうしようの斯うしようのと、それは出來んぜ。俺はただ、五作に金をやるかやらないか、その二つの能力があるだけさ。」

が、三吉はそんな事を云ひながら、心では、昔父の無理解に反抗して立つた時代のことを思ひ起してゐた。彼は歲四十に近くはあつても、まだ想念の硬化には達しないで、かなり現代に對する敏感性を持つてゐるだけ、口では意地强く反動的な言辭をはいても、それが彼の全部とは云へないのであつた。五

作は弟ではあるが、云はば三吉五作の問題は「父と子」の問題であつた。それに當面して、彼は昔父に反抗したことを思ひ、それと今と照らしあはせて多少の矛盾煩悶を感ぜずにはゐられなかつた。

五月の細雨は、毎日のやうに鬱陶しく降りつづいてゐた。明日の日曜は、鎌倉のY先生を久し振に訪問しようと思つてゐたのに四郎の報告で母の容態も氣づかはしく、頭をおしつけられるやうな空の重さを感じながら、三吉は雜司ヶ谷へ行つて見た。

四郎と五作は下の座敷で、面白半分に、何かの空罐を利用して、母のためにアイスクリームを作つてゐる最中であつた。

病床は二階に移されてゐた。天井から吊つた氷嚢を額にあて、ぢつと仰向いてゐる母の顏は、しなびて、土氣色に見えた。

「醫者はね、流感だと云ふんだよ。もう、熟も出ないし、あと、一週間も寢てゐれば、よくなるつて。」

母は痰のからまる嗄れ聲で、きれぎれに云ふのであつた。

「それならもう安心だ。安靜にさへしてゐれば。」

さう云つて三吉が枕許に坐るのを、母はつぶらな眼で、絶えず見まもつてゐた。

「まだまだ、死ねないよ。もう五年は、どんな事があつたつて、死ぬもんか。」

氷嚢がのつてゐるために顏は動かせないので、眼の球だけが横の方へぎろりとまはつて、三吉に注がれるのであつた。三吉はぞつとした。執念の眼を見る思ひがした。小學生時代、解剖の實驗に、三吉は猫の首に細引を結はいつけ、締める役目をひきうけたことがあつた。その時、息が絶え絶えになりながら、三吉の顏を恨めしさうにぢつと睨みすゑた猫の眼が、今の母の眼とそつくりの氣がした。

「何も、死ぬの生きるのと、そんなむづかしい病氣ぢやないんだから、大丈夫だよ。」

ちやうどそこへ、アイスクリームを持つて四郎と五作があがつて來た。いいしほにして三吉は枕許をはなれた。

たつた一匙たべたきりであつた。

「五作、お前、それ、三吉によくお願ひしな。……三吉、賴むからね。」

母は、アイスクリームどころではないのであつた。

「五作の事なら、もうよく解つてるんですよ、お母さん。ちやんと話はついてるんです。心配はいりません。」

しめきつた部屋の蒸し蒸しさに、三吉は腰障子の端を少しあけて見た。黝んだ瓦屋根の不規律な並びの間に、雜木の群を拔いて大公孫樹が、梢を少し南方に傾け、曇空を壓して若葉に繁りたつてゐた。

冬になると、黃葉をすつかりふるひ落とし、枝枝がみんな南へ南へと弓のやうにしなつてゐる素裸の姿を見せるのであつた。眞夏には、青葉の火焰を天に向つて吹くがやうに、壯烈な偉觀を示すのであつ

た。早稻田の大學に學んでゐる時代から、三吉の見馴れた公孫樹であつた。

姉は赤十字で大手術を二度もうけ、病氣手當の要領をよく會得してゐるので、特等看護婦。四郎は小樽病院で一ヶ月も病父に附添つた經驗があるので、一等看護卒。五作は二等看護卒。四郎の女の子二人これは見習看護婦。……そんな具合になつてゐるのだと、四郎五作が、愉快さうに三吉に報告したのも、その日であつた。

「病人一人に、看護婦ばかり何人もゐて、……」

母もうつて變つて、晴れ晴れした顏で笑ふのであつた。二週間たらずで、この母に永別しようとは、誰が豫想したであらう。

安心して三吉は雜司ヶ谷の家を出たのであるが、その家に於て生ける母を見たのは、それが最後であつた。

季節季節のその公孫樹の姿を望見する毎に、三吉は在りしその日の病床を追想し、とりかへしのつかない不覺の思ひに、悔恨の念にかられるのであつた。

昨夜雜司ヶ谷の大學病院に、病名不詳のまま入院したと、四郎が知らせに來たのは、その日から僅三日の後であつた。

「五作のおまんまを食べないうちは、死にきれない。」

母の執念は、死ぬまで五作の上にあつた。

前年父が小樽で死んだ時、三吉は葬式の朝に行つたのであつた。着くとすぐ、旅裝をといて紋服にあらため、既に納棺されてあつた父に三吉は對面したのであるが、頭を綺麗に剃り、深い眼を、眠つてゐるやうに靜かに閉ぢ、頰は痩せ衰へてゐても、口許のあたり平和で、死相と云ふやうなものは少しも現はれてはゐなかつた。

「いい佛樣になりました。」

三吉は手をあはせ、拜みながら云つたのであつた。

最後の日、父は一同を呼んで、今夜かぎり自分の命は持たないことを告げたと云ふことであつた。會社の方の事務も一切引繼ぎ、遺言もして、さうしてその夜、眞夜中をすぎて二時、自分で豫言した如く永眠したことを、人々は三吉に話し、その大往生を稱讃するのであつた。

それにくらべて、母の死顏には、何と云ふ淺ましい煩惱の相が、醜く殘されてゐることだらうと、三吉はしみじみ考へた。が、淺ましく醜い死相であるだけに、母が現世に殘した妄執の程も察せられ、三吉としても心殘りは增すのであつた。

急に跳ね起きて、病弱の身のどこにそれほどの力があるのか、五作と文子と二人がかりで寢かせよう